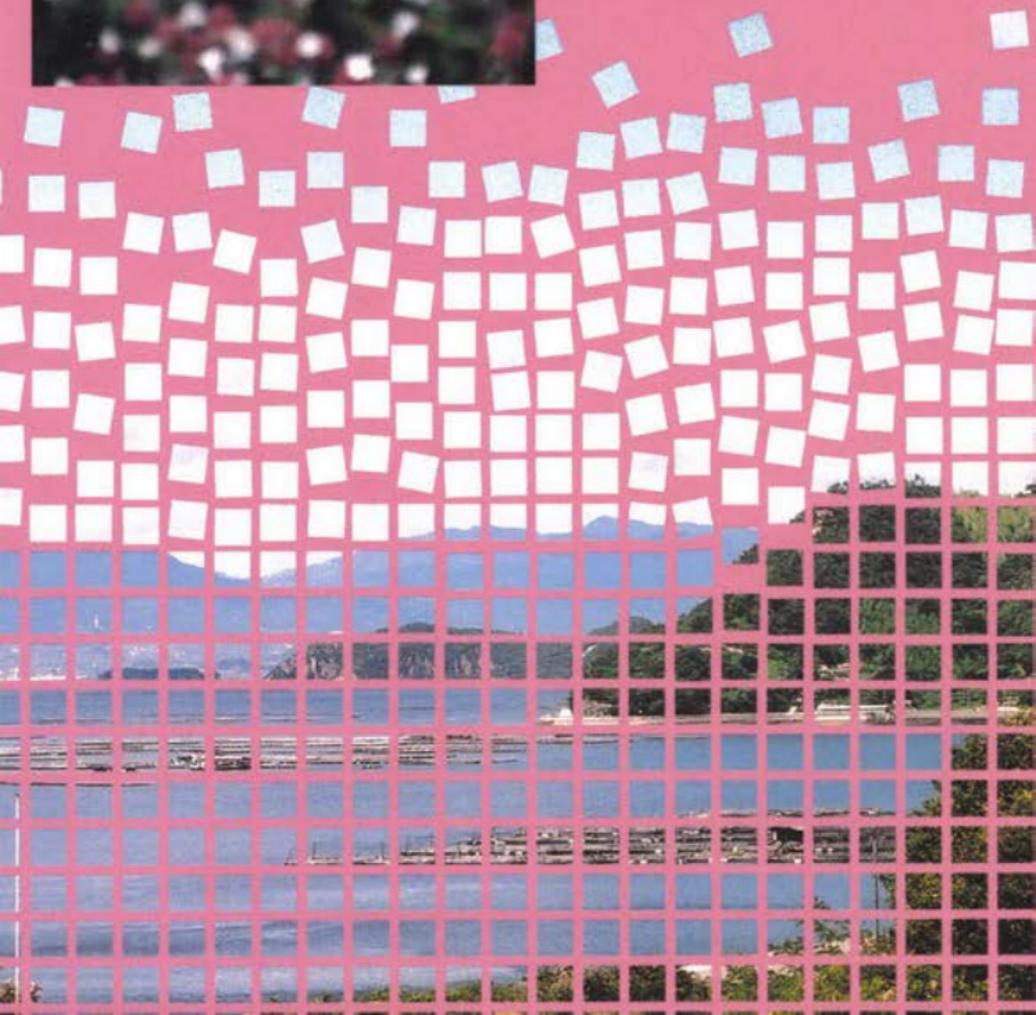


日本への回帰

第38集

平成14年 江田島合宿レポート



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

日本への回帰

(第三十八集)

——第四十七回全国学生青年合宿教室（江田島）の記録より——

はしがき

これまで邦人拉致を全面否定してゐた北朝鮮ではあつたが、小泉純一郎首相の訪問（九月十七日）による首脳会談の場で、金正日総書記は日本人拉致の事実を認めて謝罪した。その際、かねて日本側が拉致と認定してゐる「八件十一人」に対して、北は「四人生存、八人死亡」との安否情報を伝へ、金総書記は「関係者はすべて処分した。おわびをしたい」旨を発言したといふのである（その後、政府は十件十五人の拉致を認定。さらに七、八十人はゐると救出団体は見えてゐる。一方、北は政府認定以外の一人の生存を明らかにした）。邦人拉致事件の発生以来、二十四年余を経て、やうやく拉致問題の解決が現実の国家的課題となつたのである。

「拉致は捏造であつて共和国への悪質な中傷である」として、これまで何度、北は交渉の席を蹴つて退出したことだらうか。その態度があまりに強硬で頑な^{かたくな}ため、日本側は拉致追及を「行方不明者の調査」といふことで妥協し、「調べたが該当の行方不明者はゐなかつた」などと北が回答する茶番を繰り返してゐたのだ。かうした不誠実な対応にも何ら懲りることなく、わが方は平成七年以降、今日まで六次にわたつて総量百十八万トンもの米支援を行った。平成十年八月には、北の発射したミサイル「テポドン」が日本列島上空を越えて太平洋

に着弾した。それでも平成十二年三月には、米支援が再開され計六十万トンが供与された。いまや北は三沢・横田・沖繩の米軍基地をミサイルの射程圏内に収め、核開発をほのめかす。なぜ、ここに来て北は態度を一変させ拉致を認めたのか。

外務省の中には、一年余りの水面下の交渉の成果と誇る向きもあるらしいが、かつての「行方不明者の調査」依頼と同様で、その認識はどこまで行っても甘い。米国ブッシュ政権の登場による「悪の枢軸」発言が金正日を対日接近に走らせたのではないのか。イラクの次の標的にされてはたまらないといふやうに。そこには米国の同盟国である日本に近づくことで米国の圧力を躲さんとする強^{したなか}な計算があった。その上、対日接近で資金までも手に入れば、まさに一石二鳥である。

小泉・金会談で署名された日朝平壤宣言を見れば、外務省の方針がどんなものであり、下交渉がどのやうなものであったかが歴然とする。拉致の「拉」の字もなければ、当然ながら謝罪の文言もない。それでゐながら「過去の植民地支配への痛切な反省とおわびを表明する」とか「正常化交渉で経済協力の具体的規模と内容を協議する」などとなつてゐる（「過去の植民地支配」などといふが、実はこれほど史実を無視した言ひ草はないのだ）。小泉首相が平壤に乗りこんだことで北による邦人拉致がはっきりして謝罪発言が引き出されたことは評価さ

れるべきだらうが、それなら会談の場で「拉致実行犯の引き渡し」と「拉致被害者への補償」、そして「拉致全容の徹底解明」を要求するにとどめて帰国すべきであった。北との事前折衝で用意された宣言への署名を見合はせて帰国すべきであった。

小泉訪問から一ヶ月後、拉致被害者のうちの五人が二十四年ぶりに帰還した（十月十五日）。そして政府は「五人を北に戻さず北に残ったそれぞれの家族全員の帰国を求める」との方針を決定した（十月二十四日）。それはあまりに理不尽な事の成り行きに憤激した世論の後押しによるものだったが、この政府の方針が決まる過程で、「一旦、五人を北朝鮮に戻すべきだ」と強く主張したのは外務省（田中均アジア太平洋局長ら）だった。人攫さらひから、やうやく解放されたといふのに、再び人攫さらひ犯の元に戻せ、それが「北との約束だ」といふのである。さうすれば北が態度を和やほらげ国交正常化の話合ひが進捗するとでも言ひたいのだらう。

かれこれ考へると小泉首相には何としても平壤宣言に署名してもらひたいといふのが外務省の方針だったと見ていい。かうした姿勢が見当外れの見通しを北に与へてしまった。拉致は金総書記の「謝罪」発言で落着に向ふだらう……と。外務省が舐められるのは、これまでの及び腰的取り組みからして仕方がない。しかし、同時にそれは日本国家が、日本国民が侮あや辱されることだから、外務省の姿勢は許し難いのである。

吉田松陰の言葉に「己れの地、己れの身より見を起すべし」（「久坂生の文を評す」から）とある。一体全体、彼らは自らの職責をどう考へてゐるのだらうか。

一国の栄光と恥辱が自らの双肩に懸つてゐるとの外交官なら当然に身に帶すべき固い信念があつたなら、拉致被害者を「行方不明者」扱ひすることなど到底できなかつたはずだ。「己れの地、己れの身」の何たるかの自覚が欠如してゐるから「たった十人のことで日朝正常化交渉が止まつていいのか」（榎田邦彦元アジア局長）とか、「一旦は北朝鮮へ戻すべきだ」などと言へるのである。わが国では「ノープレス・オブリージ」は死語なのだらうか。

「己れの地、己れの身」を見失つて空論を弄ぶのは外務省に限らない。政界・経済界・教育界・報道界なども「己れの地、己れの身」を忘失してゐる。即ち「自国」意識喪失の病状はいよいよ深刻になつてゐる。例へば総理の靖国神社参拝への中韓からの無礼な干渉に対して、財界幹部や大学教授・評論家からなる官房長官の私的懇談会は「国立の無宗教の追悼・平和祈念の施設が必要と考える」などと本末転倒の提言を發してゐる（十二月二十四日）。自国の戦死者を慰霊するについても他国の顔色を窺ふ始末である。中韓と足並を揃へて首相の靖国神社参拝を最も強く批判する朝日新聞は、また拉致報道に最も消極的な新聞である。

拉致問題の前途はなほ困難が予想される。しかし、「諸国民の公正と信義に信頼して」自

国の安全と生存を図るとする「日本国憲法」の規定が全くの空文であるとの認識が、せめて広まるならば不幸中の幸ひとしなければならぬ。主権無き被占領期にGHQが「日本」喪失を目論んで起草したのが「日本国憲法」であつた。今日、各方面に見られる自国意識喪失の憂ふべき現象の根はこの憲法に萌してゐる。憲法擁護の声あるところ「日本」はないのだ。私共が「日本への回帰」を志向して毎夏、宿泊研修を続ける所以は、悠久なる歴史的国家「日本」を、われらの心身に取り戻すことは子孫たる者の務めであると考えざるからである。それはまた「日本と日本人」が国際社会の責任ある構成員として信頼を勝ち得る道でもあると確信するからである。このやうな思ひを抱いて私共は去る八月、江田島に於いて四十七回目的宿泊研修を営んだ。その記録が本冊子である。御精読いただければ幸甚である。

最後にあたり、御多用の中を遠路、お運び賜り、さらには御講義要旨の掲載をお許しいただいた中西輝政先生に厚く御礼を申し上げます。

平成十四年十二月二十六日

大学教官有志協議会

国民文化研究会

目次

はしがき

講義

第一日目（八月八日）

自分の目で世界を見よう 自分の心で歴史を感じよう

..... 住友電気工業(株)生産技術部長 布瀬雅義... 1

第二日目（八月九日）

世界の中の日本の宿命 京都大学教授 中西輝政... 21

吉田松陰の「士規七則」 亜細亜大学教授 東中野修道... 55

第三日目（八月十日）

明治の精神—生命は自己への回帰のなかにある—

..... 元九州造形短期大学教授 小柳陽太郎... 77

第四日目（八月十一日）

日本の国柄—ヒストリカル・バックグラウンドと「憲法第一章」—

..... 拓殖大学日本文化研究所客員教授 山内健生... 111

講話

「昭和の精神」とは何か―世界に開かれた慰霊の心―

.....元高千穂商科大学教授 名越 一 荒之助 141

教育参考館紹介.....東京防衛施設局調査官 山 根 清 161

体験発表

若い皆さんへ.....亜細亜大学情報システム課長 平 槇 明 人 175

社会生活における「学問と人生」

.....日章工業(株)代表取締役社長 藤 新 成 信 187

短歌入門

短歌創作導入講義.....福岡市立香椎小学校教諭 是 松 秀 文 199

創作短歌全体批評.....戸田建設(株)開発課長 青 山 直 幸 215

一年の歩み.....第四十七回合宿教室運営委員長 寶 邊 矢太郎 231

合宿教室のあらまし.....

合宿詠草抄..... 265

あとがき

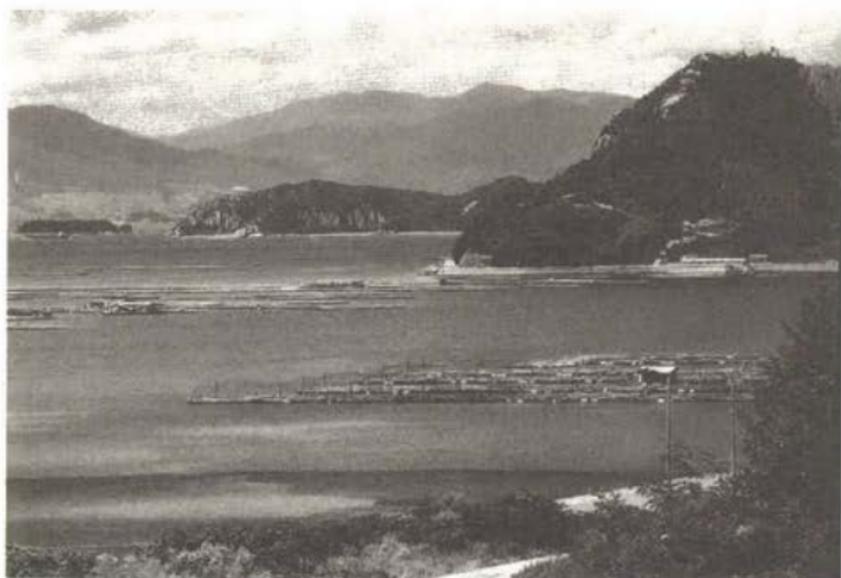
講義

—— 合宿導入講義 ——

自分の目で世界を見よう
自分の心で歴史を感じよう

住友電気工業(株)生産技術部長

布 瀬 雅 義



はじめに――学問の基本

ワールドカップの事実

台湾は日本の植民地だったのか？

「教育こそ最優先にすべきだ」

教育者の覚悟

「元日本人」

公に奉ずる精神

はじめに―学問の基本

私はモノづくりにも携はってゐる技術屋です。半導体など技術の最先端のモノづくりに携はってゐると、既存の理論ではよく分らない現象がいろいろ出てきます。そういふ時に理屈ではかうなるはずだ、と先入観に囚はれてゐたのでは、技術の進歩はないのです。「自分の目でよく事実を見ること」、そしてなぜさうなるのか、「自分の頭でよく考へること」、そこから新しい発見が生まれ、より進んだ理論が構築されていくのです。

私の会社では、長年、この二点が技術屋としての仕事の基本として、先輩から後輩に受け継がれてきました。同じ事が人生や社会、歴史を考へる上でも言へるのではないでせうか。

ワールドカップの事実

今年開かれた日韓共催のサッカー・ワールドカップを例に考へてみませう。日韓共催といふことで、テレビや新聞には「韓国、頑張れ」といった調子の報道ばかりがなされてゐまし

た。しかし、私自身は別に熱烈に韓国を応援してゐたわけではなかったし、周囲の人と話しても同様だったので、かうした報道は「日韓友好の押しつけ」のやうでどうにも違和感を禁じ得ませんでした。

さうした時、あるインターネットの投票サイトで「韓国勝ち進む！応援する？」といふ自由投票をやつてゐるのを見つけました。その結果は以下の通りでした。

・ 共催国の韓国を応援 三九〇票（六％）

・ 最賈の国を応援 五、八六四票（八六％）

・ 日本以外には興味なし 五三四票（八％）

純粹なサッカーファン達は、ブラジルなどの本場のプレーを見たいと思つたでせうし、また若い女性の間ではイングランドのベツカムや、イタリア・チームなどが人気を集めてゐましたので、この投票結果の方が私の実感にもびつたりします。日韓友好のみ謳ふマスコミの報道から、私は自分だけが例外なのかと思つてゐましたが、実は大多数の国民が同様だったのです。かうした多くの国民の実際の気持ちといふ事実を覆ひ隠して、「日韓友好のために、韓国チームを応援しなければならない」といふ偏向報道を続けてゐたのでは、眞の日韓友好も芽生えないのでは無いでせうか。



台湾は日本の植民地だったのか？

マスコミに限らず、教科書においても、ある特定の先入観で書かれ、それによって不都合な重要な事実が隠されてしまふといふことがあります。たとえばある中学校の歴史教科書、(日本書籍、平成九年版)には次のやうな一節があります。

一八九五年、下関(山口県)で講和条約(下関条約)が結ばれた。下関条約では、清は朝鮮の独立を認め、日本にリアオトン(遼東)半島と台湾をゆずり、多額の賠償金を支払い、日本と不平等な通商条約を結ばせられた。台湾が日本の領土となると、台湾で独立運動がおこった。しかし日本

軍が出兵して鎮圧し、その後、植民地として支配した。(二〇七頁、傍点は筆者による)

かなり問題の記述ですが、ここでは、台湾は日本が「植民地として支配」したのかどうか、この点に関する事実をこれから一緒に自分の目で見て、自分の頭で考へてみませう。

まづ幕末から明治にかけて東南アジア、東アジアの各地が次々と欧米諸国の植民地とされていったといふ歴史の流れを事実として押さへておかねばなりません。十九世紀前半は、イギリスがシンガポール、ビルマ、香港と勢力を拡張、フランスが負けじとベトナム、カンボジアを領有します。さうした中で日本が明治維新後、あいまいだった国境を確定し、自国領土を確保しておくといふ動きに出るのは当然でせう。

明治四年、沖縄を編入。明治八年、日露間で樺太・千島交換条約締結。明治二十八年、日清戦争勝利により台湾領有。ちなみにこの時まで清国は沖縄を自国領土として主張してをり、日清戦争に負けてゐたら、逆に沖縄が清国領土とされてゐたでせう。

この後、明治三十一(一八九八)年、アメリカがハワイ、フィリピンを併合し、明治三十三年(一九〇〇)年にはロシアが満州を軍事占領して、朝鮮に迫つてきます。先の教科書では台湾の領有は日本の一方的な侵略のやうに書かれてゐますが、ひたひたと迫り来る欧米各国

の勢力伸長、そして清国との領土争ひといふ流れの中で事実を見なければ、その意味する所は分りません。

また、台湾がどのやうな地域だったのか、といふ事実も見ておかなければなりません。当時の清国は満州人王朝で、漢民族を異民族として支配してゐました。清が漢民族国家の明を滅ぼした際に、台湾が反攻の拠点となった事から、清は漢民族の台湾渡航を禁じ、住んでゐたのは原住民が大陸からの不法流入民だったのです。

清国領土だった二百十三年間に百五十四回もの住民反乱がありました。さきの歴史教科書は「台湾が日本の領土となると、台湾で独立運動がおこつた」と書いてゐますが、住民反乱は清国の時代から活発だったのです。

また日本割譲時には、アヘン吸引者が十六万九千人をり、さらに「瘴癘しょうれいの地」と呼ばれて、コレラなど伝染病の多い土地でした。台湾は「化外の地」、すなはち中華文明の及ばない土地として、見捨てられてゐたのです。

日本の台湾統治は当初は難航しましたが、ゲリラに土木工事の職を与へるなどして約七年かけて帰順させ、またアヘン吸引を許可制にして漸次減少させる事に成功すると、その後は近代化が大車輪で進み出します。

サトウキビの品種改良により明治三十三年には三万トンに過ぎなかった砂糖生産が、三十七年後の昭和十二年には百万トンにまで成長して、台湾は世界有数の砂糖産地となりました。また台南・嘉南平野で東洋一の烏山頭ダムと一万六千キロに及ぶ給排水路を建設して百万人の農民を豊かにした八田與一は今でも現地で崇敬されてゐます。

さらに台湾を南北に縦貫する鉄道、道路が完成し、産業開発を加速しました。近代都市・台北の建設が進められ、六車線の中央道路や壮麗な総督府が造られ、下水道は東京よりも早い時期に設置されました。今日の台北はアジアでも代表的な風格のある都市となつてゐますが、その骨格は日本統治時代に作られたのです。また教育面でも、台北帝国大学と旧制高校二校が設けられ、日本本土と比較しても遜色のない地域となりました。

教育の普及度を見ても、昭和十八年の就学率は男子八〇・九% 女子六〇・九%で同時期の大陸の二〇%未満と比べると圧倒的な差をつけてゐました。「化外の地」が中華文明の本土を追ひ越してしまつたわけです。さてかうした台湾での教育の近代化は誰が、どのやうな考へで行つてきたのか、さらに具体的な事実を見てみませう。

「教育こそ最優先にすべきだ」

平成七年、台北市北郊にある士林国民小学の百周年記念式典が開かれました。陳水扁・台北市長（現・総統）も来校して祝辞を述べました。学校の展示室には歴代校長の写真が飾られてゐます。初代は日本人・伊沢修二。百年前の明治二十八年、日本による台湾統治の開始と同時に伊沢修二が創設した芝山巖学堂をこの小学校の始まりとしてゐるのです。

伊沢修二は明治初年に米国に留学し、帰国後は文部省に勤める傍ら、東京師範学校校長、東京音楽学校初代校長など、明治の教育界で先駆的役割を果たした人です。小学唱歌を編集して小学校に音楽教育を導入し、「仰げば尊し」は伊沢の作曲と言はれてゐます。

明治二十八年四月、台湾の初代総督に内定してゐた樺山資紀すけのりに会った際、伊沢修二は新領土・台湾では「教育こそ最優先にすべきだ」と意見具申した所、樺山から自らその任に当たるやう勧められて、台湾行きを決意しました。

五月十八日、台湾総督府の始政式の翌日に、伊沢は学務部長心得として台北で仕事を開始してゐます。伊沢のやうな日本教育界の指導者が自ら台湾に向き、しかも始政式の翌日か

ら仕事を始めてゐる所に、明治日本の台湾での教育にかける意気込みが伝はってきます。

伊沢は海外領土での教育事例を調べるために、フランスのインドシナ教育局長に話を聞いたことがあります。フランスはインドシナを統治する際に、フランス語でフランス風の教育を実施しましたが、住民の抵抗にあつて失敗したといひます。またあるイギリス人は伊沢に助言して、植民地の住民に教育の必要はない。なまじ教育を施せば、本国に反抗する者を育てることになる、と語りました。植民地を経済的に収奪するなら、この愚民政策がもっとも効果的・効率的なやり方でせう。

伊沢は、台湾においては、フランスのやうに宗主国の言語・文化を押しつけるのではなく、またイギリス流の愚民政策でもなく、第三の「混和主義」を採るべきである、と主張しました。これは「我れと彼れと混和融合して不知不織しらずしらずの間に同一国に化して往く仕方」です。台湾は日本が経済的な収奪を行ふ植民地ではなく、北海道や沖縄、樺太と同じ「新附しんぷの領土」であり、その人民は民族こそ違へ、日本国民同胞として遇すべきといふ考へ方が根底にあつたのです。

伊沢は、六月二十六日、台北・北郊の士林の街にある小高い丘・芝山巖にある廟を借りて学堂とし、地元の有力者を説いて、十代後半から二十代前半の子弟六名を出してもらひまし

た。生徒の一人、十六歳の潘光楷ばんこうかいは後に次のやうに書いてゐます。

最初の教室は芝山巖廟の後棟樓上に設置せられ、余は此所ここに楫取道明かとりみちあきと起居を共にしたり。

日本人の先生と台湾人の生徒が起居をともにして教育を始めたのです。台湾人は日本語を学び、日本人は台湾語を学びました。「混和主義」の具体的な現れです。

超えて十一月十六日、甲組生（第一期募集の六人）は四箇月の講習期間満了となり、樺山総督・水野長官・台北県知事、その他官紳臨場（高官名士の参加）の榮を得て修業証書授与の式典を挙げらる。

斯その時海軍々楽隊数十名を以て盛んに勇壮なる軍楽を吹奏せられ、余等は驚喜まさ將に狂せん計ばかりなりき。

わづか六名の卒業式に台湾総督以下の高官と、数十名の軍楽隊まで来てくれたのです。総督府がいかに伊沢の考へに共鳴して、教育を重視してゐたかがよく窺はれます。潘少年たちの狂ほしいほどの驚き喜びが目に浮かぶやうです。

潘光楷は後に士林街の街長を務め、さらに州議會議員となつてゐます。他の卒業生は各地に設けられる学校の教師や、公務員として、それぞれ台湾の近代化に尽くしていきます。

教育者の覚悟

翌明治二十九年正月、伊沢が講習員（教員）募集のために帰国してゐる間、留守を守る楯取道明以下、六名の日本人教師は台北・総督府での新年の拝賀式に出席すべく、生徒らとともに山を下りました。前夜からゲリラの騒ぎが伝へられてをり、一部の生徒が危険だと止めたのですが、楯取はかう答へました。

この危難の時にあたり、文力では敵に抗することのできないことを知って若しこれを避ければ、臣子の道を失することになる。我等の命運は天に任せるほかはない。すべてを吾らの職務のために尽くし、職務と存亡を共にするのみである。

「臣子の道」といふ言葉が注目されますが、これについては後述しませう。一行は船着き場に着きましたが、前夜来のゲリラ騒ぎで船がありませんでした。やむなく楯取らは生徒を

解散させ、一度学堂に戻った後、士林の警察署に合流すべく再び山を下りる途中で、百余名のゲリラに遭遇し、防戦空しく惨殺されました。ゲリラ等は日本人の首で賞金が貰へるとの噂を信じて六人の首級をあげ、所持品・着衣を奪ひ、さらに学堂に上って略奪に及びました。難を知った伊沢は悲嘆にくれましたが、今日のやうに簡単に戻れる時代ではありません。やむなく日本で講習員募集の任務を続けました。二月十一日の講演で伊沢は六士遭難について次のやうに語つてゐます。

さて斯く斃れた人々の為には実に悲しみに堪へませんが、此から後ち台湾に行つて、即ち新領土に行つて教育をする人は、此の度斃れた人と同じ覚悟を以て貰はねばならぬと信じて居ります。

然るに教育と云ふものは、人の心の底に這入らねばならぬものですから、決して役所の中で人民を呼び付ける様にして、教育をしようと思つて出来るものではない。故に身に寸鉄を帯びずして、土民の群中にも這入らねば、教育の仕事と云ふものは出来ませぬ。此の如くして、始めて人の心の底に立入る事が出来ようと思ひます。

後に伊沢は台湾に戻ると「学務官僚遭難之碑」を建て、慰霊祭を執り行つてゐます。大正

六年に伊沢修二が亡くなると、遺言により、その遺髪が「六士之墓」に合祀されました。事件を機に、命をかけて教育にあたるといふ「芝山巖精神」が台湾教育界の伝統として根付いていきました。昭和五年には芝山巖神社が建てられ、台湾教育に殉じた日本人、台湾人が祀られるやうになり、終戦時には三百三十七柱が祀られてゐました。まさに「教育者の靖国神社」です。神社は戦後、蒋介石政権によつて破壊されましたが、六士先生の墓は士林国民小学の校友会の手によつて立派に再建されてゐます。

芝山巖精神を受け継いだのは、どんな人々だったのでせう。伊沢が台湾での教育募集の計画を新聞で発表すると大きな反響があり、八百名もの応募がありました。その一人に京都府舞鶴近くで小学校校長をしてゐた坂根十二郎がゐました。坂根は二月二十二日午後十時に二次試験の知らせを電報で受け取りましたが、京都駅まで二十五里を歩き、そこから夜行の汽車で上京しなければなりません。試験日の二十五日に着くためには翌朝には出発しなければならぬのです。その場で学校関係者に書き置きをし、郡長を深夜に訪れて許可を得、それから家に帰って母に許しを乞ひました。母は神棚から守り札を出し、これを肌身につけて「神霊の加護によりて息災延命なれ」と言ひました。七十を過ぎた母とは今生の別れかと思ふと、涙が止まりませんでした。学校関係者に残した書き置きには次のやうに書かれてゐま

した。

台湾島新附民を教育すべく、之が教員を募集せらるるに会す、せめてはその末席に加り以て奉公の万一を尽くさん事を期せんとす

この「奉公」とは、楫取道明の「臣子の道」に通ずる言葉です。台湾の人民を教育を通じて国民同胞として育てていくことは明治日本の国家的大事業であり、その使命のために日本人教育者、台湾人教育者は命をかけて向っていったのです。台湾の近代化はかうした人々によって成し遂げられたのでした。

「元日本人」

このやうな思ひで始められた台湾での教育は台湾の人々にはどのやうに受けとめられたのでせうか。二人の台湾人の発言に耳を傾けて見ませう。一人は蔡焜燦さいこんさんといふ方です。蔡さんは昭和二年、台湾中部の清水に生まれ、台湾人児童のための清水公学校に入学しました。ここでは鹿兒島出身の河村秀徳校長が、地元の人々の寄付を集めて、十六ミリ映画や校内有線

放送による視聴覚授業など、当時の日本本土にもなかった先進的な教育を試みてみました。

各校には教育熱心な日本人教師が配置されておりました。蔡さんの後輩に優秀だが貧しくて中等学校に行けない生徒がいましたが、ある日本人の先生はその父親を訪ねて、「私が学校に行かせるから」と言って五年間の学費を肩代りしてくれたといふこともありました。このやうな日本人教師と台湾人生徒の間には強い師弟関係が生まれ、現在も日本から戦前の恩師がやってくる、台湾中から教へ子が集まり、また自分の郷里に招かうと恩師の奪ひ合ひになるほどださうです。

大東亜戦争開戦当初は台湾人には軍人への道が閉ざされておりましたが、昭和十七年、戦線の拡大と共に門戸が開かれました。志願兵制度が発表されるや、千人の募集に四十万人の志願者が殺到しました。蔡さんも遅れをとるまいと少年兵募集に応募し、昭和二十年一月、少年航空兵として陸軍航空学校入学を許されました。そして奈良市の陸軍航空整備学校で教育を受けてゐた所で終戦を迎へ、台湾に帰国しました。蔡さんは自らの受けた教育を振り返って、次のやうに我々日本人に語りかけておられます（『台湾人と日本精神』、小学館文庫）。

日本統治時代、日本人教師達は、我々台湾人に「愛」をもって接してくれた。そして

「公」という観念を教えてくれたのだった。愛された我々は、日本国家という「公」を愛し、隣人を愛したのである。

ここでの「愛」とは民族こそ違へ同じ国民としての同胞愛でせう。そして同胞国民として力を合はせて国家を支へていかうといふ志が「公」でせう。台湾が日本の経済的収奪を行ふためだけの植民地であつたら、それは日本人の「私」であり、台湾人がこのやうな同胞愛も、奉公の志も共有するはずはありません。

どうぞ心に留めていただきたい。「日本」はあなた方現代日本人だけのものではない。我々「元日本人」のものでもあることを……。

台湾には、日本がいまこそ学ぶべき「正しい日本史」がある。どうぞ台湾に正しい歴史を学び、自信と誇りを取り戻していただきたい。そして誇りある日本が、アジア地域の安定と平和を担う真のリーダーたらんことを願う。

日本人よ胸を張りなさい！

蔡さんの言はれる「日本」、そして「正しい日本史」とは何か、その一端は伊沢修二、楫

取道明、坂根十二郎の言行の中に窺へるでせう。私たちは自分の心でそれを感じとらなければなりません。それはこれらの人々の子孫として現代の私たちがどう生きるべきなのか、といふ問題につながってきます。「台湾は日本の植民地」と一言で済ませてしまつては、私たちは自分自身の生き方を探す道から、自分の目と心を閉ざしてしまふのです。

公に奉ずる精神

もう一人、「元日本人」の声を聞いてみませう。李登輝前総統です。司馬遼太郎は『台湾紀行』（朝日文芸文庫）の中で、李登輝前総統との次のやうな会話を記してゐます。

シバさん、私は二十二歳まで日本人だったのですよ。

自分は、とこの人は言う。初等教育以来、先生たちから日本人はいかにすばらしい心を持つてゐるか……おそらく公に奉ずる精神についてに相違ない……という教育をうけつづけたんです。むろん大人になってから日本へゆくと、日本にもいろいろな人がいるということを知りましたが。

しかし、二十二歳まで受けた教育は、まだのどもともまで——と右手を上にあげて——詰まっているんです、といった。

たしかに、そう言われてみると、李登輝さんは日本人の理想像にちかい人かとも思えてくる。

李登輝前大統領の「日本人がいかにすばらしい心を持っているか」といふ言葉を司馬遼太郎は「公に奉ずる精神」と推測してゐます。蔡さんの「公」と同じです。日本人教師たちの奉公の精神は、台湾人の教へ子たちの心に脈々と受け継がれていったのです。

李登輝前大統領は、旧制台北高校卒業後、京都帝国大学で農業経済学を学んだ、まさに戦前の日本の教育を受けた人です。蔣経国大統領（蒋介石の息子）の死後、はじめて台湾出身の大統領になり、九六年三月には台湾初の民主選挙で大統領に再選されました。

台湾の民主政治はこの「二十二歳まで日本人だった」人の「公に奉ずる精神」によって始められたのです。ちなみに中国大陸ではいまだに選挙も行はれず、中国共産党が野党の存在も許さない独裁を行つてゐます。そんな国が台湾は中国の一部だと言って、その自由と独立を抑圧しやうとしてゐます。

この中国と台湾の問題は、台湾の歴史を知れば、私たち自身の問題であるといふ事が分つてくるでせう。我々の父祖が台湾を新附の土地、その民を新たなる国民同胞として迎へ入れ、その地の近代化に心血を注ぎました。そこで生まれ育つた人々が今、自らの国を持って、民主政治と近代経済を發展させたのです。そこには現在の私たちが見失ってしまった「奉公の精神」を豊かに継承してゐる人々がゐるのです。我々、現代の日本人はかつての同胞だったこの国の人々とどう向き合ふべきでなのでせうか。その人々が我々自身の父祖から継承した奉公の精神にどう接すべきなのでせうか。

「台湾は日本の『植民地』だったのだらうか?」。この問ひかけへの答へによって、いろいろな接し方があるでせう。この問ひかけは、かうした大きな広がりを持つ問題なのです。皆さん一人ひとりが、自分の目で世界を見て、自分の心で歴史を感じつつ、自分なりの答へを出していただきたいと思ひます。

講義

世界の中の日本の宿命

京都大学教授

中西輝政



- (一) 日本が抱へる三つの危機
- (二) 生き方の三つの原則
- (三) 国家観を喪失した戦後の日本人
- (四) 「グローバリゼーション」とは何か
- (五) グローバリゼーションを巡る三つの誤解
- (六) 七十周期説とグローバリゼーション
- (七) 「戦後」といふ宿命を抱へた日本
- (八) バランスある思考の恢復を
- (九) 日本といふ国家について
- (十) 終りに

〈質疑応答〉

(一) 日本が抱へる三つの危機

今二十一世紀初頭の日本は、かつてない厳しい時代の入口に差し掛かって来てゐると思ひます。これは三十年間国際政治の勉強をし、また西欧各国、先進国の歴史的な興隆と衰退の流れを勉強し、さらにまたアジアの安全保障を勉強して来まして、これから日本が直面する事態の明暗の境は、もしかすればすでに通り過ぎてゐるのかもしれないとさへ思ひます。しかしこれは、まだ「歴史の底流」に関はることで、それが現象として誰の目にもわかるやうになるには、あと十年ないしは十年前後先のことだと思ひます。しかし、このままゆくと、ほぼ確実に日本にとって悲劇的な時代が到来することは間違ひないと思ひます。いつれにしても皆さんが社会の第一線に立たれるとき、私は国の大きな分岐点が来ると見てゐるわけです。具体的にはそれが何なのかにつきまして、追々お話させて頂きます。

ごくマスコミ的に申し上げれば、今この日本国に三つの危機が見え始めて来ました。一つの危機は何ととってもやはり経済だと思ひます。いはゆるデフレ問題、生産がかなり長期間に亘って少しづつ縮小し、これまでの日本では当たり前だった技術革新や設備投資がもう行

はれなくなって来てゐるといふ問題です。経済の規模がこのままいくと少しづつ収縮していきます。かういふ兆候が少しづつですが、この十年近くに亘って続いてゐるといふことです。これは、戦後日本といふ国が、それ以外のものを殆どすべてふり捨てて追ひ求めて来た唯一の価値であつた経済大国の地位の喪失を意味します。

第二の危機は、昨年九月十一日にアメリカで起つた同時多発テロ事件です。イスラム圏とキリスト教圏など、非常に何か根深い宗教的な対立を含んだやうな新しい国際情勢の構図を挙げることができます。

昨年のテロ直後に小泉首相は日本国の方針として、日本がテロの攻撃を受けてもテロとは絶対に妥協しない、テロはモラル、人間性の上で許せないと発言しました。これは、「わが国は、道義を重要視する国だ」といふことを世界に示したといふことで、立派なことだつたと思ひます。世界のほとんどの国が、テロを許さないといふ態度を明確に示してゐるのです。「いや、イスラム原理主義にも言ひ分がある」とか、「テロといふものは一概に否定はできない」とか言つてゐる学者や評論家ならいざ知らず、大事なことは、やはり日本が世界中から尊敬を得て、自己主張してやうていくためには、最低限の人間の道徳、モラルといふものを大切にすゝる国だ、「道義国家日本」といふことを世界に示さなければ、誰も耳を傾けては



くれません。

これは必ず日本の周辺にもっと大きな問題となつて波及して来ます。いふまでもなく北朝鮮問題です。テロ事件を起した「よど号」犯人をかくまふだけでなく、日本人の多くを拉致し今だに核や「不審船」で日本を脅かし続けるこの国は、やはりイラク同様のテロ支援国として体制の転換を迫る必要があります。これはいづれ中国問題にもつながっていきます。中国と台湾との問題は、テロといふよりはもっと旧来型の大規模な軍事的衝突、あるいは非常に破局的なサイバー戦争になる可能性があります。サイバー戦争は起ると大変です。コンピュータのシステムが一遍に混乱を招いてしまひ、うまく働くなりません。新幹線が脱線する、飛んでゐる飛行機が滑走路で激突する、あるいは飛び上がれなくなって地上に墜落

するなどいろいろなことが起り得ます。古い従来型の戦争がなくなつてゐないのに、新しい戦争といふものがまさに始まつてゐるわけです。イスラムの宗教原理主義が関はるやうな戦争と同時に、サイバー戦争、ハッカー戦争といふのが起つたら大変な被害をもたらしめます。これ以外にもいろんな新しい戦争の可能性がありますが、いづれにしても日本の周辺に新旧と混ぜて安全保障上のかつてない危機が起り得る構図は、この二十一世紀に入つてから急に強くなつて来ました。これは、冷戦後の一九九〇年代にはあまり見られなかつた、新しい危機の兆候だと言はなければなりません。

第三は、日本人のモラル、価値観、精神構造、心のあり方を巡る問題だらうと思ひます。

これはマスコミの報道や議論などから言へば、政治はもう昨年からすっかり「ポピュリズムの政治」になつてゐると言へます。マスコミは、小泉さんの支持率が何パーセントかばかり気にしてゐます。小泉さんならまだしも、田中真紀子前外務大臣とか、もう一人の田中康夫長野県知事、このやうな人が外務大臣や知事といふ公職に選ばれるといふことは、実は日本人のモラルのあり方、精神構造や人間性、価値観といふところで何か、国の公を担ふといふ感覚が大変をかしくなつてゐるといふことです。イギリス、アメリカ、フランスやドイツなど、どんな民主主義の国でも、指導者のキャラクター、ないしは指導者の人格が根本的に重

視されるのです。ですからアメリカ前大統領のクリントンさんは、いろいろとモラルや人間性の問題で非難されました。それでも辛うじてぎりぎり政治生命は保ちましたが、恐らくあのことが命取りになってしまひ、その後クリントン政権は政治的にほとんど無力になつたといへるかもしれません。

別の面から日本の現状を見ますと、もう毎日のやうに、かつてなかつたやうな凶悪な殺人事件があらこちらで起つてゐます。治安の悪化と言はれることは本当に、枚挙にいとまがない。犯罪率は毎年、上昇してゐます。

また、日本のリーダー層、エリートといはれる人たちが、これまであまり聞いたことのないやうな、さまざまな不祥事を起して話題になつてゐます。そればかりか大学など学校において、教育が大きく崩壊してきてゐる現象は、もう既に一人ひとり経験してゐるのではないかと思ひます。言ふまでもなく、小学校の「学級崩壊」などもこの一つです。

(二) 生き方の三つの原則

しかし、今、お話しした三番目の問題は、三つの危機のうち、日本の国としておそらく最も

根本的な危機であるかもしれませんが。つまり、日本は今、経済、安全保障、それから三番目の日本人の心、精神といふものが何かこれまでにない崩れを起してゐますが、そのことを日本のリーダー、あるいは日本国民の大半がどうしていいかが分らない、といふ問題です。

「何が問題なのか分らない」といふことが、もっとも深刻な危機の本質なのかもしれません。人間は、国、大学や企業を動かす場合、あるいは人生を考へてみましても、三つの重要な姿勢、生き方といふものが求められるのではないかと思ひます。

一つは「正しい認識を持つこと」です。これは、学問の大切さといふことにもつながるかと思ひます。学問の大切さといふのは、何も大学の授業で、細々とした知識を教師が一方的に与へて、それを全部消化して試験で単位を取るといふことではありません。正しい学問と正しい認識が得られるやうな「学問」をだうして身につけるかといふことは、大学に入った瞬間から自分自身に課せられてゐるのです。学校で授業を聞いてゐれば人間や世界のことに分るやうになるとは、実は誰も保障してくれません。自分で考へて分るやうな深い理解、本当に身体に染む、自分の心で「分つた」と叫べるやうな理解を目指した学問をすることが大切です。そのためには、二番目に「自己を確立すること」でせう。これは理念とか、信念とかあるいは人生観といふ言ひ方になるかもしれませんが。さういふ言葉で示すよりも、「もつ

とはつきりした自分になる」といふことです。そのためには、自分である程度認識できる自信を持つことが大切となります。そして三番目に大事なことは、言ふまでもなく「勇氣ある行動ができること」です。勇氣と行動といふ実際の場面につながっていかなければ、知識や自己認識も何の意味もないのです。

(三) 国家観を喪失した戦後の日本人

実は、私は今、三つの原則を、今日のテーマ「世界の中における日本の宿命」に即して申しました。つまり、正しい認識がこの国ではできてゐない、世界では今、何が進んでゐるのか、何が起つてゐるのか、きちんとした事態の把握・理解・認識がどうもできてゐないやうに思ふのです。また、日本人は、はつきりとした自己を確立してゐない、きちんとした国家観、世界観をいふものを持つてゐないやうに思はれます。

このことは、今年、五月にあつた中国の瀋陽における総領事館事件が、何よりもそのことを示してゐます。この領事館や大使館の敷地といふのは、その国の領土に準ずる不可侵の領域なのです。言ひ換へれば、たとへその駐在国であっても、外国の政府関係者が立ち入るこ

とはできません。これは国際社会といふものが、いかにぎりぎりのところで角をつき合はせてゐるかといふことをよく示してゐます。

それほど国際社会は、国家同士がしのぎを削つて、お互ひに一步も譲らんぞといふ姿勢を前提にして成り立つてゐるのです。よく国際友好とか、国際協調とか、あるいは国際貢献などが語られ、いろんな国際的な共同行動が行はれます。しかし、これらは全部お互ひの主権を尊重し合ひ、主権不可侵の前提で自発的な各国の意志に基づき成立してゐる関係です。そこで初めて友好・貢献・協調といふ関係が成り立つわけです。

どうも日本は自己を主張できないと言はれます。なぜか。これはたどつていくとやはり「戦後といふ宿命」に帰結すると思ひます。つまり、日本といふ国は自分の考へをきちんと主張してはいけないもの、何か日本といふ国は他の国と同じやうな権利や主張をするのが憚られるやうな立場にある、と思ひこまされてゐるからではないでせうか。あるいは、さういふ間違つた態度を引き起してきた原因は、戦後の歴史の認識、歴史観にあるのかも知れません。さらには、日本の持つてゐる基本的特質、この国はどんな国なのかをあんまり深く考へない方がいいのではないか、さういふ曖昧さで生きて来たからかも知れません。いづれにしても、この国は人間が一人前に生きていくために、誰でも必要な自己を確立して、さうして

当然のことを当然のやうに主張していくといふ生き方が未だにできてゐないといふことです。

そして三番目に述べた勇氣ある行動ですが、この勇氣といふものは人間の美徳の中でも非常に大切なものです。特に、江田島といふ場所は、自分の命を賭してでも他者（国、郷土、家族）を守つていくといふ人間の愛、人間的な感情として最も崇高な伝統を持った土地です。かういふことを考へてみますと、いまだにこの日本といふ国は、あたりまへの国として勇氣ある行動を、人間としてお互ひに高く評価し得るやうな社会ができ上がつてゐないのです。何と情けないことなのでせう。例へば、過去の戦争で国のために命を捧げた英霊たちに対して、国家の根幹をなす顕彰がきちんとできてゐません。これは外国から文句を言はれるからできないのです。これも「勇氣なき日本」の姿で、行動につながる言論・議論ばかりを繰り返してゐます。かういふところでも自己喪失が続いてゐると言はねばなりません。しかし、私は何も日本のことを一所懸命に悪く言ふつもりはありませんし、すべてを戦後のせりだと言ふ気持だけでお話してゐる訳でもありません。我々一人ひとり、この三つの生き方がきちんと揃つてゐるのか、これは私自身のことも含めて、反省しなければなりません。一人ひとりの日本人が、さういふ生き方ができずにそんな立派な国を望んでも、それは無いもの

ねだりなのです。福沢諭吉に「一身独立して一国独立する」といふ言葉があります。逆に言へば、自分が正しいと思ふことは率先してやっていく、この勇氣と自己をもった若者が、多数派になったら、一遍に解決する問題なのです。ですからその意味で、私は敢へて、国の問題と自分自身の問題を皆さんが是非とも引き寄せて、あるいはつなぎ合はせて、これを考へていく習慣や態度を深く身につけていって欲しいと思ひます。

(四) 「グローバリゼーション」とは何か

そのためにはまづしっかりとした認識をもつことが大切となります。たとへば今、国としての日本のことを考へるときに、決定的に間違つた認識が、この十年ほどの不調を増幅させてゐるやうに思ひます。それは「グローバリゼーション」といふ言葉を巡って、今の日本ほど混乱、誤解、それに基づく選択の間違ひ、あるいは国益の一方的な喪失、崩壊、さういふ事態を招いてゐる国はないと思ひます。この二十年ほど「国際化」をかけ声にするなら、その前にまづ国家といふ問題を中心に据ゑておく必要があります。欧米人や日本以外の国々では、国益に役立てるためといふ前提で、グローバル化が議論されて来てゐるのに、日本だ

けがどうもその点を見落として来たといふことです。例へば、日本は、たくさん不良債権の問題をまづ解決してから金融のビッグバン、金融の国際化に取り組むべきなのに、その順番をひっくり返してしまったといふことにも現れてゐます。

「グローバリゼーション」といふ言葉は、日本では一九八〇年代後半のバブル時代の流れとどこかで一緒になってしまつて、日本人にとっては奇妙なグローバリゼーション理解になつてしまつたのです。このグローバル化といふのは、国境を人、モノ、カネ、情報が越えてボーダレスに行き交つていく、かういふ傾向を「グローバリゼーション」と言ひます。

ですから外国に工場をたくさん作る、あるいは国境を越えて不法の移民が出入りする、あるいは一日に一兆三千億ドルといはれる膨大なお金が世界中の金融市場を飛び交つてゐます。まさにボーダレスな世界です。「日本はグローバル化に対応できてゐない」、あるいはかういふ政策をとるときには「グローバリゼーションといふ流れをしつかりと受け止めなければならぬ」などといった議論がしきりに行はれました。私は、この議論で三つくらゐ大きな誤解をしたまま、今日を迎へてゐるのだらうと思ひます。

(五) グローバリゼーションを巡る三つの誤解

その三つの誤解とは一つに、いはゆる「グローバル化」は今回が初めての現象だといふ見方、二つ目に今のグローバル化は「いつまでも続く現象だ」といふ見方、三つ目に「グローバル化が進んでいけば国家、国といふものの意味がなくなる」「国家が存在価値を失ふ」といふ風に考へることです。この三つが、日本におけるグローバル化論議の決定的な間違ひだと思ひます。

実は、グローバリゼーション現象は歴史上、何度も起つてゐます。これはヨーロッパの歴史で言へば、産業革命が始まりました、十九世紀の初めにイギリスで産業革命がだいた一定着します。蒸気機関が非常に普及したり、あるいは鉄道が普及したり、蒸気船が普及したりします。コミュニケーションの手段が革命的に変わります。一八三〇年代になって来たら、モールス通信のやうな有線電信、テレグラムといふものが普及し始めるわけです。これは革命的に世界の通信事情を変へました。

この時代には国境を越えてモノ・人・情報が行き交ふことが、どこの国でも非常に活発に

行はれました。「さうした方が少しでも豊かになれる」「少しでも進んだ国が生まれる」といふ動機で、この現象は非常に広がりました。しかし、今日のグローバル化と同じ流れとしてつながってきたわけではありません。アダム・スミスの経済学が、市場原理を生み出して、市場、つまり需要と供給が一致する原理を非常に抽象的に説明してゐます。このことにより、イギリス、フランス、ドイツであらうと日本であらうと、どこでも同じ経済の原則が通用するといふ「普遍主義」の考へ方が、非常に強まりました。

しかし、この結果どうなったか、ヨーロッパやアメリカではだいたい十九世紀の半ば頃には、この歴史の潮流は行きづまり、大きな転換が不可避となつてしまひました。特に、一八四八年に西ヨーロッパを中心にして方々の国で、同時多発的な革命がパリ、ウィーン、ベルリンなど、ヨーロッパ中の首都で起りました。これを「一八四八革命」とか、あるいは「ドイツ三月革命」とか、「フランス二月革命」と言ひますが、これは大変大きな出来事でした。といふのも、この革命が起つた後、人々は「市民といふよりは国民」、どの国の国民かといふことの方が、ずっと大事だと考へるやうに急激に変つていきました。「市民対権力といふやうな、いはゆる市民革命的イデオロギー、あるいは抽象的な市場原理とは、一体何だったんだらう。そして、それらが結局行きついてその結果、引き起されたあの混乱は結局、何に

も役にも立たなかつたばかりでなく、世界を混乱させたまま終つた」と人々はこのやうに考へて、幻想を捨て、それまでの「普遍主義」といふ考へ方を信用しなくなりました。

十九世紀の前半は、経済は市場が自由にやつていくもので、政府や国家は関はるべきでないといふ考へ方が普通でした。ところが、そのためにいろんな混乱が起つたわけです。それは十九世紀前半、各国で起つた貿易摩擦です。例へば、ドイツでは、このまま自由貿易を進めてゆけば、イギリスが全部ドイツ経済を握つてしまふ。そこでドイツはドイツで関税同盟を作つてしつかり域内を固めていかなければいけないとして、一つの経済圏を作らうとしました。また、ものの考へ方もそれまでの市場万能を唱へるマダム・スマスの経済学に代り、ドイツの経済学者フリードリヒ・リストが「国民経済学」といふ新しい考へ方を打ち出して來ました。これは、抽象的に、どこの国の市場もみんな一つになつていくのだ、世界は一つの市場だと考へた普遍主義の時代に終止符を打ち、ドイツはドイツの市場、ドイツ経済はドイツの政府が責任を持つて運営するといふ方向にいかなければ、さらなる大混乱が起ると考へたためです。

また、不法移民が西ヨーロッパを横行して、非常に大きな社会問題が生じました。そこでかういふグローバリゼーションによって引き起される混乱を收拾できる枠組みは何だらうか

と考へたとき、ヨーロッパ人は初めて「あつ、これはやっぱり国家、国といふ単位で調整していかなければどうにもならないぢやないか」といふところに気が付いたわけです。これが、第一次グローバリゼーションが終局へ向つていく、*“終りの始まり”* だったと思ひます。

(六) 七十周期説とグローバリゼーション

私は、人間の思想や価値観は、六十年から七十年で大きな周期を繰り返していくと思つてゐます。このグローバル化の流れといふのは、七十年周期で変はる世界史のサイクルと必ず重なつてゐます。わかりやすい例で言へば、今さつき出てきた一八四八年革命の時代にそれまでの「主権より人権」だと考へるフランス革命のやうな革命主義や個人主義などの過激思想は、だいたいこの一八四八年革命で終わりました。

しかし、その後の七十年といふと、今度は一九一七～八年になります。二十世紀初頭、これはロシア革命が起つたり、あるいは第一次世界大戦が終つてアメリカのパックス・アメリカーナの端緒になつたウイルソンの外交が始まつて来ます。それまでの七十年間は、いはばひとまとまりの時代として、国家が大事な役割を果たしましたが、ロシア革命から七十年間

は、再びイデオロギーの時代、進歩主義の時代、つまり抽象的な時代、抽象的な価値観や抽象理念が先に立って国家が比較的軽んじられた時代、普遍主義の時代となったと言っているでせう。さらに、これが七十年経つと一九七〇〜九〇年となり、時代の流れはベルリンの壁の崩壊となります。

このやうに思想史は七十年周期で動いてゐます。このこととグローバリゼーションの振り子といふものが重ってくるわけです。グローバリゼーションの振り子と私が言ふのは、やはり世界を国家中心にもう一度整へ直していかなければ、どうにも秩序がとれない時代が始まつて来るといふことです。これは二〇〇一年といふ年に起つた様々な出来事を見ても、大変象徴的に第三次グローバリゼーションの「終りの始まり」が見えたと思ひます。例へば、どこ国にも属してゐないアルカイダのやうなテロ組織が、あんなテロを引き起した。これはグローバリ化時代だからその出来事ではありませんか。しかも、相手にしたアメリカといふ国はグローバリズムの旗手として、国を自由にどこからでも開いて、つまり飛行機の操縦を誰にも教へる、お金さへ出せば誰にでも教へませう、といふさういふ社会だと言はれてゐます。これはアメリカといふ国のグローバリズムを非常に端的に表してゐます。それゆゑにあんな被害に遭つたと、かう言はれます。

ところがテロにやられると、とたんにアメリカといふ国家が浮上してきて、タリバン政権のアフガニスタンといふ国家を敵にして、星条旗を振り回して国中に「USA、USA」とあのスローガンを叫びました。これは、アルカイダのテロに直面して対処しようと思つたら、必ず国家といふ枠組みに一旦は帰って、そこで問題の調整、解決を図らざるを得ないといふことです。したがって、アメリカは、アルカイダと関係の深いタリバン政権を敵にし、アメリカといふ国の個別的自衛権を発動してアフガニスタンでの戦争をやりました。各国もそれぞれ国連決議と関係なく自国の意志でアフガニスタンに軍隊を送りました。国連決議よりも、アメリカは個別的自衛権で戦争をやったし、それからヨーロッパ各国もイギリスもドイツも、アメリカとの同盟関係を中心にして、アフガンに軍隊を派遣しました。我々日本人は湾岸戦争以後、この十数年なぜか国連を非常に重んじた議論をして来ましたが、国連といふ秩序は「どうもそれもそろそろ終りだ」、国連がまた脇役に戻っていく時代になって来るのではないか、かういふ潮流をこの流れから鋭く読みとっていかなければなりません。

(七) 「戦後」といふ宿命を抱へた日本

国連とは結局、各国がその意志と力を平和的にぶつけ合ひ、自らの主張を他に先がけて実現しようとする場所にすぎません。このことは結局、どこまでいっても変らないでせう。しかるになぜ、日本人だけがかういふ間違ひをするかといふところが実は、一番重要な論点だらうと思ひます。やっぱり戦後といふ日本の古い宿命を我々が未だに克服して来なかつたといふ点が、非常に大きな要因としてあるわけです。それから、「日本とは何だ」といふ自分自身をしっかりと確かに理解・把握をするといふ点で戦後は全く我を失つたままて来たことが大きいと思ひます。この国はどんな国なのか、我々には日本を再発見するといふ宿命がどうしても今、求められます。とりわけ「戦後をいかに克服するか」といふことを早急に考へないと、日本の経済、国家の安全保障にまで、大きな影を落とし始めることになりませう。

そこで、三つくらゐ大事なポイントを挙げておきます。その第一は、戦後の日本人が国としての原則を枉げてでも経済の豊かさ、経済の国益だけを排他的に追ひ求めて来たこと、これは非常に間違つた選択だつたといふことです。第二に世界を認識し確かな自己といふもの

を見つめるさういふ観点が持てませんでした。これはもう言ふまでもなく、歴史認識・歴史観の問題です。特に、あの大東亜戦争を巡って、この日本はどんな国なのか、根本的にこの理解を誤ってしまったことの影響は大きいものがあります。このことは、戦後の様々な体制、憲法から始まって大学の教育、教育の内容、あるいは社会の価値観や人間の生活、様々な理想、若者の行動様式と、かう言ふところにまで大きく影響を与へて来ました。第三は、戦後の日本人は、「民主主義とは何か」といふ考へ方を間違つて来たといふことです。それは今日まで続き、たうたう日々の経済政策にまで及んで来ました。今日、日本のマスコミ、あるいは官僚機構、あるいは経済界、ビジネス界などトップ層にあるリーダー達は戦後、昭和二十年代に小学校、三十年代に中学校に学び、マルクス主義が華やかなりしころの、最も歪んだ「戦後民主主義教育」を受けて来たわけです。

(ハ) バランスある思考の恢復を

これをどう正していくのか、その方法として、私は戦後に失はれた三つのバランスのとれた見方・考へ方を取り戻すことだと思ひます。その第一のバランスは価値観の世界で「モノ

と心のバランス」「物質と精神のバランス」といふものを失ひ過ぎたことです。もちろん、物質は大事な人間存在の条件です。しかし、それが度を超えてモノ・カネ中心の価値観になってしまったとき、モラルとモラール、これは元来一つのもので、わかりやすく言へば心の元氣、これが無くなつてしまひます。第二にこれを端的に言へば「進歩と伝統のバランス」です。これがなければ、その社会は根本的に生きていく力を漸次失つてしまひます。進取の気象とか、新しいことを取り入れていくことは、個人でも国家でも大切なことです。しかし、それが今日の日本では、伝統といふものは全ていはゆる「古いもの」だと考へてしまひ、その「古い」といふ言葉には、何か「悪いもの」だとする価値判断を含むやうになりました。いつ頃からさうなつたのか分かりません。私は二十代の半ばで初めてヨーロッパに留学したとき、当時イギリス人は、「それは古い」「It's old」と言ひますと、それは信頼できる、それは親しめるといふ、さういふ側面もこの響きにはあることを知つて、驚きを感じました。「古いから駄目」といふことには百パーセントならない。むしろ「古いものこそ大体は正しいんだ」と考へるのが人間の歴史においてはふつうの考へだったので。これが大事なバランスだったので。

個人が本当に大きな力を發揮するためには、「自分は長い伝統の中につながつてゐる」と

認識したときに最後の元気が出るものです。進歩主義といふ考へ方は世の中が調子のいい時代に何となく受け入れやすい考へ方ですが、本当に危機に陥ったとき、大変な試練の時代には、やっぱりそこから立ち上がらうとする力が必要になります。その点で大きな歴史の流れの中で、自分はどこからきて、つまりどんな先祖や社会から生まれて来て今、自分はここにある、自分のあとには多くの人が生まれて来て、自分の何かはずっと残ってゆく。自分は一人ではない、人間といふものはこの「縦の流れ」を考へたときに、試練の中で最後のとても大きな元気が出て来るものなのです。

それから三つ目のバランスは、「個人と共同体のバランス」です。個人の自由が重んじられることは大切なことです。しかし、個人に対する一切の拘束が無くなったら、人間は自由になれるのでせうか。「自由」といふ意味は英語の *free* といふ言葉です。これは古代のゲルマン語の *frīi* といふ語に発する言葉です。それは人間が自分の属してゐる共同体の中で、自分自身を発見したときに感じる一番の喜び、これを意味し、西欧人はそれをいま *freedom* と言つてゐます。つまり、彼らがいかに個人を主張しながら「人間の絆」を切実に求めね止まないかを考へてください。どこへ行つてもパーティーはする、クラブといふものを作つて人が群れ集まる、あるいはクリスマス、イースター、感謝祭と言へば、家族がどんな

に遠くにゐても、郷里に戻ってきてみんなで一つになる、これが、生きてゐる喜びです。実はかういふ「人間の絆」が、欧米社会の根幹をなしてゐるのです。教科書で読むやうな個人が全くバラバラになつて、原理主義的な個人主義で人間が生きてゐるやうな社会は欧米のどこへ行つても一つもありません。

(九) 日本といふ国家について

それから過激な進歩主義といふものは、必ず幻滅を生み出し、時代を大きく取り崩していきます。そして何よりも一番重要なことは、例へばヨーロッパの近代国家といふ単位がいかにも歴史を越えたものか、何世紀といふ単位の歴史を超越した存在だといふことを理解することです。ヨーロッパは今、統合の動きが盛んになつてゐます。国家を越える統合は、いはゆるボーダレスな流れではないのかとよく言はれます。しかし、実はここで日本を自覚する非常に大事な材料が与へられてゐるのです。

ヨーロッパの歴史地図を見ますと、絶えず国境が大きく變つてゐます。だいたい私が見るところ千年遡つて歴史地図をひっくり返して見ますと、インドから西、インド以西の世界は、

絶えず一世紀ごとに国境が大きく変つてゐます。ヨーロッパはだいたいローマ帝国以来二千数百年の歴史のうち、ドイツ、イギリス、フランス、といふ風に分かれた時代はたかだかここ三百年だけなのです。紀元前三百年から十七世紀まで二千年間、ヨーロッパは一つの単位としてキリスト教圏、その前にはローマ帝国といふことでだいたい単位が一つなのです。つまり、今のヨーロッパ統合といふのは、二、三百年ぶりにヨーロッパ文明史の原点に回帰していく現象なのです。ですから *more like itself* といひます。「より本質に近くなる変化」といふことです。それ自身の本質に近い形が出てくるのが、二十一世紀なのです。よりその歴史の個性に回帰していく時代なのです。いま世界中で起つてゐる本当にグローバルな変化といふのは、その国その地域のより歴史の本質に戻らうとする変化なのです。これはインド以西の中近東を見ますと、もう絶えずサラセン帝国、ジンギスカンの帝国、ティムールの帝国、あそこはグローバルゼーションがいつも起るポータルレスの世界です。

ところが、一方、五百年も千年も前から、日本はおよそ日本なのです。今日とほとんど国境も変つてゐません。これは北海道、蝦夷地はちよつと別かも知れませんが、平安、室町以来、日本の国のかたちは殆ど變つてゐない。朝鮮半島はほとんど李氏朝鮮、あるいは高麗といふ国です。今とほとんど領域は変わりません。それから中国大陸、今日でいふ「中国本部」

いはゆる支那と言はれる地域は、ほとんど変りがありません。例へば、チベットは中国ではなかつたわけですから、いづれ手放していくのは文明の原点、回帰といふ二十一世紀の流れから言へば、中国はここを持ち続けられないといふことも分つてくると思ひます。あるいはベトナムは安南、徐々に南へと広がつてゐますが北はだいたい国境も国の形も今と同じ、カンボジア、クメール、タイみんなそれぞれ国境はあんまり變つてゐないのです。

それからインド以东のアジアは全部文字が国ごとに一つづつバラバラです。日本は、漢字仮名交り文をすでに使ふやうになつてゐました。朝鮮半島はだいたいここ七百年くらゐ、ハングルでやつて来てゐます。二十世紀になつて一層、普及しました。今日、支那の文字は簡体字ですが、台湾や香港は繁体字といふ漢字です。アルファベットはベトナムとフィリピン、マレーシア、シンガポールで使用されてゐますが、発音が全然違ひます。カンボジアへ行けばクメール文字で、これはほとんど外国人には読めません。タイ文字、ビルマ文字もとなりの国の人でさへ読めないといふ点でみんな同じです。ところがヨーロッパはたつた一つのアルファベット、あるいはキリル文字、つまりロシアアルファベットとせいぜい二つです。先ほど話したインドから西といふのは、だいたいアラビア文字一つです。文明の根幹といふのは、言語、宗教、あるいは神と文字、都市と農村とかいふもので決つてきます。わが日本は

やはりアジアの自然国家であり、とくにアジアの中でもそれ自体で確固たる一つの文明単位であつて、ヨーロッパのやうな近代に人工的に生まれた国とは対極的な、固有の文明に根ざした強い個性を基盤とする国です。しかも周りも自然にでき上がったアジアの自然国家といふ地域伝統の中にあります。

(+) 終りに

このことと共に、二十一世紀は、文明がその原点に回帰していく、それ本来の特質・個性をより発揮する時代になつて来るのだといふことを併せて考へて頂きますと、日本のあるべき姿が見えて来ると思ひます。それから二十一世紀を考へるとき、今日、教室やマスコミその他で盛んに触れられる、いはゆるグローバリゼーション論議といはれるものがかに近視眼的なものか、それを越えた大きな歴史の振り子現象、国家が重要になる時代とボーダレス化が進む時代、かういふ歴史のリズムを常に頭において頂くことが、一番大事なことなのです。三つめに若い日本人の世代がこれから直面するであらう試練の時代に、非常に大きな課題と宿命を実は背負つてゐるんだといふ認識、この三点を是非とも私の話の中からお汲み取

り頂けたら、大変幸ひだと思ひます。

〔質疑応答〕

〔質〕 日本では東京裁判史観が根強くありますが、中国、韓国では反日教育を一貫して行つてゐます。この状況を打破するためには、具体的にどのやうな行動をすべきでせうか。

〔答〕 歴史観の問題は、基本的に日本が国としてやるべきこと、日本人として国家として確認すべきことを、占領が終結した後にしなかつたことに起因すると思ひます。講和条約あるいは平和条約や基本条約を結んだあとは、東京裁判はもちろん戦争に関はる責任うんぬんの問題にはもはや拘束されない、といふことです。恐らく、今、中国、韓国が、かういふ古い、いはゆる東京裁判で示された歴史観を押しつけてくるのは、明らかに現在、未来の彼の国の政治戦略、国益を確保するためなのです。ですからこの意味で、私たち日本人は、歴史の眞実を追究する視点と同時に、彼の国があきらめるまで彼らに根気よく政治問題として対抗していかねばならないのです。単に仲良くしたいから、といふだけで安易に謝罪したり譲歩したりするととんでもない結果を招いてしまひます。そのためには戦略が非常に大事

です。まづ、はっきりとした国家観を持つこと、そして戦前の歴史をよく学んで間違ひのない歴史観をしっかりと持つこと、真実を探究していくといふ純粹な気持ちを失はないこと。これらと併行して、さらに歴史問題を政治問題としてわが国に押しつけてくる近隣諸国の狙ひをよくつかんで、はっきり「これまでとは違ひますよ」といふ断固とした態度をとることです。

しかし、こちらがさうすることで、もしかしたら一層向うは強く出て来るかもしれません。特に中国はさうですが、すべてを政治目的のために利用することは、孫子の時代から彼の国の本質ですから、そこへ共産主義のイデオロギーも重って、きはめて戦略的です。その目的は歴史を利用する対日戦略によって今後、何世紀も日本を押さへ込む、あるいは今の日米関係を分断していかうといふことです。この問題で、もし我々が彼らの言ふ「歴史認識」を受け入れて、「はい、さうでございます」とかうなつたらどうなりますか。今、台湾と日本は、経済・文化の関係で非常に緊密な関係がありますが、これを断ち切りなさいと、かう来るわけです。さうして中国が台湾に武力を行使するときは、日本はアメリカと共に行動をしないと誓約しなさいと、かう来るわけです。そして中国が盟主となる「アジアの共同体」をつくらう、となります。ですから歴史認識、歴史論争といふものは現在、あるいは未来の国

益がかかった重大な政治問題だと、かういふ認識が非常に大事なのです。

〔質〕 文明の回帰といふ言葉を使いましたが、先生のおっしゃった文明とはどんな意味なのでせうか。もう少しお話しください。

〔答〕 第一に、私の言ふ文明といふのは、言語・宗教・文字、あるいは都市と農村の関係、つまりその国の人たちの生き方、あるいは「心の通はし方」がどういふ手段によって行はれてゐるかといふところにあるわけです。一番大きな手段は、言語・宗教・文字のことでせう。

だいたい世界はトインビー初め多くの文明史家は六つか七つの主要な文明からなつてゐると言つてゐます。西洋のキリスト教文明、ギリシャ正教を中心とした正教文明圏、イスラム文明圏、ヒンズー文明圏、中華文明圏、そしてこれらと並んで、日本文明がもう一つ、独特の本質を持つて存在します。しかも日本文明は一つの国で一つの文明を持つてゐるので、これだけで非常にユニークかつ壮大な文明体系なのだと言つていいと思ひます。私たちにすれば当り前のことですが、これは、欧米の多くの文明論者の言ふところでもありません。

かう考へていきますと、日本といふ国は、一つの国でキリスト教やヒンズー教やイスラム教と並列して、独特の体系を持った大きな宗教、言語、歴史の体系的文明なのだといふことが分つて来ます。戦後の日本人は日本の文化とか文明は、「だいたい大陸の中華文明と明治以

降の西洋文明がミックスしてできた文明ではないか」と、こんなことを言ふ人がゐます。これは全く自分自身を失った「自己喪失の文明観」と言はなければなりません。もちろん文明としての原理がともユニークなので、日本の文明は他の文明と同等に説明し尽くせないものがあります。ですから、西欧の合理主義や西欧的な論理で日本のことを議論して、日本は一つの文明体系と言へるのか、をかしい、などと言ってゐるわけです。日本の文明はきはめて独自の体系で、しかも深く個性的な本質をもつてゐますから、我々は「ものすごく大きなもの」を背負つてゐるのです。だから日本はどこまで西欧化しても絶対に西欧と同じにはなれません。同様に、日本は、中華文明をアレンジしたその周辺文明でもあり得ないわけです。日本が周辺文明なら、朝鮮、ベトナムのやうにもっと中華文化を受け入れてゐますが、実際はほとんど受け入れてゐません。手段として漢字を使つたり、律令を受け入れたりしてゐますが、漢字の意味も全然違ふ意味で使つてゐますし、律令の意味も日本型律令、律令体制と言はれてゐます。これは中国の律令体制とは全然違ふのです。

一万二千年間も日本列島には、大変豊かな森の自然がありました。縄文時代といふのは本当に豊かです。川へ行けば魚は溢れるほど、また山へ行けば木の実がいっぱいあります。これは照葉樹林といつて、木の実が採りやすい。さういふ森林が日本列島を覆つてゐました。

しかも外からは大きな勢力は一切入って来ず、きはめて長期にわたって個性を培って来られたのです。さういふ環境の中で、人々の間には他人に対する心遣ひが生じ、その心をお互ひに遣り取りする手段として、言語とか独特の自然観が生まれます。そして、さういふものを全部まとめてゐるのが宗教です。宗教といふものは、この国では長い神道の伝統があり、二十一世紀になつても日本人ならどこのお宮さんでもごく気軽に訪れることができるでせう。

これは全員が神道の神々、日本列島の自然観、人間とは何か、世界とは何か、人間は何のために生きてゐるのか、さういふ基本的なものの考へ方を共有してをり、遠くは一万年も前からここで育まれてゐるからです。その後には仏教が入つて来ても仏教ともうまく融合していいところを取り入れていくのです。これは、日本の国のアイデンティティといつてもよいでせう。日本人は、外からのものには非常に柔軟ですが、しかし、どこまでいつても自分の本質は決して変へようとしなない非常にはつきりとした芯を持つてゐます。これは他の文明圏にその例を見ないほど強いものです。この「芯の強さ」といふものが日本の文明であり、我々日本人の性格の一番譲つてはならないものだと思います。

「質」 私たちが排他的でない、ルサンチマンに陥らない、健全な公の認識を自分に根付かせるためには、どのやうな国家意識を持つてばいいのでせうか。

〔答〕 国家には、**国**といふ意味と、いはゆる英語のステート (state) 国家機構といふ意味があります。これは前者の国を守り、育てていくために使はれる手段です。公の意識を根付かせるには、最初は自然とか自分の家族とか地域とか、自分の目に見えるもので考へていくのが順当だと思ひます。やはり自分を生み育ててくれたもの、家族、村、あるいは自分が所属してゐる人間の絆、集団のために尽す、それを守ることは、すぐ分る公の出発点だと思ひます。

しかし、郷土を守るとか、家族を守るといふことだけで終ると、それは本当の意味での「公」ではありません。肌身感覚で分るものといふのはやはり「私」の集合なのです。「さうではない、目に見える肌で感じる範囲のものだけでなく、それを越える大きなものを守らなければ、結局、目に見える狭い範囲のものは到底守り得ない」と分つたときに人間の意識は、自分を越えた「目に見えないもの」に対する畏怖といふものを感じます。その畏怖と自分の生き方をつないでゆくには哲学が必要です。昔の人はこれを「大義に生きる」といふ言ひ方をしました。現代の日本では、実は、その哲学が無いから肌身感覚のものしかピンと来ないわけです。そしてこの国ではこの哲学を、先人達は、もう何百年にも亘って論じ続けて来ました。

もう時間も過ぎてゐますので、この「公の哲学」を習得するには、本を読んでもらふことをすすめるより仕方がありません。例へば、武士道は「公の哲学」の代表でせう。江戸時代の武士道を論じたいろんな人のものがたくさん残つてゐます。中でも、武士道を一番わかりやすく書いてゐるのは山鹿素行です。この人に『山鹿語類』（中公文庫／日本の名著）といふ書物があります。一番大事なのは己をかける「公」とは何か、我々が矜恃を持つて人生を生きるとはどんなことなのか、ヒントになることがいっぱい出てゐます。ぜひ、読んでみてください。

講義

—— 輪読導入講義 ——

吉田松陰の「士規七則」

亜細亜大学教授・文学博士

東中野 修道



はじめに

明治維新の一つの源流となつた吉田松陰
留学といふ大志の実行に邁進し牢獄へ

士規七則を作つた理由

人の禽獸きんじゆうに異なる所以ゆゑん

吾が宇内うだいに尊き所以ゆゑん

士の道は義

人としての恥

国民の繋がり方がその国の姿となる

はじめに

今回、吉田松陰のことを話すにあたって、皆さんが中学時代に使はれたであろう社会科の歴史の教科書に、どのやうに吉田松陰が描かれてゐるか、七社の教科書を見てきました。東京書籍と日本文教出版の教科書は吉田松陰について何も書いてをりません。大阪書籍、日本書籍、教育出版、清水書院、帝国書院の教科書は、大老井伊直弼が安政の大獄で松陰を死刑にしたとのみ記してゐます。従つて、吉田松陰とは一体誰だらうと思ふ方が皆さんの中にはいらつしやると思ひますので、簡単に、吉田松陰を紹介しておきたいと思ひます。

明治維新の一つの源流となつた吉田松陰

昨年、教科書検定を通つた『新しい歴史教科書』は、皆さんは教科書としては使つてゐませんが、比較的詳しく述べてゐますので、読んでみたいと思ひます。

「かつて関ヶ原の戦いに敗れて領地を縮小されていた長州藩（山口県）は、幕府批判勢力

の中心だった。藩の兵学者吉田松陰は松下村塾という私塾を開き、弟子たちに尊王攘夷を説いて大きな感化を及ぼしていた。松陰が安政の大獄で処刑されると、その弟子であった高杉晋作や木戸孝允（桂小五郎）らが藩を動かすようになり、長州藩は一部の公家と結んで、朝廷をはげしい攘夷論へと導いていった。

松陰が安政の大獄で処刑されたあと、松陰の松下村塾で学んだ高杉晋作や桂小五郎たちが長州藩を動かす、京都の公家に働きかけて朝廷を攘夷論へと導いていったといふのです。そのあと、長州藩は下関を通過するアメリカの商船に砲撃を加へたことから、英米仏蘭四ヶ国の軍隊が下関を報復砲撃する馬関戦争となった。また薩摩藩も神奈川の生麦で英国人を斬り殺したことから薩英戦争となって、鹿児島町はイギリス艦隊に火の海とされた。外国と戦った薩摩と長州は西洋の圧倒的な力を知ることになり、単純な攘夷論では国を救へないことを身をもって体験しました。薩摩藩のちに海軍の人材を多数送り出すことになり、長州藩はのちに日本陸軍創設の中心となりました。しかし当時、薩摩と長州は犬猿の仲でした。それが坂本龍馬の仲立ちで薩長同盟を結び、薩摩と長州が提携して倒幕を目指すことになり、つひに徳川慶喜は征夷大將軍の地位を朝廷に返上して、明治維新となった。このやうな幕末の大きな歴史の流れを、『新しい歴史教科書』は実によく描いてみます。



つまり吉田松陰は尊皇攘夷の志士であり、その松陰が数への三十歳で処刑されたあとは、松下村塾で学んだ松陰の門下生が長州藩を動かすことになって、それがやがて明治維新へと続く大きな流れを形成することになった。その大きな流れの源流を作った人の一人が吉田松陰だったといふことになります。

留学といふ大志の実行に邁進し牢獄へ

さて、これから吉田松陰が書いた士規七則を中心にお話をするわけですが、その前に、この「士規七則」が書かれた状況を次の二点に絞ってお話しておかなければなりません。まづ、これは安政二年（一八五五年）松陰が数へで二十六歳の時、従兄弟の玉木彦介の元服といふ、十五歳の成人を祝ふため

に書かれました。満年齢で言へば、松陰二十四歳、玉木彦介十四歳で、これはちやうど皆さんとほぼ同じ年齢に当たります。

二つ目は場所ですが、これは野山獄の中で書かれました。なぜ松陰は野山獄にゐたのか、といへば、自ら外国に留学しようとしたからでした。当時は今日のやうに、飛行機のない時代でした。危険な、長い船旅の時代でした。そればかりか海外渡航が厳禁されてゐた鎖国の時代でした。その掟を破つたものは磔はりつけでした。そのやうな命がけの留学をあへて目指して失敗し、松陰は牢獄に入つてゐました。

「留学」とはもともと大陸に残留して学問するといふ意味です。学問僧は遣隋使や遣唐使とともに大陸に渡り、使節団が日本に帰つても独り大陸に残留して学問に励んだことから、さうすることを留学と言つたわけです。しかしご承知のやうに遣唐使が八九四年に菅原道真の建白により廃止されてからは、留学する者はなくなつた。そのため凡そ千年間、留学といふ言葉は誰も使はない死語となつてゐました。使はれなかつたけれども、留学といふ言葉は民族の記憶として残つてゐました。日本書紀や続日本紀を繙ひもといて遣隋使や遣唐使の事跡を学ぶものは、それに付随して留学僧のことを知つてゐたからです。その「留学」といふ言葉を近代日本で初めて使つて復活させたのが、吉田松陰なのです。しかも松陰自ら海外渡航

嚴禁の時代に実行しようとしたのでした。

今日から見て無謀と言へば無謀に見えませうが、あの幕末の時代はイギリスの外交官ラザフォード・オールコックが『大君の都』のなかで述べてゐるやうに、砲艦外交の時代でした。つまり、「だれでも力ある者がとり、維持できる者が維持する、それが昔からのやり方」でした。イギリスのみならず西洋世界全体がこの昔からのやり方を踏襲して、アジア・アフリカを植民地化してをり、それを誰も批判しない時代でした。アヘン戦争で大清帝国を破った西洋列強の圧倒的な黒船と大砲、要するに科学技術と砲艦外交の前に、我が国の国家の命運が今にも消えるかのやうに揺らいでゐた時代にあつて、松陰は西洋に行つて西洋を学んで日本に持ち帰り、国家の独立のために生かさうといふ已むに已まれぬ思ひから、文字通り、いのちを賭けて幕末の留学生を志したわけです。

安政元年（一八五四年）四月二十五日、松陰は伊豆の下田から長州藩の足輕の金子重之助とともにアメリカのペリーの軍艦に乗り込みました。ペリーはこの事件について『日本遠征記』のなかで、「この事件は日本の嚴重な法律を破らんとし、又知識を増やすためには生命をさえ賭けようとした二人の教養ある日本人の烈しい知識欲を示すもので、興味深いことであつた。この不幸な二人の行動は、日本人の特質より出たものであつたと信ずるし、又人民

の抱いている烈しい好奇心をこれ以上によく示すものはない」と感動し、日本の前途は「何と有望であることか！」と感嘆の言葉を付け加へてをります。

しかしながら結局ペリーは「人民一人の逃亡を黙認することは日本帝国の法律に反することだ」と考へて、松陰の乗船を拒絶します。その瞬間、松陰の海外渡航は失敗となり、松陰は自ら自首して、江戸の伝馬町の獄に、次いで萩の野山獄といふ小さな獄に入れられるわけです。その野山獄のなかで松陰は意気消沈するどころか、大量の書を読み、多くの著述を行ひました。その一つがこれからとりあげる「士規七則」です。

士規七則を作った理由

「士規七則」の士規とは武士の規範、武士の行動基準のことですから、士規とは人として生きる基準、規範、といふことになります。七則とは七つの原則、鉄則といふ意味でせう。それを書くにあたって松陰は次のやうに言つてゐます。

冊子さつしを披繙ひはんせば、嘉言林かげんの如く、躍々やくやくとして人に迫る。顧おもふに人読まず。即もし読むとも

行はず。苟まことに讀みて之これを行はば、則すなはち千万世せんばんせいと雖いへども得て尽つくすべからず。噫ああ、復またた何をか言はん。然しかりと雖いへども、知る所ありて、言はざること能あたははざるは、人の至情しじようなり。古人こじんこれを古いにしへに言ひ、今我いまこれを今に言ふ、亦また何ぞ傷いたまん。士規七則を作る。

本を開くと、素晴らしい言葉が林のやうに生き生きと迫つて来る。思ふに人は本を読まない。たとへ読んでも、読んで知つた言葉を、生きてみようとはしない。仮りに読んで生きようとするならば、たとへ千年万年をかけても得尽くすことができない、それほど無尽蔵なのである。ああ、これ以上、何を言はうか。これ以上言ふ必要はないが、しかし知ることがあれば、言はないで黙つてゐることができない、といふのが人の常である。昔の人も知ることを言ひ、今もまた私がそれを言ふ。どうしてまた心を痛めようか。ここに士規七則を作る。

分かりきつたことですが、自分が得心したことは言はざるを得ない。伝へざるを得ない。その思ひで書かれたものがこの「士規七則」です。ここでは七つあるなかから四つを選んで話すことにいたします。

人の禽獸に異なる所以

一、凡そ生れて人たれば、宜しく人の禽獸に異なる所以を知るべし。蓋し人には五倫あり、而して君臣父子を最も大なりと為す。故に人の人たる所以は忠孝を元と為す。

およそ人として生れてきたならば、まさに人が鳥や動物と異なつてゐるわけを知らねばならない。思ふに、人には、人として踏むべき五つの道がある。そして君臣の道と父子の道がもつとも重要な道と考へる。故に、人が人であるその根本は、忠孝の道にある。

松陰は私たち人間と鳥や動物との違ひを指摘し、人間には五倫、つまり父子、君臣、夫婦、長幼、朋友といふ、五つの基本的な人間関係に立脚した生き方がある。それが鳥や動物との決定的な違ひである。なかでも重要なのは君臣の道と父子の道、臣下が主君に忠であり、子が父に親孝行であることを挙げてゐます。

そこで人間と鳥や動物との違ひについて考へてみたいと思ふのです。私事で恐縮ですが、愛犬クロが昨年十五歳で死にました。人間で言へば九十歳ほどの長寿でした。もともと野良

犬でしたが、おとなしくて賢い、黒いイヌでした。忠犬でした。クロは今、我が家の庭に埋められ、その上には燈籠が立ってゐます。私たちはそれを墓とみなしてをりますますが、しかし私たち家族とクロとの関係は人間と人間との関係ではありませんでした。私たちはクロを家族の一員と見てゐましたが、クロにはイヌとしての家族はありませんでした。お墓も持たない、言葉もない、言葉で記したクロ一族やイヌ族の歴史もありませんでした。つまり人間はイヌとは違って言葉があり、家族があり、歴史がある。そして我が家の歴史、我が町の歴史、我が国の歴史を、父から子へと語り継いでゐる。我が家のために懸命に働いてくださったご先祖様をお墓に祀ってゐる。国のためにかけがへのないのちを捧げてくださった方々を国家として祀ってゐる。以上のことは人間と動物との決定的な違いです。

つまり人は繋がりつなりの中に生き、生かされ、そして死んだ人とも繋がって生きてゐる。人は死んでも、生きてゐる人は死んだ人と繋がってゐます。人間だけが持つてゐるこの縦糸たその繋がりが、この繋がりを維持し強化していくためには何が必要なのか。それは忠孝があるからです。忠や孝がなくなったら、この繋がりはプツリと切れ、人間はバラバラになってしまふのです。

吾が宇内に尊き所以

一、凡そ皇国に生れては、宜しく吾が宇内に尊き所以を知るべし。蓋し皇朝は万葉一統にして、邦国の士夫世々録位を襲ぐ。人君民を養ひて、以て祖業を続ぎ、臣民君に忠にして、以て父志を継ぐ。君臣一体、忠孝一致、唯だ吾が国を然りと為すのみ。

およそ皇国に生まれてきた以上は、世界に伍して吾が国の尊い理由を知っておかねばならない。思ふに、天皇家は万世一系であつて、いつの世にあつても吾が国の武士は、代々、天皇家から官位と家禄をいただいできた。天皇は民を愛することによつて祖業を継ぎたまひ、臣下と国民は天皇に忠義を尽くすことによつて父の志を継いできた。君臣一体、忠孝一致、これはただ吾が国においてのみさうだと考へる。

ここでは、多くの人間がさまざまな国家を作り成してゐるなかで、私たちが帰属してゐる私たちの日本のことを知っておくべきだと説いてゐます。

万葉一統、つまり万世一系とは、天皇家が連綿とつながつてゐる、断絶がないといふこと

です。天皇と国民は見えない強い糸で繋がってきたし、繋がってゐる。天皇は民を慈しみ、民はそのやうな天皇に敬愛の念を抱いて天皇を仰いできました。この繋がりは先程も申しましたやうに忠孝が基になってゐますが、日本人が天皇陛下を仰いできたのは、天皇陛下のやうに他を思ひ慈しみの心を持ちたいと願つてきたからです。

たとへば天皇と国民との深いつながりは、現在の天皇を今上天皇きんじょうとお呼びしますが今上天皇ご即位十周年の際、平成十一年十一月十二日の読売新聞の社説が「この日を迎えたこととともに喜びたい」と冒頭に述べてゐることからも窺うかがへます。更に続けて社説は「苦しみ、喜びに国民と心をつにする。それが日本の伝統的な天皇の姿だと、陛下は以前話されたこととがある」と日本の天皇家の伝統を紹介してゐます。古来から天皇は政治を動かすお立場ではなく、伝統的に国民と苦楽を共にするといふご姿勢にあられたことを、この社説は再確認してゐるわけです。そして続けて雲仙普賢岳噴火や、阪神淡路大震災などの被災地に天皇皇后両陛下が行幸啓きやうけいなさつたをり、「多くの被災者が涙を流したのは、純粹に人の身を思ふことの尊さに触れたからだろう」と社説は論評してゐました。まさにそのとほりだと思ふです。

天皇陛下が、いかに国民と苦しみ喜びを共になされてゐらしたか、ここにお歌を紹介して

みたいと思ひます。平成七年一月十七日の阪神淡路大震災は未だに恐ろしい記憶ですが、そのをり今上天皇は次のやうにお歌をお詠みなられてゐます。

なむをのがれ戸外に過す人々に雨降るさまを見るは悲しき

阪神大震災（なるゝ地震）を逃れて家もなく戸外に過す人々を、テレビで見ただけでも悲しいことでした。その上さらに、その人々の上に、冷たい雨が降り注ぐ無情さを、今上天皇は「見るは悲しき」とお詠みになってゐます。被災者とお心の一つにされてゐるお姿が、偲ばれてなりません。又、平成六年二月、硫黄島に行幸されたをりは

精魂を込め戦ひし人未だ地下に眠りて島は悲しき

とお詠みになられてゐます。

今も硫黄が噴き出るため一万二千体もの遺骨が未収集のままになってゐる硫黄島は、島全体が大きなお墓となつてゐます。その島を、今上天皇は皇后陛下とともに一周なさつて、硫

黄の吹き出るなか精魂を込め戦った戦死者が未だに硫黄のなかに眠ってゐる硫黄島は悲しい、と詠まれてゐます。戦死者にたいする鎮魂の深いお心のお歌と拝されます。

毎年「全国豊かな海づくり大会」が豊漁と航海安全を願って開催されてゐるさうですが、その「全国豊かな海づくり大会」第十二回大会が千葉県の守谷漁港で平成四年十二月に開催されました。そこにご臨席になられた今上天皇は

荒波の寄せ来る海に放たれしひらめはしばし漂ひ泳ぐ

とお詠みになってゐます。

養殖のいけすから太平洋岸の荒波に放流されたヒラメが、戸惑ひながらも、何とか泳がうとしてゐるその一瞬を、「ひらめはしばし漂ひ泳ぐ」とお詠みになった。何と的確で簡潔なご表現でせうか。その背後には、^{ひらめ} 鮒が荒波に負けずに泳いでいくことを祈られる温かなお気持ちがあります。ひらめはあたかも日本や日本人ひとりひとりでもあるかのやうです。

生きとし生けるものへの温かなまなざしと、その幸せを祈られるお心から、このやうなお歌が生まれ出てきたものと思ふとき、伝統的に国民と苦楽を共になされる皇室のご存在、そ

して国民がそのやうな天皇のご存在を喜び、敬愛する気持ちは、ひいては親子の間においても父母としては子供と苦楽を共にする関係でありたい、夫婦としてもさうでありたい、友人との関係においてもさうでありたい、といふ生き方に繋がつてゐるのです。日本はさういふ国だと知ることだと、松陰は説いてゐます。

士の道は義

一、士の道は義より大なるはなし。義は勇に因りて行はれ、勇は義に因りて長ず。

士の道にあつて義ほど大事なものはない。義すなはち正しいことは、勇気を出すことによつて実行され、勇気は正しいことを踏み行ふことによつて大きくなる。

義とは正しいことですが、その正しいことをするには勇気が必要です。義と勇気とについて私なりに考へてみました。この前、西尾幹二先生のお書きになつた『歴史と常識』といふ本に、「誰でも自分の条件、限界の中で生きてゐる。他の存在にならうとする困難よりも、自分の存在になりきろうとする困難のほうがはるかに重く、そして尊い」といふ表現があり

ました。「誰でも自分の条件、限界の中で生きている」、国家も社会もさうですが、私たち一人一人もさうです。自分以外の他の存在にならうとするときは、そこに無理が生じ、義とか勇氣とかが生まれ出てくるではありません。一方、自分の存在、自分に課せられた責務を知り抜いた人は、その責務を果たさうと平坦ではない道を歩まうとする。そこに自づと勇氣が出てきます。しかし自分の存在を知り抜くためには、自分を知らなければなりません。真剣に自分と向き合ふこと、しかも自分と周囲との「ヨコ糸」のつながりのみならず日本の文化伝統といふ「タテ糸」の繋がりの中で自分を知ることです。困難な道ですが、私も精進してゐます。

人としての恥

一、士の行は質実欺かざるを以て要と為し、巧詐過ちを文るを以て恥と為す。光明正大、皆是れより出づ。

士の行ひは質実で、人を欺くことのないことを肝心要とし、巧みに言ひつくろつては過ちを取り繕ふことを恥と考へる。公明正大な生き方は全てここから始まる。

武士の最も大事なことは、かざりがなく、ウソをつかないことだ、人を騙し、過ちを言ひつくらふことを恥とみなす、と松陰は言つてゐます。

ギリシアのリュカディオ・鳥生まれのラフカディオ・ハーンこと小泉八雲は、「彼らはこの世を去つた人々である。この世を去つた人々を神として考へよ」といふ古代ローマの哲学者キケロの言葉を伝へて、日本人や古代ギリシア人・ローマ人にとって、神々とは死者のことであつたと言つてゐます。仏教は人間が死ねば魂はおろか何も残らないと説いてきましたが、その仏教も日本人が古来から抱いてきた靈魂の觀念は追放できなかつた。亡くなつた人々は神々となつて近くの山に上り、いつも私たちのなすこと言ふことを見守つてゐるから、悪いことは出来ない、悪いことをしてはご先祖様に恥づかしいと考へてきた日本人の信仰心について、ラフカディオ・ハーンは「御靈のあるところ、心の奥底まで純粹であるに違ひない。精神までが支配されてゐるに違ひない」と語り、「かうした信仰や信念が、数千年の長きにわたつて人々の行為に不斷の影響を及ぼしてきた」と結んでゐます。

私たちは死者を神々と考へてきたし、今も考へてゐるから、もともと死者の魂の存在を認めない仏教のお盆の行事が、ご先祖の魂を迎へる行事として、今日まで続いてゐます。今もさう考へてゐるから、シベリアや太平洋の島々で亡くなつた戦死者のみ魂を迎へるため、は

るばる遺骨収集にまで日本人は行くのでせう。

み魂は残ると日本人は考へてきた。そのみ魂に恥ぢない生き方をと、自らの生き方を見つめてきた。恥づることは貧乏でもない、頭がよくないことでもない、恥づべきはウソをつくこと、公明正大でないといふこと、そのやうに松陰も説いてゐるのです。

国民の繋がり方がその国の姿となる

以上、士規七則の中の四つの原則を見てきましたが、この四則の一つ一つをもう一度考へて見てください。根底にあるものは何でせうか。それは人と人との繋がり方、自分との繋がり方、み魂との繋がり方、すべて日本人の繋がり方を説いてゐると思ふのです。この繋がりなかで自分といふ存在が育はぐまれてゐます。この繋がり方は国によつて違ふのです。日本は長い歴史の間、延々と、右のやうな繋がり方で生きて来ました。その日本人の姿が日本の姿だと思つてゐます。一人一人の日本人の姿がほかならぬ日本の姿なのです。

ところがこの日本の国の姿が敗戦後少しづつ変容し、今日ではこの戦前の日本人の繋がり方が見えにくくなつてきてゐます。

敗戦直後は、焼け野原で呆然としてゐた日本人、それが日本の国の姿でした。生きていくために、即ち経済再建のために、必死に働いて、素晴らしいトランジスタラジオを作って、売るためには体を張って地の果てまで行った日本人の姿、それが昭和三十年代から四十年代の日本の国の姿でした。昭和六十年、この年私はアメリカに一年ゐたのですが、この昭和六十年前後はジャパン・アズ・ナンバー・ワンと騒がれ、今となってみれば日本が経済的に復興したことが私たち戦後世代の努力の結果でもなかったにもかかわらず、それが何となく外国にゐて嬉しかったやうに思ひます。昭和六十年、一九八五年は、商人国家日本の絶頂期の時代のやうな気がします。

ところが、このやうな経済的な復興のなかで、日本人は大切な何かを忘れてきました。吉田松陰が士規七則を十四歳の従兄弟に伝へたやうに、親が子に、先生が生徒に、先輩が後輩に、といふやうに、大切だと思ふことを伝えることが、戦後は少しづつ稀薄化していった。いつの間にか、日本といふ国の姿は我々の先人の日本の姿とは大きくかけ離れようとしてゐます。

戦後五十余年といへば確かに長いのですが、しかし日本人の繋がり方はその程度の歳月で消し去られるはずありません。その証拠には、私たちは武士ではありませんが、この士規

七則の内容の幾つかにあまり違和感を持たないはずです。百五十年前のことが、現代の私たち日本人に通じてゐると思ふとき、歴史の中で私たちはずっと繋がってゐると思へてきて、嬉しくなります。先人にたいしても、天皇にたいしても、祖先にたいしても、親子の間でも、友人の間でも、日本人の繋がりがDNAの中に生き続けてゐると思はざるを得ません。

薄っぺらな知識の修得とは別に、自分の体験に照して、なるほどさうだなあと合点する、自得する。さういふ知り方も必要です。私たちは現世における親子、兄弟、友人、夫婦といった横軸と、歴史といふ「いのち」の縦軸とに繋がって生きてゐることを自覚する必要があります。

冒頭に述べましたやうに、吉田松陰は死を覚悟して黒船に乗り込みました。その勇気を考へてみたとき、また吉田松陰が安政の大獄で刑死するまでの死を求めて直向きひたむに生きる生き方を考へてみたとき、それは松陰の人との繋がりが、歴史との繋がりがさうさせたのだと考へられます。それが松陰の勇気をも奮ひ立たせ、安心をも与へてをりました。

松陰はペリーの軍艦に乗り込む四ヶ月前に

亜墨奴あぼくどが欧羅おうらを約きし来るとも備そなへのあらば何か恐れん

備そなへとは艦かんと礮ほうの謂いひならず吾わがが敷洲しきしまの大和魂

といふ歌を詠んでゐます。大和魂のなかに、松陰自身が生きてゐるのです。

また、明日は首を斬られるといふ前夜の安政六年十一月二十一日、吉田松陰は留魂録を書き上げ、その最後を「書きつけてのち」と題する連作五首の和歌を以て結んでをりました。

最初の二首を読んでみますと、

心なることの種々くさくさかき置きぬ思ひ残せることなかりけり

呼びだしの声まつ外ほかに今の世に待つべき事のなかりけるかな

このやうな安心立命の悟りに満二十九歳で達してゐたことに驚かされます。松陰といふ人も生きた日本の歴史に、私自身も繋がって生きていきたいと思ふのです。

講義

明治の精神

——生命は自己への

回帰のなかにある——

（旧）国民文化研究会副理事長

元 九州造形短期大学教授

小柳 陽太郎



村垣淡路守「遣米使日記」

アメリカ人の目に映った使節団

明治日本の課題

岡倉天心とインド

『東洋の理想』

「アジアは一つ」の意味するもの

生命は自己への回帰のなかに存する

世界史の「回転軸」の上にある日本

村垣淡路守「遣米使日記」

「明治の精神」といふ題で話してほしいといふ連絡をいただいたのは去年の終りごろでしたが、偶然、そのころ私は一冊の書物を手にしてをりました。それは幕末、万延元年（一八六〇）に、その二年前に締結された日米通商条約の批准書交換のためにはじめて太平洋を渡つてワシントンに赴いた遣米使節、むらがきはちのかみのりまさ村垣淡路守範正といふ人がしたた認めた日記でした。この本は昭和十八年に出版されたもので、今では手にはひりにくいかも知りませんが、私たちが深く信頼を寄せてゐた九州帝国大学の河村幹雄先生が「日米不戦論」といふ講演録の中でとりあげられたもので、戦前の学生のころ強い感銘をうけた書物でした。私は久々にその本の頁を繰りながら、「明治の精神」といふことになれば是非、この書物をとりあげたいと思つたのです。

「明治」と言へば、現在の低迷する平成の世界とは異り、遥かにスケールの大きな時代、血湧き肉躍るドラマを期待される方が多いかもしれない。しかしこの書物に登場する人物は必ずしもさうではない。平凡なといふのは少々失禮かもしれませんが、それほど特色のある

人物でもない。しかし読みすすんでゆくうちに、そこに登場する人々がどうしてこんなに立派なのかと心うたれる場面が次々に現はれてくるのです。もつとも先程申しましたやうに万延元年といふのは明治維新より八年前、皆さま御存知のやうに井伊直弼が桜田門外で殺された、あの幕末動乱のピークを迎へた年なので、まだ「明治」といふには早いのですが、読みすすんでゆくうちに、その一人々々の生き方、ものの考へ方はまさに「明治」そのものではないか、そんな気がしてならなかったため、いはば「明治の原型」として、今日のお話の最初にこの書物を取りあげることにしたのです。

さてこの使節団の人事が発表されたのはその前年、安政六年九月のことでしたが、正使は新見豊前守正興（にひみかぜんのかみまさおき）、この本の筆者、村垣淡路守は副使でした。その使命を与へられた時の心境を筆者は次のやうに記してゐます。

「かく例（ためし）しもなき大任を蒙り（かうむ）、五大州に名の聞えんことは、実に男子に生れ得しかひ有りなど言ひてすかしけるが」、「すかしけるが」といふのは、自分の気持をつくろつて、氣負つた表現を用ひてはゐるものの、といふやうな意味でせう。「よくよくかへり見れば、おろかなる身にて天地開闢（かいびやく）以来初めて異域の使命を蒙り（天地が開けた時以來はじめて太平洋を越えてアメリカに使ひするといふ重任を与へられ）、君命をはづかしむれば（もし命令通りにやりとげ



ることが出来なければ)、神州の恥辱ちじやくと成りなんことと思へば、むねくるしき事かぎりなし」——日本のことを神州といふ、当時ではあたり前のことですが、そのこともしつかりうけとめて下さい——。しかも、この人たちは幕臣なので、命令も幕府から発せられたのです。しかし、事が一旦、対外関係になると、当時はげしかった朝廷と幕府の対立といふ枠を越えて、すべてが「神州の民」として行動する、そこが日本といふ国のすばらしさではないでせうか。

そして、折しもその日は九月十三日、月の美しい夜だった。それで「折しも月のいとよく晴れければ、御恵みみのかしこさを祝ひつ、酒くみかはして」といふ詞書を添へて次の一首の歌を記すのです。

今よりはこと国人もあふぐらん我秋津洲わがあきつすの月のひ

かりを

これまで常に仰いできた月の光、だが自分たちが大任を帯びて世界に赴くことになればその月は世界中を照す月になるのだ。「秋津洲」とは秋になれば、とんぼの飛びかふ稔り豊かな島、日本の意。そこを照す月がこれからは世界をあまねく照らしてくれるのだ——少々オーバーな表現ですが、いかにも壮大な気宇が偲ばれます。

そしてその次の年、万延元年一月、使節団はいよいよ横浜の港を出航する。ところがこの使節団が乗った船は、実は「ポーハタン」といふ軍艦でした。「ポーハタン」と聞けばあつ、あの艦かと思はれる方もをられるでせう。さうなのです。これはそれより七年前、安政元年、あの吉田松陰がアメリカに渡らうとしてペリー提督の軍艦に乗りこみ、遂に拒絶されて志を遂げることが出来なかつた、あの艦がこのポーハタンだったのです。あれから数へて僅か七年。その同じ船が、日米条約批准の使者を乗せて太平洋を横断する。全く信じられないやうなドラマの展開ですが、あのころはさういふ激動の時代だったのです。

かうして太平洋に乗り出すのですが、その間、猛烈な嵐に襲はれたり、ハワイのオアフ島に寄港、カメカメハ四世に謁見したりしながら三月九日、漸くにしてサンフランシスコに到

着するのですが、実はそれより六日前三月三日には、先程申しましたやうに、江戸城、桜田門外で大老井伊直弼が殺害されるといふ幕末の歴史中、最大の激震が走った。勿論、使節一行はそのことなど全く知らないまま航海を続けてゐたのですが、さういふ時代背景の前に使節の姿を浮べること大切でせう。

その後、船は米大陸沿ひに南下、パナマでポーハタン号と別れて陸峽を汽車で横断するのですが、そのパナマでポーハタンの乗組員と別れる時、淡路守は「初めての航海、御国（日本）より数日、辛苦をともにせしが、いと心厚くいたはりける真心をおもへば、御国の人にわかる、心地して、かへり見がちなり」といふ真情あふれる詞書を記して次の一首を詠んでゐます。

姿見ればことなる人とおもへどもその真心はかはらざりけり

日本人とアメリカ人、その姿は全く違ふけれどもお互ひに通ふ「真心」の世界、それを航海の中で生活をともにしながらに経験したことがどんなに大きな収穫だったか、真心さへあれば心は必ず通ふ、鎖国の窓を開くといふことはかういふことだったのか、としみじみ体験

した使節一行の心情が偲ばれてなりません。

かうして長い航海を終へて一行はワシントンに到着。愈々大統領と謁見、批准書の交換の儀式に臨むのですが、その時人々が日本人としていかに胸をとどろかせてゐたか、その様子は、日記の一節、「かゝる胡国ここくに行て、皇国の光をかゞやかせし心地し、おろかなる身の程も忘れて、誇り貌がほに行くもをかし」といふ言葉や、その折に詠んだ次の二首の歌に活写されてゐます。

えみしらもあふぎでぞ見よ東なる我が日の本の国の光を

おろかなる身をも忘れてけふのかくほこりかほなる日の本の臣

ただかう心を躍らせながらも、この席で米国の大統領が四年毎の選挙（日記では選挙のことを「入札」と表現してゐるのも愉快です）で決められるといふことを聞き、大統領といつても、それは国王ではない、一般の国民の中から選ばれた存在にすぎないことを知って、国柄のちがひに今さらのやうにおどろき、それならこんなにまで正装で来なくてもよかつたのに、と

述懐してゐるのも一つのユーモアでせう。

ともかくこの文章にあふれる堂々とあたりを払ふやうな威厳、それが日本からはじめて異国の地を踏んだ外交使節の姿だった。それは本人の記録に偲ばれるだけではなく、当日の様子を伝へたワシントンの新聞の報道によつても、その見事な応待ぶりは瞠目どうもくに価するものがあつたと思はれます。その新聞には次のやうに記されてゐました。

「此の会見は一般の予想に反して嚴肅そのものであつた。……使節の人々は品格も高く、名誉を備へ、聰明にしてたしなみ深き人物であつて、新世界アメリカの全知能を以てするとも、到底かゝる人物には、細々こまこまとした礼節においても、また役目に対する立派な責任感についても、それ以上何かを加へることは、不可能なことは明白であつた」

これ以上の賞賛の言葉はないでせう。アメリカの人々は祖国の栄光を背負つて立つ日本の使節団のもつ威厳に心から驚歎の言葉を發してゐる。平成の時代の外務官僚の醜態に比してそのあまりの違ひに愕然としない人はゐないでせう。その時代の人々はかくも氣高い威厳を備へてゐたのです。

そのあと一行はしばらくワシントンに滞在、さまざまの施設を見学したあと、ボルチモア、

フィラデルフィアを経てニューヨークに行くのですが、ここでは軒毎に「御国旗——日の丸」がはためいてゐて、町をあげての歓迎をうけるのです。ところがその民衆の中には、当時アメリカの精神を見事に表現して、アメリカ全土に強烈な反響を呼んだ詩集『草の葉』の作者ホイットマンがゐて、後に「ブロードウェイ・ページェント（ブロードウェイを進む壮麗な行列）」といふ長詩を発表したのです。その最初は、

「西の海を越えて、ここ日本より、

礼儀正しく、両刀たばさむ色浅黒き使節たち、

無蓋馬車むがいに悠々と、無帽のまゝ、怯ひるまず臆おくせず、

けふ、マンハッタンを乗り打って行く」

といふ言葉からはじまるのですが、この「東洋」から太平洋を越えて、遙々、ニューヨークのマンハッタンに姿を現はした日本の使節と、アメリカのデモクラシーを身を以て体現したホイットマンとの出会い、それは日米交渉の一頁を飾る、記念すべき、歴史の一コマと言ふべきでせう。

アメリカ人の目に映った使節団

この他、申し上げたいことは多いのですが、彼らがアメリカの人々にどんな深い感銘を与へたか、それについては新聞に掲載された大統領謁見の場での感想は紹介してをきましたが、その他にも次のやうな文章が残されてゐます。その一つは、日本人が「公」と「私」との関係をいかに厳然と区別してゐるかについて述べた一文です。それは太平洋を横断したポーハタン号に乗り組み、その後もワシントンまで行動を共にした、ジョンストン中尉の日記の一節です。

「日本人は大統領の官舎で協議を遂げることが最も重大な使命で、未だ政府に信任状を奉呈せざる以前に、歓迎を受けたり、知己（友人）を作ることとは官吏としての礼儀に副はざるものであると考へてゐた」

日本の使節たちにとって最大の目的はいふまでもなく、大統領官邸における批准書の交換だった。従つて彼らはその「公」の使命を果さないうちに「私」の世界で、個人的な人間のつき合ひは絶対にあつてはならぬこといふ信条を貫いたといふのです。アメリカ人の目には、

それが実に潔癖な、すがすがしい態度として強烈な印象を与へたのでせう。ジョンストン中尉はこのことにかぎらず、使節たちの身のふるまひについて、さらに次のやうな感想を洩らしてゐます。

「彼らには外から彼等を拘束する法則はなくても、内から自らを律する法則があつて、常に人と交はるときには快活な態度を以てし、かつ官紀を守ることを厳にして、私の事や娯楽と、国家無上の威力を以て命ずる政治上の公事との間に、厳然たる區別を立てて、敢へて之を犯すことがなかつた」

この公私の區別、それは、外から規則によつてしばられたやうな行動ではなかつた。彼らは公の使命を与へられた者である以上、かくすべきであるといふ倫理観は、自からを内から律するものとして、当然のことのやうに身についてゐた。そのことに感歎の声を發したのです。

公私混同の類廃し切つた現在の日本、それを正すためには「法の規制」を嚴重にする以外にはないといふ情ない現代の思潮に馴れ切つた私たちの目にも、彼らは使節の行動がいかに新鮮に映るか。日本人は元來、かくも清潔な民だつた。感慨なくしては読めない一文です。それは民族の習慣、感情を越えてアメリカの人の心を強烈に打つたのです。

もう一つ、これはワシントンの新聞報道の記事の一節ですが、当時の日本人がいかに進取の気象に富み、将来の日本の国の設計のために全心を集中させてゐたかを示す貴重な証言として是非心にとめていただきたいのです。それは彼らがワシントンの国会議事堂を見学に行った時、新聞記者の心に焼きついた情景でした。

「一行は、議事堂を隅なく案内され、華麗を極めた天井をも示されたが、紹介を受けたアメリカ人達の驚いたことには、何よりも一行が興味深く覚えたやうに見えたのは、建物にもあらず、天井にもあらず、実に立法手続きの議事進行法そのものであった」

あのきらびやかな議事堂の建物、天井の美しさ、それらには目もくれず、アメリカの政治の実態、議会が果す役割についての知識を学びつくさうとする進取気鋭の精神、それにアメリカの人は舌を巻いたのです。しかも彼らは、明治になってから一年半をかけて米欧を視察した「岩倉使節団」とは違って、條約批准の使命を帯びた一幕臣にすぎなかつた。しかも當時にあつては日本の政局がどのやうに展開するかも全く予想もつかない時代だったことを思へば、アメリカ人ならずとも本当に驚歎に値することと思はれてなりません。

その後彼らはニューヨークを發つて、帰途は大西洋から喜望峰を廻り、印度洋を渡つて世界を一周。日本に帰つてくるのですが、最後にいよいよ日本の国土を目にした時の感動を詠

んだ二首の歌を紹介しておきませう。初めの歌は、紀伊半島を迂回して、伊勢神宮の山々を遠く拝した時、二首目は伊豆半島の突端、下田の沖から富士山を望んだ時の歌です。

うれしやなまづふしをがむ我が国の神路かむちの山の高き恵めぐみを

和田の原朝日をさして限りなくはしりつくせば向ふふじの根

「神国の民」としての心情のあふれる歌といつていいでせう。

以上で村垣淡路守の「遣米使日記」の紹介を終わりますが、最初に申し上げましたやうに、この使節の一行は、とりたてて数へあげるやうな人物が交つてゐたわけでもない。いはば彼らは平均的な外交官僚にすぎなかつた。それなのに、その行動の一つ一つが外国の人の目には驚歎に価する見事な身の振舞だつた。「明治の精神」といふのは、特にすぐれた人達にだけ許されたヒロイックな行動ではなく、実はかういふところに生きてゐたのです。

幕臣であらうとなからうと、外国と接する時はすべてが「神州の民」としての誇りと使命感に支へられてゐた。しかも、アメリカを胡国とか、えみしとか、礼儀なき国とは言ひながらも、言外にあふれるアメリカの人達への友情、お互ひに「真心」をたしかめあつた時のよ

ろこびや信賴感、さらに「公」と「私」をきびしく律する倫理觀、そのすがすがしい生き方、使節の一人々々が日本のその將來を双肩に背負ふやうな探究心、「怯まず臆せず」、あのホイットマンを感動させた身の振るまひ。まさしく「明治の精神」の見事な表現と言ふべきでせう。

明治日本の課題

かうして使節が日本に帰つてから八年、さまざまな曲折を経て、明治維新の日を迎へるのですが、その後の日本を包む国際情勢、それがいかに困難な道なりだったか、ここで改めて申すまでもありません。ともかくこの時期は、北からロシア、南からイギリス、フランス、さらにドイツ、東からはアメリカの植民地獲得の猛威が東洋の空を蔽つてゐた。その嵐のただ中、日本はいかにして独立を維持するか、それが日本にとって最大のテーマでした。しかし、そのためには目の前に横たはつてゐる朝鮮半島を、西欧侵略の魔手から逃れさせるためにはどうすればいいのか、それが喫緊の課題でしたが、まづその前には朝鮮が、清国の言ふがままになつてしまふやうな自主性のなさ、それを排除して朝鮮をして眞の独立国たらしめ

なければならぬし、頑迷にして尊大な清の国のありやうを改めてもらはなければならぬ。その苦汁の選択に、明治の先人たちがどんなに心を碎いたか。日本は明治の初年から西欧の尻馬に乗って侵略戦争をはじめたなどといふ、驚くべき俗論を排除して、真剣にあの時代の日本が辿った足跡を偲ぶべきだと思ひます。

ともあれ、さういふ日本の悲願は達せられることなく、遂に日清戦争になり、それに勝利は収めたものの、その直後の三国干渉と、そのため遼東半島を還付したことによるロシアの満洲進出は目を追って熾烈を極め、朝鮮半島は風前の灯になってゆく。かうして目前に迫ってきた危機感、その象徴的事件として明治三十四年七月、満州の北端を流れるアムール川（黒竜江）の北岸、ヴラゴウエシチェンスクにおいて、四千人近い清国人をアムール川に追ひ込んで虐殺するといふ、文字通り、血も凍るやうな事件が発生するのです。このロシアの所業に対して、満身の怒りを歌ひこんだ、当時の第一高等学校の記念祭歌「アムール川の流血や」は満都の人々の心を動かししました。

アムール川の流血や

氷りて恨み結びけん

二十世紀の東洋は

怪雲空にはびこりつ

○

満清既に力尽き

末は魯縞も穿ち得で

仰ぐは独り日東の

名も香んばしき秋津島

「末は魯縞も穿ち得で」の「魯縞」とは中国の「魯」の国で産する美しい絹織物のこと、どんなに強い矢でも、その勢ひの尽きる時には、薄い絹織の布さへ通す力を失ってしまふといふ意。満州族が支配する、あの強大な清の国も今は魯縞を突き通す力さへなくなつてゐる。かうしてすべての力を失つたアジア、その中でただ一つ、

「名も香んばしき秋津島」

この美しい日本の国だけが、西欧の侵略を喰ひ止めることが出来る最後の砦なのだ、高らかに国の誇りを歌ひあげた歌詞でした。「秋津島」といへば、このお話の冒頭に紹介した

村垣淡路守の歌の中にも「我が秋津洲の月のひかり」といふ言葉がありましたね。「名も香しき秋津島」と、さう聞いただけで、人々の血は湧き立ったのです。この悲惨なアジアの現状、しかしそれは決して満洲の地だけではなかった。アジア全土が西欧の侵略の前で喘いでゐたのです。

岡倉天心とインド

この「アムールの流血」の惨事が起きた明治三十四年の十月、明治を代表する思想家として著名な岡倉天心がインドへの旅に出発します。

岡倉天心は、明治二十三年、創立されたばかりの東京美術学校の校長に就任、当時僅かに二十九歳でしたが、新しい時代を迎へた美術界において、いはば牽引車の役割を果す、押しも押されもしない存在でした。しかしその後八年、明治三十一年、天心の志は世に容れられず、美術学校の校長を辞し、横山大観、下村観山、菱田春草ら、日本画の俊秀を率ゐて「日本美術院」を創立、新しい美術運動に渾身の力を傾け、時代に風雲をまきおこした存在でした。その天心がこの年、飄然としてインドに姿を現はすのです。

天心にとっては愛してやまぬ日本の美術、その源流をなす、中国やインドの美術には深い尊敬と愛着をもってみました。中国はすでに明治二十六年、洛陽、西安は勿論、さらに遠く四川省の成都あたりまで踏破して、心ゆくまで、無数の遺跡を訪ね、美術品に接する機会をもったのですが、この度、長い年月、心から離れなかったインドの地に足を踏み入れたのです。そしてまづガンジス川の下流、ベンガル（今のバングラデシュ）に足をとどめるのです。その天心の目に映ったのは、イギリスの植民地として茫然たる日々を送るベンガルの人々のあまりにも空ろな表情でした。それはあの「末は魯縞も穿ち得ぬ」力尽きた満清のすがたそのままでした。同じアジアの民、血をわけ合ったアジアはいままさに滅亡に瀕してゐる。

天心はその時の痛切なおもひを書きとめた『東洋の目覚め』といふ一文を英文で執筆してゐます。それはどういふわけか、長いこと筐底かきうていに秘められて昭和になって発見されたのですが、その冒頭は

「アジアの兄弟姉妹よ！」

といふ呼びかけからはじまって「われわれの父祖の地は、大いなる苦難のもとにある。……男たちは無言の恥辱のうちにあつて、互ひに見かはすだけで、その恥辱を認める勇氣もない。

女たちは、今では英雄を生むために結婚するのではない」と続くのです。全く氣力を失った惨めなアジアの民に対する痛哭のおもひのこめられた一文です。そして天心は再び呼びかける。

「アジアの兄弟姉妹よ！」

そして、現実を直視することをためらふ人々に対して

「さあ、ふたたび現実に目覚めようではないか、……さあ、もう一度現実といふ苛酷な岸に上陸しようではないか」と訴へるのです。

現実には苛酷です。しかしいかにつらからうともその苛酷な現実を直視する以外に、眞実の人生ははじまらない——。天心の言葉ははげしい。しかしこのやうに天心の言葉を引用してゆくと、皆さんはおそらく、それは現代の日本を生きる私たちに呼びかけた言葉かと錯覚されるのではないでせうか。天心がベンガルの青年に訴へたのが西暦一九〇二年、そして、その日から今年は丁度百年、まさか天心は百年後の日本がかうならうとは想像もしなかつたでせうが、いまこの言葉に接してゐるとその日のベンガルと今の日本の二つが重なって慄然たるおもひがいたします。

天心はこのやうにベンガルの青年を励ましたのですが、実はその時、天心の傍にあつてその言葉に耳を傾けてゐた一人の人物がゐた。それはラビンドラナート・タゴールといふ名の天心より一つ年上の人物ですが、それより十年後、ノーベル賞を受賞したインドを代表する詩人でした。タゴール家といふのはこの地方で有数の富豪でしたが、天心がその家に身を寄せてゐたため、タゴールはその言葉に親しく接することが出来たのです。そのタゴールが、昭和四年、その時は天心はすでに他界して長い月日が経つたあとでしたが、日本に来て講演した、その中で、彼は天心の印象を次のやうに語つてゐます。

「幾年か前のことですが、わたしは日本から来た一人の偉大な独創的な人物に接した時に、私は真の日本に出会ひました」

タゴールは「真の日本人」に出会つたと言はないで、「真の日本」に出会つたと言つてゐますが、それは天心といふ人格の中に「日本」といふ国のすべてが表現されてゐたと感じたからなのでせう。凄いい言葉です。

「この人は長い間わたしどもの客となり、そのころのベンガルの若い世代に測り知れない靈感を与へました。…これは意義深い事件であり、わたくし自身の生涯の中の記念すべき出来事でありました」

天心がそこで何を語ったか、それは恐らく先に紹介した『東洋の目覚め』で引用したベンガルの惨状についての痛切なおもひだったにちがひありません。そして「さあ再び現実に目覚めようではないか」と訴へたことでせう。では、その「現実に目覚める」ためには一体どうすればいいのか、タゴールはその時の天心の言葉を、次のやうに記してゐます。その時天心は青年たちに「あなたがたは、東洋の真価にふさはしい人間の精神に雄大な表現を与へることを生涯の使命とするやうに」と要求し、さらに、次のやうに語ったといふのです。

「すべての民族は、その民族自身を世界に現はす義務を持つてゐます。何も現はさないと
いふことは民族的な罪悪と言つてもよく、死よりも悪いことであつて、人類の歴史において許されないことです。民族は彼らの中にある最上のものを提出しなければなりません」
先程も申し上げたやうに、いま私たち日本の国は、その日のベンガルと同じやうな暗澹たる日々を送つてゐる。現実に目覚めることを恐れ、無自覚といふ河をただよひ流れるままに身を委ねてゐる。その日本が本来の姿をとりもどす契機は、ここに天心がいふ「すべての民族は、その民族自身を世界に現はす義務をもつてゐる」といふ一語に尽きるのではないでせうか。「現はす」といふのは何も、それを言葉で表現するといふことだけではない。その民族でなければ出来ない姿を、身の処し方そのものによつて世界に示さなければならぬので

す。あの遣米使節の人々が、ただ黙々として行つた所作、動作が、いかにアメリカの人の心を打つたか、それは先程お話しした通りですが彼等はそれによつて「民族自身を世界に現はす義務」を果したのです。

そして天心はさらに加へて「何も現はさないといふことは、民族的な罪惡と言つてもよく、死よりも悪いことであつて、人類の歴史において許されぬことです」と、激しい言葉で訴へ、さらに「民族は彼らの中にある最上のものを提出しなければなりません」といふ言葉でしめくくつたのです。私たちはベンガルの青年に訴へたこの天心の言葉を、まさに私達自身に語りかけられた言葉として受けとるべきではないでせうか。

『東洋の理想』

その後、天心は北の方に足を伸ばして釈迦の遺跡をまはり、西インドを経由して遠くネパールに近く、遙かにヒマラヤを望むマヤパッチまで北上、その年の十月帰国の途につくのですが、その翌年、明治三十六年、ロンドンの書店から『東洋の理想』を出版するのです。これもまた英文の著作、しかもその翌年から次の年にかけて、日本が日露戦争に勝利を収め

たこともあって、世界の人々から注目を浴び、一世を風靡する名著になったのです。

この『東洋の理想』の冒頭は有名な「アジアは一つだ」といふフレーズから始まる。『東洋の目覚め』の書き出しは「アジアの兄弟姉妹よ！」でしたが、そこに見られた肉親の愛情で結ばれたアジアといふだけではなく、天心はそれをさらに大きく包みこんで「アジアは一つだ」と断定する。ここで天心は単にアジアへの親近感を訴へるだけではなく、アジアが体現した文化そのものについて語らうとすることです。それはあのタゴールの文中にあった、天心自身がベンガルの人達に要求した「東洋の真価にふさはしい人間の精神に雄大な表現を与える」ことを自ら実践した、天心自身の解答だったと言ってもいいのではないでせうか。

天心は西洋の東洋侵略に対して、武器をとって戦ふのではなく、西洋の文明そのものあり方と対決、彼らの侵略の意志のよって来る根底に迫らうとすることです。

本文は次のやうに続きます。

「アジアは一つだ。ヒマラヤ山脈は二つの強力な文明——孔子の共同主義と、ヴェーダの個人主義のインド文明とを、たゞこれを強調せんがために別つ」

「孔子の共同主義」とは、例へば儒教において大切にされる五倫の道、父子、君臣、夫婦などの人間関係を大切にする生き方をさすのでせうし、インドの「ヴェーダの個人主義」の

ヴェーダとは古代インド、バラモン教の聖典をいふのですがそこに示された「個人主義」といふのは佛教における「出家」にも見られるやうに、一切の社会の絆きずなを断ちきつて一人々々が悟りの世界を求めようとする生き方をいふのでせう。その中国とインドの二つの文化圏を切り裂くやうに、東西にヒマラヤの山脈が横たはつてゐる。

「しかしながら、この雪の障壁を以つてしても、あの究極と普遍とに対する広い愛の拡がりを、たゞの一時も遮さへぎることは出来ないのだ」と続くのです。

以下非常に難解な文章ですから、その概略を私なりにうけとめながらお話しませう。「中国とインド」、たしかにそこにはこのやうに大きな違ひはあるが、そこに今、怒涛のやうに雪崩れこんできた西洋の文明と比べてみれば、この東洋には、その中央に横たはつた雪の障壁、ヒマラヤ山脈もそれを断ち切ることの出来ない共通の世界がある。共通の世界、それは究極と普遍とに対する広い愛の拡がり——あらゆるものを包みこんで、人間の生き方の究極を示す普遍的なものにふれようとする深い愛情なのだ。だがそれに反して西洋の文明は、天心の言葉をかりれば、「特殊に留意することを好み、生活の『目的』ではなしに、『手段』を追及することを好む文明」だといふのです。大変難しい言葉ですが、次の天心の言葉を読み

ば天心が何を言はうとしてみたかがお解りいただけるのではないでせうか。

「アジアは、時間を食ひつくす機関車の激しい歓喜といふものを全く知らない。だがしかし、アジアは、いまなほ、巡禮と行脚僧との、はるかにより深い文化をもつてゐる」

すなはち、ヨーロッパには「時間を食ひつくす機関車の激しい歓喜」がある。猛烈な勢ひで驀進してゆく機関車、それはたしかに人々の心をときめかせる。快哉を叫ばせる何かがある。しかしそれは所詮、人々を一刻も早く目的地に運ばうとするための「手段」にすぎない。だがアジアの世界で大切にされたのは、そのやうな生活の「手段」ではなく、生活の「目的」なのだ。アジアの人々は人生は何のためにあるのか、その「生きる」ことの意味そのものに最大の関心を寄せる。「巡禮と行脚僧とのより深い旅の文化」とはさういふことなのです。

この、生活の「目的」ではなく「手段」を追及する、さういふ西洋の生き方が、いま凄じい勢ひで世界を征服し、東洋のすべてを植民地にしようとしてゐる彼らの意志の根底にあるのではないか。この西洋とのたたかひ、それがいま、東洋に課せられた最大の課題ではないか。天心が、この書物を『東洋の理想』と題し、その冒頭に「アジアは一つだ」といふ言葉を置いたのはさういふことだったのです。

「アジアは一つ」の意味するもの

ただこの「アジアは一つだ」といふことには反論があるかもしれない。たしかにさうは言つても、やはり、日本と中国とインド、そこにはそれぞれの違ひもあるし、特色もある。とりわけ日本の文明のすばらしさは際立つた存在なので、それらをすべて「アジア」といふ世界に一括するのはをかしいといふ考へです。たしかにそのことは当然ですし、天心にも勿論、そのことはわかつてゐたはずですが。だが天心が敢へてさう言ったのには、もう一つ重要な理由があつたのではないか。

といふのは、インドの文明であらうと中国の文明であらうと、そのすべては東へ東へと流れて日本列島にたどりつく。そしてそれらはこの日本の中に実に見事に生きてゐる。現在は仏教もインドでは殆んど影をひそめてヒンズーの世界になり切つてゐるし、中国でも毛沢東の時代に声高に論じられた孔子への批判に見られたやうに、共産党政権のもつ世界観と儒教が両立するはずはありません。だが日本にはいまそのすべてが生きてゐる。仏教は聖徳太子以来、すべての日本人の心の底に脈々と生きつづけてゐるし、儒教もまた、特に江戸時代か

ら明治にかけて、国民全体の思想生活の根幹として生命を保ってきた。それを思へば、天心が「アジアは一つだ」と言ったのは単にムードの上で言ったのではなく、インドの仏教も、中国の儒教も、すべてが、この日本の中に生きてゐる。日本といふ国民生活の中に統一されて生きてゐる。天心はそれを実感し得たからこそ、「アジアは一つだ」と断定することが出来たのではないでせうか。そのことを天心は別のところで「(アジアの)複雑における単一を、特に明白に実現することは日本の偉大な特権であつた」と言ひ、つづけて「万世一系の天皇を戴くといふ無比の祝福、嘗て征服されたことのない民族だといふ誇らかな自恃じじ(自らを恃むたもころ)……これらのものが、日本を、アジアの思想と文化との『心の信託倉庫』たらしめたのである」と述べてゐます。

日本は万世一系の天皇を戴き、他から征服されたことのないといふ、他に類を見ない、すばらしい民族の誇りがある。そのために、日本は「アジアの心の信託倉庫」「アジアの精神を安心して預けることの出来る国」になることが出来たのだといふのです。また天心は「日本はアジア文明の博物館である、いな博物館以上のものである」とも言つてゐます。なぜなら博物館はそこに遺物が収められてゐるだけだが、日本ではそのすべてが生きて働いてゐる、そこに日本の偉大さがあると言ふのです。

なほここで私なりの感想を一つ加へさせていただければ、日本をして「アジアの思想と文化の信託倉庫」たらしめた一つの大きな原因は、日本民族には謙虚にして、しかも強烈な「学ぶ力」「外来の文化を摂取する力」があつたからではないでせうか。日本は遠い聖徳太子の時代の「遣隋使」以来、大陸の文明を実に謙虚に学びに学んだ。あの玄界の荒波を越えて、文字通り命がけて学んだのです。それはあの遣米使節がアメリカの国会議事堂で、その建築や天井に目もくれなかつた、あの「学ぶ力」にも通じる、日本人の生き方そのものだったのです。この、世界の国々の中でもとりわけ比較を絶した「学ぶ力」、「摂取する力」それが日本をして「アジアの思想文化の信託倉庫」たらしめた。さういふさまざまなきを見究めながら天心は「アジアは一つだ」と断定したのではないでせうか。

かうして、天心はアジアには、西洋とは本質的に異つた文化が生きてゐると断定したのですが、さらにその文化のありやうを天心は、「アジアのすべての人の心に脈打つ平和の鼓動」といふ言葉で表現してゐます。天心の言葉は次の通りです。

「アジアの栄光……それは、すべての人の心に脈打つ平和の鼓動の中にある。帝王と農夫とを合一させるあの調和の中にある。あらゆる共感と、あらゆる礼儀の念をおこさしめる、あの崇高な一体化の直感の中にある。……それで高倉天皇（註・醍醐天皇のことか）は霜

がその貧しい民の竈かまどに冷たく降りてゐるからといって、ある冬の夜、その御衣をぬぎ給ふたのである」

「すべての人の心に脈打つ平和の鼓動」、そこでは元来対立すべき二つのものが常に融けあつて、美しい調和を保つ。そこに生れる「崇高な一体化の直感」、それはとりわけ、日本における、天皇と国民の間に流れる「君臣の情」において著しい。この「平和の鼓動」それが、対立と相剋にあけくれ、征服欲にまみれてゐる西洋の世界とどんなに違ふか。私たちは今こそこのアジアの「平和の鼓動」をとりもどし、それを蘇らせなければいけないのです。

生命は自己への回帰のなかに存する

それを思ふ時いつも私の心に浮ぶのは、やはりこの『東洋の理想』の中に記された天心の言葉で、「いかなる樹木も、種子のなかにある力よりも、より大となることは出来ない。生命は、つねに、自己への回帰のなかに存する」といふ言葉です。アジアは蘇らなければならぬ。しかしそれは「自己への回帰」以外にはない。自己の中にひそんでゐるもの、種子の中に蓄へられた力によってそれははじめて可能だといふのです。

天心は以前、美術学校で行った日本美術史の講義の中にでも「歴史」の問題にふれて次のやうに言つてゐます。

「世人は歴史を目して、過去の事蹟を編集したる記録、すなはち死物となす」、しかしそれは大きな誤りであつて、「歴史なるものは吾人の体中に存し、活動しつつあるもの」である。従つて、「古人の泣きたるところ、古人の笑ひたるところは、すなはち今人の泣き、あるいは笑ふの源をなす」ものだ。私達の祖先は三韓を征服し、蒙古の大軍を撃破した。勿論私たちはその時代に生きてゐたわけではないが、「三韓征伐、蒙古襲來の事蹟は、歴然として吾人思想の一部をなす」。それらの歴史は私たちの心の中に、思想の中に生きてゐる。思想の一部になつて生きてゐる。それは私たちがその時代に生きてゐようとゐまいと関係はないといふのです。それは、日本の美術史に思ひをひそめた天心にしてはじめて言へる実感だったのでないでせうか。飛鳥であらうと、天平であらうと、それらの美術を生み出した力は、今なほ、日本に生きてゐる。すなはち私たちの血の中にある。それを自己の中に発見することそれが歴史を学ぶことだ、それは美術を通しての天心の確信だったのです。

表題にかかげた「明治の精神」についても全く同じことが言へるでせう。最初にお話した「遣米使節」の人々にしても、その他、明治を支へた無数の先人たちにしても、彼らの胸に

たたへられた精神は決して私たちと無縁のものではない。過ぎ去った過去ではない。それはそのまま私たちの中に生きてゐる。その「自己への回帰」の中にはじめて「生命」は蘇るのです。

世界史の「回転軸」の上にある日本

最後に資料の末尾に記しておいた、P・L・クーシユールといふ人の『明治日本の詩と戦争』の一節を読んで、終りにいたします。

このクーシユールといふ人は日露戦争のころ来日したフランスの人ですが、医学者で哲学者、当時まだ二十五、六歳だったのですが、日本の文化に深い関心を寄せ、はじめて俳句を仏訳してヨーロッパに紹介した人でした。そのクーシユールは、岡倉天心が示した、東洋と西洋との文明との対立をふまへて次のやうに言ふのです。

「日本はアジアがヨーロッパと同じ高さで交差するただ一つの交点に位置してゐる。ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）、ホール・チエンバレン（明治初期に来日した言語学者）、岡倉覚三（天心）らのやうな新しい人々が現はれたのは、アジアのなかでもひとり日本だけ

である。彼らはアジアの全文化をヨーロッパの全文化と結びつけてゐる。人類についてのトータルな意識は、彼らのうちに芽生えてゐる。日本は回転軸の上にある」

クーシューがこれを書いたのは丁度、日露戦争のころ、天心が『東洋の理想』を書いた直後であったが、いま西洋と東洋が激突して世界の歴史が動かうとしてゐる。その二つの文化が交差する、その中心に「日本」がある。世界人類が今後どうあるべきか、その鍵を握つてゐるのは「日本」なのだ。クーシューは言ふのです。「日本は回転軸の上にある」——この日本に対する高い評価、私たちはそれに驕ることなく、むしろ、その日本に与へられた使命の大きさに心をいたして、謙虚に、日本人らしい生き方を貫いていかなければならない。それは日露戦争当時も、そして現代も変わらない世界に対する私たちの役割りではないか。あまりにも混迷を極める日本の現状ですが、ここに示された日本の役割は、そのまま今の日本に生きてゐる。私たちはいまこそ、天心が言ふやうに「日本の民族自身を世界に現はす義務がある」、「日本の民族の中に眠つてゐる最上のものを世界にむかつて提出しなければいけない」日本は今さういふ所に立つてゐるのです。

講義

日本の国柄

——ヒストリカル・バックグラウンドと

「憲法第一章」——

拓殖大学日本文化研究所客員教授

山内健生



「宇宙船地球号」は耳にするが……

「憲法第一章」を素通りする憲法学習

ヒストリカル・バックグランド

「国益より人類益を」!?

フランスに見る国民教育

「民主的で平和的な国家」といふ毒のある言葉

「歴史的國家」へと自国イメージの転換を!

国柄の核心―皇統の連綿性―

「宇宙船地球号」は耳にするが……

これから「日本の国柄」といふテーマで少々、お話しをいたします。「国柄」などといふと何処か仰々しく感じられて、今のわが国では流行らないテーマです。従って耳慣れない言葉かも知れません。確かに教育の場でもマス・メディアの報道に於いても、「宇宙船地球号」とか「地球市民」といった文字は比較的によく目にしますが、「国柄」の語にお目にかかることは全くといっていいほどありません。「地球市民○○プラザ」といった名称の社会教育施設を建てた自治体も一つや二つではありません。

某私立大学主催による公開講座の年度統一テーマは「われら地球人」といふものでした。

「国柄」はともかくとしても、「日本人、われら」を目にしたり耳にしたりする機会も絶無に近いといふのが、わが国の現状です。足元を見据えることを忘れて、何か上の空で「宇宙」や「地球」に焦点を当てたかが如き物言ひが多いやうに思はれてなりません。

従って、国家の存立の基本に拘はる事柄についての関心も残念ながら低いといはざるを得ないので。例へば、わが国の現状は独立国としてはまことに情けない状況下にあるのです。

が、それへの憤りの声が澎湃と国中に満ちては参りません。

独立国には「三つの自由」が不可欠であると説かれたのは筑波大学名誉教授の竹本忠雄先生でした。それは①自国の防人（兵士）をもつて自国を守る「国防の自由」②自ら教育したいやうに自らの子弟を育てる「教育の自由」③自らの固有の形で祀りたいやうに戦歿英霊を祀る「祭祀の自由」、の三つですが、この「三つの自由」がなくなつてゐるといふのです。

確かに竹本先生の御指摘の通りだと思ひます。平和憲法などと今日では首相まで言つてゐますが、それは本質的には「国防の自由」を剥奪したもののなのです。教科書検定に対する中韓の干渉。干渉自体が不届千万ですが、「近隣諸国との友好」との名目で実質的に検定を放棄してゐる（『近現代史』）のですから「教育の自由」はないものも同然です。そのため歴史教科書の記述は「中韓寄り」の奇妙なものとなつてゐます。首相の靖国神社参拝が中韓の干渉によつて假ならない現状は「祭祀の自由」の喪失といふ他ありません。

竹本先生は「我々は両手を縛られている」「英霊を弔うことにおいて、最も深い国辱を感じさせられずにはいられません」と歎いてをられます（『日本のレジスタンス』）。ところが朝日新聞などの有力メディアは歎くどころか、むしろ逆に憲法を賛美し、干渉の水先案内人を買つて出てゐることもあつて、国民の憤りの声も掻き消されがちです。国民の関心が低調なのは



メディアの影響に負ふところが大だと思ひます。

「憲法第一章」を素通りする憲法学習

国家のあり方には関心が低いやうでありながら、「平和的な国家」「民主的な国家」といった言ひ方は、憲法や教育基本法から導き出されてゐますから、あちこちで目にし耳にします。「平和と民主主義」は何人も異を唱へるはずのない現在のわが国の「看板」になつてゐます。

しかし、「平和的で民主的な国家」といった「戦後的観念」から一步離れて、身辺を見廻しますと、意外かも知れませんが戦後的価値観念の源泉である憲法に「日本の国柄」（国の歴史的個性）が明記されてゐることに気がつきませす。「第一章 天皇」です。

独立主権喪失の国家の非常時（被占領期）に誕生してゐる「日本国憲法」（昭和二十一年十一月三日公布）には手続的にも内容的にも大きな欠陥が孕まれてゐますから、一日も早く改めるに如くはないのですが、その憲法でさへも国柄を無視することはできなかつたのです。わが日本を占領下に置いた米国を中心とするGHQのスタッフが、僅か一週間の作業で起草した英文草案を翻訳したのが「日本国憲法」です。問題が内包されてゐないはずはないのですが、その憲法でも第一章の第一条から第八条までは「天皇条項」となつてゐます。その「第一章 天皇」といふスタイルは帝国憲法と同じです。

もともと帝国憲法の改正といふ建前で偽装された憲法（当時、占領軍は「憲法の改正」への干渉を秘匿するため、それをメディアが報道することを禁止した）でもありますから、帝国憲法の形を踏まざる得なかつたわけです。この建前と形式があることで辛うじて「日本国憲法」に、法的な、かつ歴史的な legitimacy（正統性）らしきものが加味されてゐるのです。

何に故の「第一章 天皇」かといへば、そこに「日本の国柄」が反映してゐるからだとか言ひようがありません。即ち八世紀初頭の律令の制定以来の、否それ以前に遡及する歴史の事実には、「過去」に、根柢を置かない限り「第一章」の規定は到底、理解しがたいのです。従つて、冒頭の「第一章」の規定ですから日本国憲法の要点は「天皇条項」にあることに

なります。大切な規定であるからこそ最初に記したと理解するのが常識的でせう。国家のあり方を定めた最高法規が第一章に掲げた内容こそ重要な規定のはずです。ところが、小学校・中学校、そして高校のそれぞれの段階で展開されて来た憲法学習は、「国民主権・平和主義・基本的人権の尊重」の三つが憲法の基本原則である旨を強調するものだったのです。皆さんの受けて来た授業を思ひ起してみてください。現在も同じ線上の教育がなされてゐます。

以前、帰省した折り小学校時代に背負ってゐたランドセルが出て来たので、開けて見たところ六年生当時（昭和三十二年）のノートが入ってゐました。そこには「憲法の三つの基本原則」がバッチリ書かれてゐました。全く記憶にはなかつたことでしたが、かうして小学校から繰り返し教へてゐるんだなあと、いささか驚かされるとともに、こんなことで良いのだらうかと深く考へさせられました。小・中・高とそれぞれのレベルで憲法学習が行はれてゐるといふのに、肝心なところを素通りして「国柄」に接近することが全くないわけです。

先に「日本の国柄」が耳慣れないテーマかも知れないと申しましたが、このやうに「国柄」を素通りして考へさせないヴェールが幾重にも張り巡らされてゐるやうに私には思はれてなりません。「平和的な国家」「民主的な国家」といふものも、「憲法の三つの基本原則」といふものも、今日では疑ふべからざるものとされてゐますが、「国柄」への理解を妨げるといふ

意味で見事な役廻りを果たしてゐます。

ヒストリカル・バックグラウンド

「日本の国柄」とは「わが国の歴史的個性」と言ひ換へてもいいでせう。「国の体質」といふことから「国体」といふ場合もあります。人間でいへば「その人らしさ」「人柄」といふことで、国にも「その国らしさ」「その歴史の歩みが培つて来た独自のもの」があるといふことで「国柄」「国体」といふ語があるわけです。

英語の *constitution* といふ言葉は、国柄を考へる際に、実に示唆に富んでゐます。その意味を辞書で確かめると、「構成・本質」とともに「体格・体質・素質」の意味があり、さらに「憲法・国憲・国柄・国体」等々の意味があります。体質や素質は父母↓祖父母↓曾祖父母……と遡る血筋から受け継がれた遺伝的な、当人にとっては先天的な個体の特質です。ここから容易に類推できることですが、個々の人間に先天的な「素質」「体質」があるやうに、共同体（国家）にも代々の先人達によって形成されてきた基本的な骨格があるといふことです。その歴史的に形づくられた共同体のルールが「憲法」であるといふことになります。従つて、

憲法は「その国らしさ」を定めたものであり国柄を反映したものとなることは理の必然です。英和辞典を見てみたら、次の様な例文に出喰はしました。“Japan and America differ in historical background” 訳は「日本とアメリカでは国柄が違ふ」とす。国柄を historical background としつゝみますが「名訳」だと思ひます。「その国らしさ」を文章化すれば a written constitution (成文憲法) となりますし、文章化するまでもなく共同体のルールを尊ぶといふ慣行が確立してゐる所では成文化しない場合もあります。その場合でも憲法は存在するわけです。よく英国には憲法がないと言はれますが、立派な「不文憲法」はあるのです。

その意味でも日本国憲法第一章の「天皇条項」は「日本の国柄」を近代的な立憲国家体制の体裁に成文化したものと断言できます（もちろん占領軍スタッフの起草による問題点があります）。いつの時代でも国の中心に天皇を仰いで来た「国の姿」が第一章に反映してゐます。律令制下で官職に就く者はもとより幕府（武家政権）の棟梁も、天皇（朝廷）によつて補任されてゐました。征夷大將軍は朝廷から任ぜられるものでしたが、その配下の武士達も出羽守とか甲斐守、あるいは刑部大輔、掃部頭等々と官職名を誇らしく公称したのです。そればかりか、わが国の歴史の中で近松門左衛門とか紀国屋文左衛門といふやうな名前を津々浦々で自稱する者がゐましたが、これら左衛門・右衛門・左兵衛・右兵衛などは令制下、皇居の警護

にあつた衛門府（左右衛門府）や兵衛府（左右兵衛府）から来てゐる名前です（平泉澄著「物語日本史（中）」を参照）。都への素朴な憧れが生み出したものですが、ここに国の中心に天皇を仰ぐといふ觀念が潜在してゐることは言ふまでもありません。

私は新潟県魚沼地方の出身です。生家は二代続けて婿養子を迎へました。祖父は「七兵衛」といふ家から來ましたし、父の生家の家名は「清右衛門」で現在の世帯主（従兄）は清右衛門が本名です。その他、幸右衛門とか作左衛門、松右衛門、太郎兵衛といった家名の家が近くにありました。雪深い越後の山村にまで、といふよりも全国各地の村々に至るまで、元を辿ると皇居護衛の衛士に由來する人名や家名が歴史的に遍在してゐるのですから、むろん都鄙によつて立場の違いによつて、その認識の自覚度に濃淡はあつたとは思ひますが、「国の中心に天皇を仰ぐ」といふ觀念は、武家政権時代にあつても聊かの揺ぎもありませんでした。否、武家時代になつて一層、広まつたのです。従つて、それは先験的なイデオロギーでも何でもなく、constitution（國の遺傳的特質）を言ひ当てた表現であるといふことになります。

さらには蛇足ながら付け加へますが、國の始まりと天皇の起源を説いた『古事記』『日本書紀』（八世紀初め成立）は当然でせうが、その後の『万葉集』『伊勢物語』『竹取物語』『源氏物語』『大鏡』『愚管抄』『平家物語』『神皇正統記』『太平記』『本朝通鑑』『古史通』『日本政

「記」等々、等々のわが国の歴史展開の中に成立した文字通り汗牛充棟の「幾百千万の著作群」の存在も、「国の中心に天皇を仰ぐ」ことを前提にしてゐることは言ふまでもありません。

「国益より人類益を」!?

現在のわが国の学校教育では、国の骨格を学ぶはずの憲法学習では、「人權」の尊ぶべきことは語られても「日本の国柄」即ち「わが国の歴史的個性」の意義について説かれることはまづありません。かつて、この合宿教室の壇上に立たれた占部賢志先生が、御自分の受けて来た学校教育を回顧され「間違つたことを教はつたとは思はないが何か大切な事柄が抜け落ちてゐたやうに思ふ」旨のお話をなさいました。その時、なるほど、その通りだなあとわが身に照して納得させられたものでした。

そして、縦へ嘘はなかつたとしても教へるべきことが抜けてゐては結果として「嘘」を教へたと同じことになるのではないか、とも思ひました。

今日のテーマに即していへば、「日本の国柄」については全くと言っていいほど教へられて来なかつたといふことです。先に述べたやうに「憲法の三つの基本原則」は小学校の段階

で黑板から写し取らせてゐたわけですが、「戦争を否定した平和国家」といったことは中学校に入っても高校に進んでからも、繰返して強調されました。しかし日本の国が、自分の生まれた国が、どのやうな国なのか、どのやうな特質を備へてゐるのかといったことを教はつたことはありません。

この点は現下の学校教育でも、憲法の三つの基本原則が強調されてゐるわけですから、私の頃と全く同様のやうです。日本の国の特質を教へないどころか、現在はむしろ国家の存在自体を軽くみる傾向があるやうに思はれます。かうした傾向は私共の頃よりも今の方が強くなつてゐるのではないでせうか。さういへば以前は「地球市民」などといふ言ひ方はありませんでした。従つて現状では「国柄」を採り上げるところの騒ぎではなくなつてゐるのです。次の「政治経済」の教科書の記述を読んでみて下さい。私の言つてゐることが大袈裟でないことがおわかりいただけるはずですよ。

国際社会の動向と課題

② 宇宙船地球号―かけがえのない地球―

……………(略)……………

冷戦構造が崩壊し、世界の国々は、新しい国際社会の秩序づくりに共同の責任を負わなければならない。このような時、私たちは、せまい国家的利益（国益）を追求するのではなく、地球的視野に立つ全人類の利益（人類益）を考えて行動しなければならぬ。

（高校『精選政治経済』第一学習社）

宇宙船地球号は、まさに現在の流行の言ひ方です。地球環境の保全のためにも国際の平和の招来のためにも大切な視点であることは確かですが、そのためには国家間の合意や協力が不可欠です。「国家」を抜きにしては画餅にすぎなくなります。

国益を否定した人類益とは何んでせう。国益と人類益は対立するものなのでせうか。国益よりも人類益を！といふ発想は、一体どこから出て来るのでせう。人類益とは珍しい言葉ですが、その実体はどういふものなのでせうか。次々に疑問が湧いて参ります。仮に人類益を認めるとしても、それは国益の累計とどう異なるのでせうか。

確かに国益同士が衝突することは多々ありますが、だからといって「国益を追求するのはなく」と説くのは、現実的には他の国益は認めても自国の国益追求は否認するといふ結果になりかねません。なぜなら、国益の追求を二の次にしてゐる国などどこにも存在しないか

らです。一体、国益を追求することはそんなに悪いことなのでせうか。右の教科書では国益追求を「せまい」として、如何にも「地球的視野」に立ってゐるかのやうですが、その前提には抜き難い国家への不信が横たはつてゐるのを見逃すわけには行きません。といふのは、国家がある限り国益があるはずで、国家の存在を当然とするならば国益の追求も当然のこととなるからです。だからといって、闇雲に自らの国益を貫けなどといふつもりはありません。国益の追求を否定するといふ思想は、国家の存立を軽視、もしくは否定したいと考へる所から派生して來てゐることは見え見えです。「せまい」とか「地球的視野に立つ」とかと修飾してゐますが、執筆者の底意は明らかです。これが文部科学大臣の検定済教科書なのです。から驚きではないでせうか。国民にとっての「国益」とは、広狭とは別次元の、質的には全的、なものはずです。少なくとも、国益か人類益かなどと二者択一すべき事柄ではありません。「国益」は「せまい」から「地球的視野に立つ全人類益」の方を追求すべきだなどと説く教科書を掲げてゐる国がわが日本以外に世界の何処にあるでせうか。要するに、自他が正面から向きあふことから国際関係は始るのです。蛇足ながら前に引用した教科書の記述は「国益を追求することは当然だが、時には全人類の利益『も』併せ考へなければならぬ」と改めることで「地球的視野に立つ」教科書となるはずで。

「宇宙船地球号」といふのも、いまの日本人の頭を痺れさせてゐる言葉です。そのため自らが扱つて立つてゐる足元を直視できなくなつてゐるやうに思はれます。教科書が説かんとする「国際社会の動向と課題」を考へる際に、「宇宙船地球号」なる語句は、日本人の発想の基盤を狂はせる効果を遺憾なく發揮してゐます。国益追求を否定する考へは国家の存立の否認につながるどころから発してゐるのですから、「国柄」の出番は当分あり得ないわけです。

フランスに見る国民教育

世界には百九十余もの国家があります。衣食足らざる国は別として、どこの国であつても自国の将来を担ふに足る「国民」を育てるべく国民教育に力を注いでゐます。国益よりも人類益を！地球市民たれ！などと説いてゐる国は、わが日本以外には皆無でせう。

情報技術革命の進む現代は、茶の間に居ながら、ワシントンのホワイトハウスのホームページを見ることができるようほかに、情報流通のポータルレス化は顕著です。ヒト・モノ・カネも容易に国境を越えてゐます。しかし、国境の垣根が低くなつた時代なればこそ、各国とも、これまでと同様に、否これまで以上に国民教育に力を入れてゐるのです。

例をあげませう。フランスです。情報技術革命どころか、西ヨーロッパではEU（欧州連合）の歩みが本格化してゐることは御承知の通りでせう。欧州議会もあれば共通の通貨もあります。数年前から域内のヒト・モノ・カネの流れは自由でした。しかし、どんなにヨーロッパの統合が進まうとも、フランスはフランスとして従前と同様に今後とも変りなく存続するといふことから、フランスではまことに積極的な国民教育を展開してゐます。国益の追求ではなく人類益を考へよ！などと教科書に執筆した人からは、正気の沙汰ではないと批判されること必定の徹底した国民教育です。（産経新聞、平成十二年四月九日付を参照）。

一九九六年、冷戦の終結や兵器のハイテク化などを理由に国防制度の見直しを実施したフランスでは徴兵制度を廃止しました。その際に、国民の国防意識を徹底させるために男女全員を対象とした「国防への準備動員日」制度を導入したのです。その要点は①十六歳になったら男女の別なく住所ある役所に登録する②十七歳の時に「国防への準備動員日」（いはば「一日体験入隊」）として指定された三日の候補日の中から一日を選んで参加する③参加者は参加証明書が発行され、選挙権（十八歳）が与へられる④参加証明書がないと大学入学資格試験が受けられないし、運転免許なども取得できない、といふものです。

十七歳での一日体験入隊ですから、日本でいへば高校二年生に相当します。その年齢の男

女全員が義務としてフランスの国防の仕組や政策を基地に赴いて学ぶといふのですから、現在のわが国ではとても夢想だにできない別世界のやり方です。これがフランスの現実です。

参加証明書がなければ現代社会では必須ともいふべき運転免許証が取れないといふ徹底ぶりです。日本だったら忽ち「人権侵害」の声が挙がるところでせう。フランス国民たるものはこれだけは弁へよ！といふことを若者に提示し、その関門を通過した者に国政参加の資格を認めるといふのは理にかなったやり方です。国民としての資格要件を満たしてゐるか否かの判断基準が「国防への準備動員日」への参加の有無に置かれてゐるわけです。かうした制度が実施でき得るフランスの政治風土の成熟ぶりには羨望の念を禁じ得ません（マレーシアでは二〇〇四年から十八歳以上の男女に六ヶ月の兵役を課すさうです。平成十四年十一月十四日付産経新聞）。

「二十歳、おめでたう。今日から新有権者ですね」などと市長が祝辞を述べる「成人式」とは偉い違ひです。十八歳から選挙権を認める国がありますが、そこでどのやうな義務が課せられてゐるか、どんな国民教育が施されてゐるかを考へてみるべきです。さうしたことを考慮せずに、欧米諸国の中には十八歳以上から選挙権を認めてゐるから、日本も同じやうにすべきだ（民主党は「成年を十八歳以上に」といふ法案を国会に提出してゐたし、自治体の中では住民投票の参加資格を十八歳以上としたところもある）といった動きが、国内の一部にあります。が、「単

なる十八歳以上」では困ります。

日本では徴兵制といへば、旧時代の遺物で唾棄すべきもの以外の何物でもなく、論議の対象にすらなりません。憲法十八条（奴隸的拘束・苦役からの自由）からみて「許容できない」といふのがわが政府の徴兵制に関する統一見解（昭和五十五年八月）です。しかし、世界の国々がどのやうな国防制度を維持してゐるのか、客観的に広く考へてみるべきです。どう見ても徴兵制度を持つ国が多いのです。若い世代に国民としての自覚を促す機会のひとつとして、国民教育の一環として徴兵制が位置づけられてゐるといふことなのです。即ち「私」とともに「公」を考へる機会に恵まれてゐるのです。「個人の幸福」の追求だけでなく、本来その前提的基盤である「公」についても考へさせてゐるといふことです。日本の若者が「幼稚化」してゐると指摘されてゐますが、「公」の何たるかが分らず「私」しか考へられないからではないでせうか。日本で無条件的に是とされてゐる「私」の権利は他の国はどうなのでせうか。それにしても徴兵制を否定する政府の理由が「奴隸的拘束・苦役からの自由」を定めた憲法第十八条だといふのですから、恐れ入った話です。以前、ある評論家が「日本の常識は世界の非常識、世界の常識は日本の非常識」云々と指摘したことがありましたが、徴兵制をめぐる彼我の認識の相違などはその適例でせう。それは当然のことながら国家意識の濃淡強弱

にまでつながって来ます。

「民主的で平和的な国家」といふ毒のある言葉

どうして日本では「国家」について忌避するといふか消極的なのでせうか。現状では国柄「わが国の歴史的個性」を教へるところの騒ぎではありません。ただし、現在でも国家について全く教へないといふわけではありません。教育基本法にも、教育の目的は「国民の育成」にあると明記されてゐます（第一条）。しかし、その「国民」の前提になる国家は「民主的で文化的な国家」「平和国家」なのです。学習指導要領にも「民主的、平和的な国家・社会の有為の形成者」としての資質を養ふ（公民科の目標）、「民主的、平和的な国家・社会の一員」として自覚と資質を養ふ（地理歴史科の目標）とあるやうに、「国家の形成者」として必要な自覚と資質を養ふことが定められてはゐます。しかし、これでは真の国民教育は不可能です。

冒頭にも述べましたが「民主的な国家」「平和的な国家」といふのは、憲法を承けて制定された教育基本法に準拠したもので、今日のわが国の「看板」であり「建前」です。これに異を唱へる者はかなりの臍曲りといふことになりませうが、この看板を掲げてゐる限り政界

の混迷や教育界の混乱を齎らす「思想の濫^{みだ}れ」は増幅することはあっても収束することはないでせう。このまま放置してゐては、時の経過とともに深刻な事態になつて行くやうに思はれてなりません。

「民主的な国家」「平和的な国家」とは、一見したところ良ささうですが、その裏に秘められた寓意が問題なのです。寓意とは「他に仮託してそれとなくほめかすこと」です。被占領下の昭和二十二年三月に公布された教育基本法は「新しい教育の基本を確立するため」（前文）のものですが、数々の恐るべき「毒のある言葉」が羅列されてゐます。

第一条（教育の目的）

教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

教育基本法全体に対しては、美辞麗句は列ねてあるが「伝統文化尊重」の文言がないとの指摘が予てからありました。私もさうは思ひますが、その美辞麗句こそが実は曲物なのです。

即ち、これまでの教育は「真理と正義に反するものであった」と言っているに等しいからです。従って、ここに新たな、これまでと違った「教育の目的」を定めるといふのが、教育基本法制定に匿^{かく}された寓意です。

「民主的で文化的な国家」（前文）とか、「平和的な国家及び社会」（第一条）とかといった言葉は、それ以前の国の歩みを「非民主的で非文化的であり、非平和的であった」と否定せんがためのものなのです（かうした教育基本法の断定が見当はづれであることは言ふまでもありません。近現代史を精確に辿ればわが国の歩みが他国と比べとくに非民主的、非平和的であったとはいへませんし、聖徳太子の憲法十七条へ七世紀初に見られるやうな「和」を尊び「独断専行」を嫌ふ精神はいつの時代でも、武家政治においても、大切にされて来ました。中村元先生は英文論集『日本思想史』の中で十七条憲法は「日本の民主主義思想の萌芽」である旨を述べてをられます）。教育基本法の「美辞」の羅列は、それ以前の教育（日本の歩み）を価値なしと貶しめるためのものであるといふのが私の判断です。

ですから「民主的な国家」「平和的な国家」を掲げてゐる限り、教育基本法以前を否定することになりますから、それ以前との歴史の連続性が見えなくなります。現在を「民主的で平和的な国家」として肯定することは、いつの間にか、それ以前を否定する結果になつてゐ

るのです。近々の五十年余を肯定して、それ以前の長い歴史を否定してゐることになるのです。教育基本法を活かせと主張する人達（日教組）ほど、「過去の誤った教育理念と方針を一掃」したものととして教育基本法を高く評価することになる（「教育基本法を生かし活かすために」国民教育文化総合研究所発行）のは当然です。さうした人達が国の歴史の連続性を表象する日の丸君が代に冷淡になるのも理の必然です。

もし「教育の目的」が「平和的な国家及び社会の形成者」の育成ではなく「歴史的な国家及び社会の形成者」の育成となるならば、どうでせう。立所にわが国の教育の目的が判然とするではありませんか。憲法学習の眼目も「第一章」にスライドするに違ひありません。そこで初めて憲法第一章の重みが感じられて来ると思ふのです。

「歴史的な国家」へと自国のイメージの転換を！

国家を支へるのは現実的には何といつても国民です。国民相互に広範なる国家意識（帰属する国家への信頼感）が内在しないやうでは、その国の将来は危ふいと思ひます。

先に述べた教科書に伏在してゐる国家軽視の観念がどこから来てゐるかといへば、やはり

昭和二十年九月二日の「降伏文書」調印から始まる占領軍のプロパガンダに負ふ所が大であると思ひます。ここでは詳述できませんが、当時のマス・メディアは占領軍の検閲下にありま

内容的には「停戦協定」

したから、占領軍の意向に添った報道しか許されませんでした。一方的な宣伝報道が国内を覆つてゐたのです。国会や内閣だけでなく裁判所をも占領軍は影響下に置いてみました。

「日本が再ビ米国ノ脅威ト（略）ナラザルコトヲ確實ニスルコト」（米国の初期対日政策）といふのが占領軍の方針でしたから、そのためには日本人が「国家意識」を持ち得ないやうにすることが何より肝要だったのです。

例へば国民の祝日に関する法律（昭和二十三年七月公布）制定の際、国民の八割以上が希望したにも拘らず、占領軍は二月十一日の紀元節（初代神武天皇御即位に因む日）を祝日にするこゝとを断乎として拒否しました。他の以前の祝祭日はほぼ名称を変へて「国民の祝日」の中に入つたのですが、紀元節だけは許しませんでした（昭和四十一年に建国記念の日として復活）。

憲法も教育基本法も、全てこの線上にあるものです。米国にしてみれば、さんざん手こずらせた敵国ですから「再ビ脅威トナラザルコトヲ確實ニ」しようとするのは当然でせう。日本国民が、自国を古くからの連続性を内在させた国家だといふ認識を持ち続けることが脅威だったのです。「民主的な国家」「平和的な国家」を強調することで、それ以前の連続性が

断たれるならば、過去とつながる根っ子が切れるならば、米国の対日脅威は解消です。歴史とのつながりのない日本人などは恐れるに足りないといふことです。教育基本法は、現在までのところ、見事にその役割を果たしてゐます。

さらに自民党から共産党まで、今では首相までもが「平和憲法」などと呼んでゐる日本国憲法ですが、ポツダム宣言第九項の武装解除といふ非常時の一時的措置を恒常化制度化するために、前述のやうに占領軍スタッフだけで一週間で起草したもののなのです。いくら何でも日本側が「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」(第九条第二項)などと書くはずがありません。

平和憲法のどこが悪いのかと驚かれる人もゐるかも知れません。それは「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」(前文)といふ徹底した自国不信で貫ぬかれてゐますから具合が悪いのです。武装解除のままを善しとする自国不信宣言を平和憲法などと崇めてゐるのは大問題です。

ともかく講和条約発効前日の昭和二十七年四月二十七日までの権力行使の主体は占領軍でした。その下では受動的に政府は動くしかなかったのです。憲法だけでなく教育基本法も、そしてこの間に成立した実質的に効力を持つその他の諸々の法律も、一度は必ず見直すべき

なのです。「民主的な国家」「平和的な国家」から、ごく常識的な「歴史的な国家」へと自国イメージを転換するためにも、まづは教育基本法の抜本的改正が必須だと思ひます。

国柄の核心―皇統の連綿性―

五月三十日付（平成十四年）の朝日新聞（三十七面）に、七十字にも満たないごく短かい記事が載つてゐました。それは前日、天皇陛下が皇后陛下とともに橿原神宮を御親拝になられた旨のものでした（「わが紙も報道しました」といふ後日の逆アリバイ工作のやうな超短文でした）。

橿原神宮は初代の神武天皇を御祭神とするお社やしらで奈良県橿原市かしはらにあります。が、両陛下は神宮参拝に先立って同市内にある神武天皇山陵にも参拝されたとのことです。今上陛下は百二十五代に当られます。その陛下が初代天皇の山陵とその御霊みたまをお祀りするお社に参られたといふ記事は、日本人にとってはさういふことがあったのかと、ごく当然のこととして当り前のやうに受け止められますが、広く世界的立場から鳥瞰したとしますと、まことに稀有な出来事なのです。それはまさにわが国の歴史的個性「国柄」の然らしむる所なのです。

昭和天皇が百二十四代でしたから今上陛下が百二十五代で何ら不思議はありません。しか

表
(一)

夏	十七世	四百三十九年
殷	三十世	六百余年
周	三十七世	八百七十七年
秦	三世	十六年
前漢	十三世	二百七年
後漢	十三世	百九十六年
隋	三世	二十八年
唐	二十世	二百九十年
北宋	九世	百六十八年
南宋	九世	百五十二年
元	十世	百六十二年
明	十六世	二百七十七年
清	十二世	二百九十六年

し、上の表(一)を見て下さい。「中華四千年の歴史」と俗に言ひますが、日本と比べますとまさに「四千年」の断絶の歴史です。この表から逆に、わが国歴史の特質が見えては来ませんか。「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙なきや」云々は『隋書』倭国伝に載つてゐるもので遣隋使小野妹子そののいもこが煬帝（隋の第二世）に届けた国書です。それは第三十三代推古天皇の十五年（六〇七）のことで聖徳太子の時代のことでした。対等外交を求めこの国書に對して煬帝が怒ったことはあまりにも有名な話です。それから千四百年後の今日、当時向きあつた日隋双方の「天子」の系譜はどうなつたでせうか。わが国では推古天皇の系譜に連なる今上天皇が第百二十五代として臨御りんぎよされてをります

が、大陸の方は如何だったでせう。小野妹子入隋から十一年後（六一八）に隋は李淵（唐の高祖）に滅されました。まさに「易姓革命」による断絶の歩みです。

ところが日本では百二十五代の今上天皇が初代の神武天皇の山陵に参拝されてゐるのです。かつて坂本太郎先生（東京大学・国学院大学名誉教授、昭和六十二年歿）は『日本歴史の特性』（講談社学術文庫）の中で「連綿性」 continuity を日本歴史の特質の第一に挙げられました。

この連綿性は、何といひましても日本歴史のいちじるしい特性であると思います。これはことばをかえていえば、古代的なものが今に伝わってよく残っておる、伝統が長く続いておるといふことであります。

日本古代史の泰斗、坂本先生は連綿性について多く具体例を指摘されてゐますが、「皇統の連綿性」についても史実を回顧しつつ述べてをられます。前に、私流に「いつの時代も国の中心に天皇を仰いで来た」と申しましたが、まさに「皇統の連綿性」といふことなのです。そして、今日、われわれは憲法第一章に現に「皇統の連綿性」を見ることができなのです。

憲法についても皇室典範（皇位継承・皇族・即位の礼・大喪の礼などの規定）についても、現行

のものは主権喪失期に誕生したものですから、様々の検討すべき課題があります。その際は「国柄」に根ざした論議であつてほしいと切に思ひます。最後に次の表(一)を御覧下さい。

表(一) 「伊勢の神宮における式年遷宮」一覽表一

奈良時代

内宮		外宮	
回数	年数	回数	年数
第一回	持統天皇四年(六九〇)	第一回	持統天皇六年(六九二)
第二回	和銅二年(七〇九)	第二回	和銅四年(七一一)
第三回	天平元年(七一九)	第三回	天平四年(七三二)
第四回	天平十九年(七四七)	第四回	天平勝宝元年(七四九)
第五回	天平神護二年(七六六)	第五回	神護景雲二年(七六八)
第六回	延暦四年(七八五)	第六回	延暦六年(七八七)

平安時代

内宮		外宮	
回数	年数	回数	年数
第七回	弘仁元年(八一〇)	第七回	弘仁三年(八一二)
第八回	天長六年(八二九)	第八回	天長八年(八三一)
第九回	嘉祥二年(八四九)	第九回	仁寿元年(八五二)
第一〇回	貞觀十年(八六八)	第一〇回	貞觀十二年(八七〇)
第一一回	仁和二年(八八六)	第一一回	寛平元年(八八九)
第一二回	延喜五年(九〇五)	第一二回	延喜七年(九〇七)
第一三回	延長二年(九二四)	第一三回	延長四年(九二六)

鎌倉時代

内宮		外宮	
回数	年数	回数	年数
第一四回	天慶六年(九四三)	第一四回	天慶八年(九四五)
第一五回	応和二年(九六二)	第一五回	康保元年(九六四)
第一六回	天元四年(九八一)	第一六回	永觀元年(九八三)
第一七回	長保二年(一〇〇〇)	第一七回	長保四年(一〇〇二)
第一八回	寛仁三年(一〇一九)	第一八回	治安元年(一〇二二)
第一九回	長曆二年(一〇三八)	第一九回	長曆四年(一〇四〇)
第二〇回	天喜五年(一〇五七)	第二〇回	康平二年(一〇五九)
第二一回	承保三年(一〇七六)	第二一回	承暦二年(一〇七八)
第二二回	嘉保二年(一〇九五)	第二二回	承德元年(一〇九七)
第二三回	永久二年(一一一四)	第二三回	永久四年(一一一六)
第二四回	長承二年(一一三三)	第二四回	保延元年(一一三五)
第二五回	仁平二年(一一五二)	第二五回	久寿元年(一一五四)
第二六回	承安元年(一一七一)	第二六回	承安三年(一一七三)
第二七回	建久元年(一一九〇)	第二七回	建久三年(一一九二)
第二八回	承元三年(一二〇九)	第二八回	建暦元年(一二一一)

室町時代 (含戦国期)		内 宮		外 宮	
回数	年数	回数	年数	回数	年数
第二九回	安貞二年 (一一二八)	二〇	寛喜二年 (一一三〇)	二〇	二〇
第三〇回	宝治元年 (一一四七)	二〇	建長元年 (一一四九)	二〇	二〇
第三一回	文永三年 (一一六六)	二〇	文永五年 (一一六八)	二〇	二〇
第三二回	弘安八年 (一一八五)	二〇	弘安十年 (一一八七)	二〇	二〇
第三三回	嘉元二年 (一一〇四)	二〇	徳治元年 (一一三〇)	二〇	二〇
第三四回	元亨三年 (一一三三)	二〇	正中二年 (一一三五)	二〇	二〇
第三五回	興国四年 (一一四三)	二一	貞和元年 (一一四五)	二一	二一
第三六回	正治三年 (一一六四)	二二	天授六年 (一一八〇)	三六	三六
第三七回	元中八年 (一一三九)	二八	應永七年 (一一四〇)	二一	二一
第三八回	応永十八年 (一一四一)	二一	応永十六年 (一一四九)	二〇	二〇
第三九回	永享三年 (一一四三)	二一	永享六年 (一一四四)	一六	一六
第四〇回	寛正三年 (一一六二)	三二			

(戦乱による中断)

(戦乱による中断)

江戸時代

内 宮		外 宮		
回数	年数	回数	年数	
第四一回	天正十三年 (一五八五)	二四	天正十三年 (一五八五)	二三
第四二回	慶長十四年 (一六〇九)	二五	慶長十四年 (一六〇九)	二五

明治以降		内 宮		外 宮	
回数	年数	回数	年数	回数	年数
第四三回	寛永六年 (一六二九)	二一	寛永六年 (一六二九)	二一	二一
第四四回	慶安二年 (一六四九)	二一	慶安二年 (一六四九)	二一	二一
第四五回	寛文九年 (一六六九)	二一	寛文九年 (一六六九)	二一	二一
第四六回	元禄二年 (一六八九)	二一	元禄二年 (一六八九)	二一	二一
第四七回	宝永六年 (一七〇九)	二一	宝永六年 (一七〇九)	二一	二一
第四八回	享保十四年 (一七二九)	二一	享保十四年 (一七二九)	二一	二一
第四九回	寛延二年 (一七四九)	二一	寛延二年 (一七四九)	二一	二一
第五〇回	明和六年 (一七六九)	二一	明和六年 (一七六九)	二一	二一
第五一回	寛政元年 (一七八九)	二一	寛政元年 (一七八九)	二一	二一
第五二回	文化六年 (一八〇九)	二一	文化六年 (一八〇九)	二一	二一
第五三回	文政十二年 (一八二九)	二一	文政十二年 (一八二九)	二一	二一
第五四回	嘉永二年 (一八四九)	二一	嘉永二年 (一八四九)	二一	二一
第五五回	明治二年 (一八六九)	二一	明治二年 (一八六九)	二一	二一
第五六回	明治十二年 (一八八九)	二一	明治十二年 (一八八九)	二一	二一
第五七回	明治四十二年 (一九〇九)	二一	明治四十二年 (一九〇九)	二一	二一
第五八回	昭和四年 (一九二九)	二一	昭和四年 (一九二九)	二一	二一
第五九回	昭和二十八年 (一九五三)	二五	昭和二十八年 (一九五三)	二五	二五
第六〇回	昭和四十八年 (一九七三)	二一	昭和四十八年 (一九七三)	二一	二一
第六一回	平成五年 (一九九三)	二一	平成五年 (一九九三)	二一	二一

(拙著『深い泉の国』の文化学) 展転社から

皇祖神・天照大神（内宮）とその御饌都神（食事を掌る）・豊受大神（外宮）を奉祀して

ゐる「伊勢の神宮」の式年遷宮についての一覧です。式年遷宮とは「一定の年月ごとに神殿を造営し、神霊をお移しすること」です。伊勢の場合は「二十年」ごとに全てを一新して、お移しして参りました。第一回の持統天皇四年（六九〇）から平成五年（一九九三）の第六十回まで、途中で若干の乱れはありましたが、式年で遷宮が行はれて参りました。新しい神殿の造営といふ形の継承は「心の継承」があつて初めて実現することです。千三百年余にわたり遷宮が続けられてゐるといふことは、同じ心が承け継がれて来たことに他なりません。

皇祖の天照大神を奉斎する伊勢の神宮ですが、この御遷宮の一覧表を目にするたびに、「国の歴史の連続性」が感じられて心が震へます。これまで幾度も「いつの時代も国の中心に天皇を仰いで来た」といひましたが、この一覧表こそ、「国柄」を雄弁に物語るものです。数多の国民の累代変らざる奉賛の心がなければ到底考へられないことです。同時に、御歴代の陛下はひたすら「世の平らぎ」を御祖先の神々に祈つて来られました。自らを「おろかなる身」と内省されつつ祈つて来られました。皇統の連綿性は「祈りの連続性」でもあるのです。

「君臣一体」「君臣一如」といった言葉がありますが、わが国ではそれが観念ではなく、現実の姿であつたと、この表を見ながら熟と思ひます。

講
話

「昭和の精神」とは何か
——世界に開かれた慰霊の心——

元 高千穂商科大学教授

名 越 一 荒之助



合宿教室は交響楽

昭和の精神―日本精神史の総動員

「残るは地熱・祖国のいのち」

祖国の永久生命と松吉正資さん

世界に開かれた戦死者への慰霊―米国軍人の靖国参拝とシドニー海軍葬―

感動の渦―日本の母の訪濠

戦艦大和の号砲は何を訴へる

合宿教室は交響楽

「昭和の精神」とは何か

国民文化研究会を創始された小田村寅二郎先生は、平成十一年六月四日に亡くなられましたが、亡くなられる前年まで理事長であられ、合宿教室を四十五回にわたって指導されました。その間「合宿は参加した全員で交響楽を演奏するやうなもの」と語られた言葉が忘れられません。今度の合宿も、交響楽のやうな展開をしてみます。第一日目に布瀬講師の「自分の目で世界を見よう、自分の心で歴史を感じよう」と題する導入講義がありました。広い視野で事実を多面的に理解し、感じとる心構へを訴へられました。第二日目には、東中野講師が、明治維新の精神的支柱であった吉田松陰の「士規七則」を講話され、第三日目の本日の午前中は小柳講師が「明治の精神」と題し、村垣淡路守の『遣米使日記』や岡倉天心を素材に、大らかに明治の大きさと凄さを語られました。午後は山根講師による教育参考館の紹介のお話があつて参考館見学が行はれました。そして夕食後のこれから合宿の中核的行事ともいふべき慰霊祭が厳修されます。私はその直前に、一時間の講話を割り当てられています。私は何を話すべきか。参加するまでレジメは各種用意し、演題も「世界に生きる日本の心」

とはしてきました。しかし江田島合宿交響楽の演奏者の一員として何を演奏すべきか、考へ続けました。

その時ある班員から私に、「いよいよ昭和の精神を語る順番が来ましたね。昭和の精神とは何ですか。ややこしいし、是非聞きたいですね」と、せがまれました。私もそれしかない。それを語らなければ、合宿が前に進めない、と思ひました。

昭和の精神——日本精神史の総動員

それでは「昭和の精神」とは何なのか。昭和は合宿で語られた松陰精神から明治に至る精神を継承してゐるばかりではありません。昭和に至つて日本の歴史がより広く深刻に甦りました。支那事変中の昭和十二年に発表され、准国歌のやうに歌はれた「愛国行進曲」は、内閣情報局が公募したものです。その歌詞には「あ、悠遠の神代より」とか、「往け八紘を宇と為し」の歌詞があります。これは神武創業の精神を謳つたのもので、「八紘為宇」は「橿原に都を建つるの詔」（日本書紀）の中にあります。「大義ヲ八紘ニ宣揚シ坤輿ヲ一字タラシム」とか、「万邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ」といふ言葉は三国同盟締結の詔書に謳はれました。



この精神は我が国の世界政策として、外交文書で「Universal Brotherhood」と翻訳され、大東亜会議でも顕現されました。古事記にある「撃ちてしまむ」といふ力強い神武東征の軍歌も甦りました。

その他万葉の防人さきもりの歌から、元寇（神風特攻隊）、楠木正成・正行父子（七生報国、非理法権天、忠孝一本）、維新の志士の和歌・遣文、日清・日露戦争の軍歌等々、日本歴史の総動員ともいふべきスケールで復活しました。

「残るは地熱・祖国のいのち」

このやうに語れば、それでは敗戦後の「昭和」をどう評価するか、といふ質問が出ませう。敗戦によって日本は外国軍に占領され、それに便乗したり、

「錯覚の」解放感にかられたり、国民意識はカメレオンのやうに変わりました。教科書でも、戦前は軍国主義の暗い時代、戦後は自由と民主主義の平和の時代のやうな取りあげ方が一般になりました。

それに対していつも想ひ起こすのは、私が学生時代から傾倒してゐた三井甲之といふ詩人の『祖国礼拝』と題する詩集です。この詩集の中に大正七年（一九一八）に発表された「もの皆枯れて残るは地熱・祖国のいのち」といふ一節があります。その前年にロシアに共産革命が起り、日本でもそれに傾倒する者が多く、その年に米騒動が全国規模で広がりました。寺内内閣は軍隊を出動させて鎮圧する状態でした。そのやうなさ中に詩人は、祖国のいのちは枯れてしまったかに見えるが、地熱のやうに残つてゐると詠んだのです。

その詩が作られた頃に較べて、現代はもっと深刻です。我が国は大敗戦を迎へ、老獺な占領政策によつて自分自身を見喪ひ、その後遺症は今も尾を引いてゐます。しかしそれは表面的な現象であつて、祖国のいのちは地熱のやうに残つてゐます。この合宿教室も、今なほ残る祖国の地熱を実感する試みでもあるのです。そのことをもっと深めるために、私の学生時代の友人で、尊くも特攻戦死した松吉正資まつよしまさしさんのことに触れたいと思ひます。

祖国の永久生命と松吉正資^{まさし}さん



海軍少尉 松吉正資
(昭和19年12月任官当時)

松吉さんは私と同じ大正十二年（一九三三）、しかも十二月一日生まれです。小学校時代から秀才の誉が高く、旧制の中学校三年の時から、五年生の実力がありました。中学校四年生で旧制の山口高等学校に合格しました。そのため年令は同じでも、松吉さんは私よりは一年先輩でした。私は山口高商の学生でしたが、彼とは二年間、山口市の同じ下宿で過しました。

私などは試験前になると、一夜漬の勉強に追はれてゐるのに、彼は試験中でも水泳部の練習に励んでゐたし、いつも悠々としてゐました。「勉強しなくてもよいのか」と聞くと、「授業に出てゐたらできるよ」と

答へます。

ここに彼が高校三年生の時（昭和十七年五月頃）、即ち十八歳と六ヶ月の時に書いた論文があります。「不顧」と題するもので、四百字詰原稿用紙二十六枚（現在靖国神社・遊就館所蔵）。「不顧」といふ題は万葉集にある大伴家持の長歌の一節「海行かば 水漬く屍 山行かば草むす屍 大皇の辺にこそ死なぬ 顧みは為じ」からとったものです。「顧みはせじ」と題さずに、「顧みず」とした所に彼の意図が伺へます。「顧みはせじ」とことさら決意するのでなく、「顧みない」のは当りまへといふ気持が込められてゐるやうに思はれるのです。

彼がこの論文で最も重点を置いたのは、楠木正成・正行父子の劇詩的生涯です。正成が死に臨んで誓つた「七生報国」が、その子正行に受け継がれ、五百年余り後の高山彦九郎から乃木將軍に血脈のやうに繋つた。その点を明らかにしながら楠公の不滅性、民族生命の永遠性を訴へて次のやうに結んでゐます。

「祖先の血統への憶念と感覚から、美しい日本の形而上学はつくられる。それは今日の使命の自覚でもあり、決意でもある。次代への再起と飛躍の準備のために、今こそ神話が古典が、その生きてゐるままのかたちで現実に我々の手に回復されて来なければならぬであらう。その時美しい歴史の力は、我々の中に血脈として生き、民族の永生に対する確固の

信がそこから新しく芽生え、全体への愛が、献身が新しい精神の道徳のかたちを創造する」松吉さんは十八歳少々の年令で、日本の歴史のエキスを吸収して、ここまでの心境に到達しました。その年に彼は東京帝国大学法学部政治学科の難関を受験して合格します。東大在学中学徒出陣となりその直前、すなはち昭和十八年十一月二十七日に書かれた論文の最後は、次のやうに結ばれてゐます。

「個体の努力は微少であらう。個人は永久に不完全である。不安愚痴ぐちはつひに絶えぬであらう。而して永久の努力、永久の愚痴しかうが生きるしるしである。『人生は摺取不捨である』『実人生の一切が意義を有する』といふ時、我等のはかなき努力も祖国の永久生命につながらしめらるゝのである。これが神州不滅の確信である」

出征前松吉さんは、日本の永久生命を「摺取不捨」、即ちすべてのもを受容れて、そこに調和をもたらず日本の国柄、そして実人生のすべてに意義を認める、包容性に見出してゐるのです。悟りといふか、達観といふか、満二十歳にしてこの境地に到達してゐたのです。そして出征する前に沢山の和歌を遺してゐます。

ゆく身にはひとほしむるふるさとの人
のなさけのあた、かきかな

数ならぬ身にはあれども吾を送る人のおもひにこたへざらめや
うつそみはよし砕くともはらからのなさけ忘れじ常世ゆくまで

彼の和歌には、「ますらを」とか「もののふ」とか、勇しい用語はありません。出陣前にも友を思ひ、故郷の人々の厚い情に感謝する和歌ばかりです。

彼はこれらの詩文を遺して、昭和十八年十二月、大竹海兵団に入隊し、航空隊を志願しま



山口県大島郡安下庄町安養寺に建つ松吉さんの歌碑

した。顧みることなく水上機による特別攻撃隊・魁隊さきがけの一員となりました。同僚から、「松吉のやうな優秀な人材が、特攻隊で死ぬのは勿体ないよ」と言はれた時、彼は秘めた決意を語りました。深い信念に裏づけられた松吉さんの発言に誰も言葉はなかつたと聞きます。

彼は昭和二十年五月十一日、沖縄

に出撃して戦死しました。満二十一歳と六ヶ月の短かい生涯でした。

彼は入隊後も、大学ノートに多くの文章や詩歌を書いてみました。特攻出撃前に小包にして故郷宛送ったのですが、郵便事情のためか届かず、ここにお話したものしか紹介できないことが、何としても残念です。

私は今年数へ年八十歳。松吉さんの四倍近く生きながらへながら、こたへること乏しく申訳なさの方が先に立ちます。ある戦争未亡人が歌ってゐます。

かくばかりみにくき国になりたれば捧げし人のたゞに惜しまる

未亡人の言ふ「みにくき国」とは何でせうか。そもそも我が国は大東亜戦争を戦ったのであって、「太平洋戦争」に参加したり、侵略のため戦った者は一人もゐませんでした。それなのに政治家もマスコミも教科書もみんなウソを言っているのです。自国を犯罪国家のやうに信じ、中韓両国に対しては謝罪しかできない状態が今も続いてゐます。

日本人が頭を垂れるべき対象は中国や韓国に対してではなく、靖国の神々に対してではありませんか。

世界に開かれた戦死者への慰霊

—米軍人の靖国参拝とシドニー海軍葬—

先に紹介した三井甲之先生は、昭和二年に、

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を

と詠んでをられます。この歌の「かなしき」は、単なる「悲しき」ではなく、「愛^{かな}しき」とか、「いとしき」といふ複雑な思ひがこめられてゐます。これから行はれる慰霊祭は「かなしき命」を偲び、精神を受け継ぐ祭典であります。

そして祖国のために命を捧げることは、いかなる国にとつても、最高の価値であることを知って戴きたいのです。この歌に共鳴するアメリカ人が、「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるアメリカ国土を」と詠んでも通ずるのです。

私は平成八年六月に、ペリリュー戦を戦ったコードリン・ワグナー氏（海兵隊軍曹）と、エ

ド・アンダウッド氏（元大佐）を案内して靖国神社に参拝したことがあります。彼らは昇殿参拝して玉串奉奠もしました。その時彼らがこもごも述べたことは、次の点でした。

「①戦死者は各国の伝統に基づいて祀るべきだ。靖国神社は日本的な祭祀方式だからすばらしい。②国家の命ずる所に従ってロイヤリティ（忠誠）を尽すのが、軍人の本分だ。小さなペリリュー島を守備する日本軍一万人は、補給も援軍もない中、七十三日間も戦って遂に玉碎した。アメリカの誇るアラモ砦の玉碎戦の、戦死者は二百人。ペリリュー戦はその五十倍だった」と。

現代日本人の意識とは逆のことを述べたアメリカ軍人の発言が忘れられません。もう一例を挙げませう。

それは大東亜戦争が勃発して六ヶ月後の、昭和十七年五月三十一日のことです。日本軍人六人が三隻の特殊潜航艇に乗って、シドニー軍港を奇襲しました。シドニー海軍は大騒ぎ、たちまち応戦して撃沈しました。ところがオーストラリア海軍は遺体を引き揚げ、六月九日に海軍葬の礼をもって弔ったのです。もちろん国民の間には反対がありました。しかし地区司令官グールド少将は、「これら日本の海軍軍人によって示された勇氣は、誰もが認めるべきであり、讃へるべきである。このやうに鉄の棺桶に乗って死地に赴くには、最高の勇氣が



昭和17年6月9日、シドニー近郊のクリマトリア斎場で行はれた海軍葬。前方で挙手の礼をしているのが、シドニー地区海軍司令官モアヘッド・グールド少将

ゐる。これら勇士の犠牲的精神の千分の一でも持つて祖国に捧げるオーストラリア人が、果して何人ゐるであらうか」と、弔辞で述べてゐます。

この海軍葬の模様を、オーストラリアはラジオで全国放送しました。その時の録音テープをここに持つて来てゐるので、これからお聞かせします（スクリーンに海軍葬の模様を写し、厳粛な海軍葬を、礼砲と鎮魂ラツパの音とともに紹介）。

昭和六十一年（一九八六）には、トニー・ウイラー監督によって「深海からの勇者たち」と題する映画が作られました。これは松尾敬宇大尉が主人公で、何が彼らの愛国心をかきたてたかが主題となっております。だから映画

「昭和の精神」とは何か



戦死した松尾大尉の腹に巻れてゐた血染の千人針（熊本県菊池市菊池神社所蔵）



キャンベラの戦争記念館館長から手渡しで母に返還された松尾大尉の千人針



「英雄の母」の慰霊巡礼と和歌を翻訳して紹介する豪州の地元新聞

感動の渦——日本の母の訪濠

は、松尾大尉が靖国神社に参拝し、東郷元帥の墓に詣で、江田島の海軍兵学校で猛訓練してゐる姿から入つてゐます。そして海軍葬を映画のクライマックスにして騎士道精神を謳^{うた}ひあげてゐます。

私はこの映画のフィルムを入手したので、「テレビ東京」で放映するやうに働きかけたことがありますが、実現しませんでした。

オーストラリアの首都キャンベラに、戦争記念館 War Memorial があります。記念館といっても、十六万の戦死者を祀る宗教的殿堂でもあるのです。毎年四月二十五日には、国家行事によって壮厳なミサが行はれます。館内には特殊潜航艇が展示してあり、それには「この勇気を見よ」と書かれてをり、愛国心の教材にしてゐます。さらに展示コーナーには中馬大尉の日本刀や、松尾大尉の腹に巻れてゐた「血染めの千人針」も展示されました。

昭和四十三年、熊本大学名誉教授の松本唯一先生は、松尾大尉の母堂まつ枝さん（八十三歳）に、遺品と対面させてあげよう、そして戦時中にも拘らず海軍葬の礼をもつて弔つてくれたオーストラリアにお礼を申しあげようと思ひつき資金を募りました。訪濠の旅は実現しました。

するとオーストラリアは国を挙げての大歓迎でした。新聞は「勇者の母来る」といふ見出しをつけて、お母さんの顔写真を一面トップに大きく飾りました。一ヶ月前に訪濠した当時の佐藤栄作首相の数倍もの歓迎となりました。

お母さんが現地でのやうな和歌を作り、対応されたかは、『日本への回帰』第十一集に、「和歌創作のてびき」と題して前田秀一郎氏（現、山梨医科大学教授）が書いてをられるので、それにゆづります。私はこれまで二回オーストラリアを訪ねて取材しましたので、ここでは

前田氏が触れられなかった点を紹介します。

①八十三歳の老婆は肥後弁しか喋れず、通訳が困りました。記者たちが、「お母さん、今度オーストラリアを訪問する時には、英語が喋れるやうになって来て下さい」と言ったら、お母さんはすかさず、「今度私がオーストラリアを訪問するまでに皆さん日本語を勉強して、日本語が喋れるやうになって下さい」と答へました。これには記者たちも度胆を抜かれ、すっかりお母さんびいきになりました。この発言が動機で後に高等学校の選択教科に「日本語」が採用されるやうになりました。

②「英雄の母は詩を作る」といふ見出しをつけて、お母さんの歌の翻訳が次々に新聞に掲載され、言動も写真入りで報道されました。記者会見の時、ある記者が「お母さん、最愛の子供を失はれてさぞ淋しかったでせう」と同情的な質問をしました。それに対してお母さんは、「日本では天皇陛下に忠義を尽すことが、本当の親孝行なんです。私の息子は本当の親孝行をしてくれて、少しも淋しいとは思ひません、心から満足してをります」と答へました。子供を失って淋しくない親がをりませうか。しかし武士の母としてはさう答へるよりほかなかったです。それを知った記者たちは、翌日の新聞で「世界の軍人の母のシンボル」と讚へました。

その他母の語録は沢山あるのですが、詳しくは『昭和の戦争記念館』（展転社）の第五巻「昭和の大和撫子」の項に写真構成で紹介してあるので、それにゆづります。いづれにしてもオーストラリア国民を感動の渦に巻き込んだお母さんの訪問によって、佐藤総理の積み残してゐた外交案件は悉く解決しました。お母さんは税金を使はず、外交官試験を受けず、国際法を知らず、これだけの成果を挙げました。帰国した時私に、「教育勅語の精神で行つてきましたばい」と洩らされました。最も偉大な外交官を一人だけ挙げよと聞かれたら、私は躊躇なく八十三歳の老婆・松尾まつ枝さんを挙げます。

帰国した時、あるテレビ局が出演を依頼して来ました。その時テレビ局は、「お母さん、出演された時、何を言はれてもよいが、最後は『戦争は嫌だ』いふ言葉で結んで下さい」と頼みました。それに対してお母さんは、「そんならお断りします。戦争が好きなのをりますか。それでも無理難題を吹きかけられたら、やりたくない戦争もやらねばならない時があります。だから『戦争が嫌だ』といふ言葉は、口が裂けても言ひたくありません」と、断られました。

戦艦大和の号砲は何を訴へる

さてこれから野外に設けられた祭壇の前で慰霊祭を斎行します。お招きする英霊はどなたでせうか。具体的に言へば、私がここに紹介した松吉さんであり、ペリリュー島で玉砕した戦士たちであり、シドニーを奇襲した六人の勇者たちであり、それらに代表される無慮数百万の方々であります。

それらの英霊たちは天がけりつつ今何を思ふか。ここに戦艦大和が沈没する際に残した悲壮なる叫びともいふべき号砲の音を収めたテープがあります。これから皆様にお聞かせします。

いまスクリーンに、大和の勇姿と獅子奮迅する姿を写し出されてゐますが、戦艦大和は、排水量六万四千トン、四十六センチ砲九門を備へた文字通り（武蔵と共に）世界最大の戦艦でした。昭和二十年四月六日、「一億総特攻のさきがけ」たるべく、残存の第二艦隊（巡洋艦一、駆逐艦八）をもって「海上特攻隊」を編成。護衛機も搭載機も持たず、徳山沖を出航しました。乗組員たちは、「帝国海軍は最後まで戦った」といふ栄光を留めれば、それが我国無窮の礎と

なるに違ひない」と信じたのです。

翌七日正午、敵空母六、戦艦六、航空機延べ四百機に集中的波状攻撃を受け大和艦隊は勇猛果敢に応戦。満身創痍となつて大爆発と共に沈没。将兵三千七百名と共に、四百三十メートルの海底に沈みました。

最近は「宇宙戦艦ヤマト」となつて甦り、劇画や映画で活躍してゐますが、本当の大和は五十七年間海没したままです。

「大和」は今何を思ふか。我国の軍艦には「船霊」が宿り、どの船にも神殿が祀られてきました。世界最大の四十六センチ砲から撃ち鳴らす号砲と鎮魂のラツパは、我々に何を訴へてゐるのでせうか、瞑目合掌しながら聞いて下さい。これは慰霊祭の前に行ふ「降神の儀」でもあるのです。

講話

教育参考館紹介

東京防衛施設局調整官

山根

清



海軍魂の殿堂としての教育参考館

東郷平八郎元帥

広瀬武夫中佐

佐久間勉大尉

九軍神と松尾敬宇中佐

特別攻撃隊 回天

塚本太郎少尉の声の遺書

海軍魂の殿堂としての教育参考館

これから皆様が見学に行かれます教育参考館について説明させて戴きます。教育参考館は、大日本帝国海軍の魂の殿堂ともいふべき建物です。私がこの教育参考館を初めて見学しましたのは昭和五十五年春、防衛庁初任研修の時で、その際大変強い印象を受けた記憶がございます。それは、帝国海軍といふものを通して日本の近代とは何であったか、私達の祖父が如何に祖国の防衛のために戦って来たかといふことでした。

日本は島国です。海洋国家であることは日本の宿命です。その島国の日本が近代的な海軍を創るやうになった原因は、嘉永六年（一八五三）六月のペリーの黒船来航に起因します。蒸気機関で自由に航行でき、更に弾丸自体が炸裂するボンベカノン砲を搭載してゐた黒船は日本にとって大変な脅威でした。たった四隻の蒸気船で江戸の街を火の海にすることも可能でした。幕末の吉田松陰も勝海舟も欧米列強の持つこの黒船に対して脅威を感じ、近代的な陸海軍力の必要性を唱へました。

また、当時のアジア諸国の多くは欧米列強の植民地の状態にあり、日本は植民地にならな

いやうに強力な統一国家を創らざるを得ませんでした。明治維新後、營々と海軍力を整備した我国は、日清日露の戦役に勝利し、ワシントン、ロンドン条約締結時は世界の三大海軍国にまでなりました。さうして、この三大国であった英米と日本は戦ひ、そして破れ、大日本帝国海軍はその高貴なる歴史の幕を閉じます。その帝国海軍の貴重な資料や遺品がこの教育参考館には残されてをります。

ところで、教育参考館は現在の海上自衛隊第一術科学校、幹部候補生学校の校内にあります。これは明治二十一年八月に海軍兵学校が東京築地から此処広島県江田島町に移転されたことに由来します。帝国海軍兵学校は、米国のアナポリス、英国のダートマスと共に世界三大兵学校として有名でしたが、敗戦後は聯合國軍に接收され、昭和三十一年の返還後、海上自衛隊施設となつてをります。

校内にある教育参考館は、大正十五年三月に設けられた教育参考室が先魁ですが、昭和十一年三月には現在のギリシア神殿様式の建物が造られました。教育参考館は東郷元帥の遺髪が納められてをります東郷元帥記念室を中心として建設されてゐますが、この記念室の反対側には、海軍兵学校出身者の戦死公死者銘碑があり、明治十年から大東亞戦争まで四千余名の名前が期別に刻まれてをります。



東郷平八郎元帥

この教育参考館ゆかりの人物として先づ東郷平八郎元帥が上げられます。東郷元帥と申しますと日本海海戦の連合艦隊司令長官として余りにも有名です。明治三十八年五月二十七日、信濃丸からの通報を受け、露国のバルチック艦隊を日本海対馬沖に迎へ、東郷司令長官の率ゐる我連合艦隊はこれを撃滅しました。

参考館には東郷元帥に係る資料が幾つか展示されてをりますが、その中に聯合艦隊解散の訓示といふものがあります。これは、明治三十八年十二月二十一日、連合艦隊を解散する際に東郷元帥が訓示されたものですが、誠に名文で、当時の米国大統領セオ

ドア・ルーズベルトはこれを英訳させ、全海軍士官に読ませたといはれます。「二十閱月の征戦已に往時と過ぎ、我が連合艦隊は今や其の隊務を結了して茲に解散する事となれり」で始まるこの訓辞の最後は、「神明は、唯平素の鍛錬に力め、戦はずして既に勝てる者に、勝利の栄冠を授くると同時に、一勝に満足して治平に安ずる者より直ちに之を奪ふ。古人曰く勝て兜の緒を締めよと」で締め括られてをります。日本海海戦の勝利に驕ることなく平生の防衛努力の必要性を元帥は訓示されました。

広瀬武夫中佐

次に広瀬中佐について御説明します。明治元年五月二十七日、大分県竹田にお生まれで、明治二十四年にこの江田島の海軍兵学校を卒業されました。中佐は明治三十年八月、露国留学を命ぜられ、五年間露国で多くの人々と交友を広め、研鑽を積まれます。日英同盟が締結された明治三十五年に帰国されるのですが、その際、厳冬下のシベリアを馬橈にて単独横断を敢行されました。明治三十七年二月に勃発した日露戦争では、二月二十四日に第一次旅順港閉塞作戦に報国丸にて参加。旅順港閉塞作戦とは、旅順港に退避してゐる露国極東艦隊の

行動を封じるため、閉塞船を夜間出撃させ、旅順港口にこれを爆沈させるものです。三月二十七日の第二次旅順港閉塞作戦には福井丸にて参加し、引揚の際、部下の杉野兵曹長が見あたらないうちから、沈みゆく艦内を捜し求めます。三度捜したが見あたらなう、止むなくボートに移った直後、敵砲弾に当たり肉片一片をボートに止めて散華されました。軍神広瀬武夫といふ文部省唱歌は次のやうなものです。

一 轟く砲音 飛び来る弾丸 荒波洗ふ デツキの上に 闇を貫く 中佐の叫び 杉野は何処 杉野は居ずや

二 船内隈無く 尋ぬる三度 呼べど答へず さがせど見えず 船は次第に 波間に沈み 敵弾いよいよ あたりに繁し

三 今はとボートに うつれる中佐 飛び来る弾丸に 忽ち失せて 旅順港外 恨みぞ深き 軍神広瀬と その名残れど

この旅順港閉塞作戦について、広瀬武夫の書簡（明治三十七年三月二日 継母、義姉、叔父他宛）には次のやうに記されてをります。

「旅順港口閉塞ノ企アリ、武夫モ其実行者ノ一人タリ。豈ニ踴躍ノ至ニ堪ヘザランヤ。此行畢竟死ヲ決スル身ニシアレバ、万死アリテ一生ナキモノナリ」と作戰参加の決意を述べ、それが万死に一生もないものであるにも拘はらず「艦内（朝日ノミ）ニテ同行者ヲ募ル。応ズル者水兵部百十九人、機関部百十二人アリ。シカモ先ヲ争ヒ、懇請涙ヲ以テスルモノアリ。其取捨ニ於テ大ニ苦シム」と、軍艦朝日だけでも多くの水兵達が作戰に志願したことが記されてをります。

参考館には、第一次閉塞作戰決行に際し、血書、血判で提出された決死隊志願書がありません。志願者二千人の下士官、兵の中から七十七名が閉塞隊員として選抜されますが、我らの父祖たちが危険を顧みず、祖国のために戦った証として残されてをります。

広瀬武夫が戦死した際、露国の友人マリア・ペテルセンから義姉に手紙が届きました。「あの方は、愛する、尊い祖国のために英雄として死んでゆかれました。そしてあの方の思ひ出は永遠に、歴史の中に、御家族の心の中に、又多くの友の心の中に生きつづけて行くことをごぞいませう」と、そこには交戦国の友人から心からの弔意が記されてありました。

佐久間勉大尉

次に佐久間勉大尉についてお話し致します。大尉は、明治十二年九月十三日に福井県三方郡にお生れで、兵学校卒業後、潜水艇長となられた方です。ところが、明治四十三年四月十五日、第六潜水艇長として山口県玖珂郡新湊沖で半潜水訓練中に艇が沈没し、艇員十三名と共に殉職されます。十七日に艇は引きあげられましたが、艇内は整然として、全員が配置についたまま絶命してをりました。これは以前、欧米において同様な潜水艇事故があり、引きあげ後ハッチを開くと我先に逃れようとして出口に殺到して息絶える前例がありました。それに比べ第六号艇では最後まで職分を守って力を尽くしてゐた状況が明らかとなりました。さういふ中で、司令塔の覗き穴からの微かな光を頼りに佐久間艇長は遺書を鉛筆で書き残します。展示品の中に遺書の写真版がありますが、

「小官ノ不注意ニヨリ 陛下ノ艇ヲ沈メ 部下ヲ殺ス、誠ニ申訳無シ、サレド艇員一同、死ニ至ルマデ 皆ヨクソノ職ヲ守リ 沈着ニ事ヲ處セリ」

と艇を沈め部下を死なせた罪を謝し、乗員一同死ぬまでよく職務を守ったことを述べ、「唯

遺憾トスル所ハ 天下ノ士ハ之ヲ誤リ以テ 将来潜水艇ノ發展ニ 打撃ヲ与フルニ至ラザルヤヲ 憂フルニアリ」とこの事故により潜水艇發展が阻害されることがあつてはならないことを記してゐます。そして「謹ンデ 陛下 二白ス、我部下ノ遺族ヲシテ窮スルモノ無カラシメ給ハラン事ヲ」と部下の遺族が困窮しないやうお願ひするとともに、上官、先輩、恩師に告別、最後に「十二時四十分ナリ」で絶筆となつてをります。

九軍神と松尾敬宇中佐

次に九軍神と松尾敬宇中佐について御説明します。昭和十六年十二月八日、海軍航空部隊はハワイ真珠湾内の米太平洋艦隊を空から奇襲攻撃しましたが、これと時を同じくして、海から特殊潜航艇五隻が複雑な水路を突破し、米艦船を襲撃しました。特殊潜航艇とは実物が教育参考館正面入り口左側にありますが、伊号といふ大型潜水艦に搭載されてゐる豆潜水艦で、魚雷を二本持ち、二人乗りです。この特殊潜行艇で真珠湾攻撃に参加し、戦死された岩佐直治大尉、佐々木直吉一曹、横山正治中尉、上田定二曹、古野繁実中尉、横山薫範一曹、広尾彰少尉、片山義雄二曹、稲垣清二曹を九軍神といひます。獅子文六（本名岩田豊雄）の小

説に『海軍』といふものがありますが、これを題材に書かれてゐます。

後に特殊潜行艇でシドニー湾攻撃に参加される松尾敬宇中佐（当時大尉）はこの真珠湾攻撃の際、伊二二号に搭乗され、九軍神の御一人である岩佐直治大尉と永訣されます。そして、松尾中佐も昭和十七年五月、第二次攻撃隊として、シドニー湾攻撃隊に参加され、特殊潜航艇にて敵の艦船を強襲、戦死されます。ところが、敵国である豪州政府は「日本の遣り方は、我々にとり増悪に値するが、その国のために勇敢に死んだこれらの人達はまた別である」と交戦中にも拘はらず海軍葬を以て丁重に弔ひます。豪州軍のグールド少将は「余は諸君に問はむ。斯くの如き勇敢なる軍人に対し名譽的儀礼を与ゆべからずとするや。勇氣は一特定国民の所有物でも伝統でもない」と讃へました。そして交換船で昭和十七年十月遺族に遺骨が届けられました。

特別攻撃隊 回天

今からお話しするのは人間魚雷回天といふ、海からの特別攻撃作戦についてであります。

昭和十八年晩秋、黒木博司大尉（海軍機関学校五十一期）と仁科関夫中尉（海兵七十一期）の二

人の間に九十三式酸素魚雷を利用して人間魚雷の着想が生まれました。人間魚雷とは、魚雷に直接人間が乗り込み敵艦に体当たりする特攻兵器です。当初此の構想は上層部に認められませんでした。これに対し、黒木大尉は幾度も血書でもってその必要性を唱へられます。そして昭和十九年に山口県徳山市大津島に回天基地が設営され、訓練が始まりました。ところが訓練二日目の昭和十九年九月六日、悪天候下、新隊員に操縦を指導してゐた黒木大尉が乗り込んだ回天は、荒波に吞まれ海底に沈座してしまひます。回天の内で絶命するまでの十四時間、黒木大尉は事故の訓戒を含めた遺書を、後に続く者達のために書き残します。遺書の中で、事前ノ状況、応急処置、事後ノ経過を報告し、陛下に事故のお詫びを申し上げ、「今回ノ事故ハ小官ノ指導不良ニアリ、何人モ責メラルコトナク、又コレヲ以ツテ、○六ノ訓練ニ些カノ支障ナカラシコトヲ熱願ス」と事故の責任が自分の指導不足にあることを、また○六即ち回天配備の喫緊性を唱へます。「仁科中尉ニ、万事小官ノ後事ニ関シ武人トシテ恥ナキ様頼ミ候」と後事を頼み、次のやうな辞世を詠みます。

男子やも我が事ならず朽ちぬとも留め置かまし大和魂

国を思ひ死ぬに死なれぬ益良雄が友々よびつ死してゆくらん

酸素が薄れゆく回天の中で、黒木大尉は日本の将来を思ひ、後に続く友の名を呼びつつ殉職します。黒木大尉の遺書を読みますと先程説明しました佐久間艇長の遺書と驚く程似てゐます。三十四年の歳月を経て二人の魂が融け合つてゐるやうです。

仁科中尉は遺品の黒木大尉の手帳を読み、慟哭したといはれてゐます。しかしその翌月、昭和十九年十月下旬には、連合艦隊司令長官から回天に特別攻撃作戦が出されます。仁科中尉は回天搭乗員として母潜伊四六号に乗り、西カロリン諸島ウルシー泊地に赴きます。十一月二十日午前四時十五分、回天に搭乗した仁科中尉は史上未曾有の水中特攻の先陣をきつて敵艦に突進。その際、訓練中殉職した黒木大尉の遺影と共にあつたといはれてをります。この作戦で大型油槽船ミシシネワは撃沈され、巨大な炎と黒煙が天に上がったと米側報告にはあります。仁科中尉もまた祖国のために散華されました。

塚本太郎少尉の声の遺書

ここで皆様に「天翔ける青春」といふビデオを御覧頂きますが、この中に回天特別攻撃隊に参加された塚本太郎少尉の肉声が「声の遺言」としてレコードに録音されてをります。是

非本人の肉声を聞いて下さい。因みに塚本太郎少尉は慶応大学経済学部から予備学生になられた方で、学生時代は水球の選手として活躍されたとのこと。ビデオを御覧になれば分かると思ひますが、当時のごく普通の学生です。そのごく普通の学生が、戦争といふ事実に直面し、自ら死を覚悟して回天に搭乗され、命を捧げられたのです。「さようなら、元気で征きます」といふ塚本さんの最期の言葉には胸打たれます。平和な時代に生きてゐる私たちにとつて、このやうな戦時下の青年達が如何に戦場に赴いたか、その遺言を読むことは辛いことです。涙なくして読み難いのです。しかし、五十七年前の二十歳前後の青年たちが死を前提として如何に悩みながらも、祖国を信じ、日本の将来のために出征したかといふことを、平和な時代に生きる私達は学ばなければならぬと思ひます。忘れてはならないと思ひます。

体験発表

若い皆さんへ

亜細亜大学情報システム課長

平 楨 明 人



心の修練―三島水軍の「連歌」から

皆さんは、体を鍛へる、或いは体に良いことを何かされてをられるでせうか。大学生の皆さんの中には、運動部に所属されて大会を目指して厳しいトレーニングに取組んで居られる方もおられます。またジョキングをされたり、或いはフィットネスクラブ等に通はれてゐる方もおいでせう。

それでは、精神や心を鍛へるといふ事はどうでせうか。

合宿教室は明日で終了致しますが、もし御時間がありましたら同じ瀬戸内海に浮かぶ、大三島みしまをお尋ね下さい。愛媛県に属しますが、新幹線駅で申しますと広島駅から一つ東京寄りに戻りますと三原といふ駅があります。この三原駅からフェリーで約九十分の距離に大三島がございます。現在は、三原市の隣町尾道市から四国の今治市へ橋が架かりましたので、陸路でも可能です。

この島には三島宮大山おほやまつみ祇神社がございます。海の神様であり、戦いくさの神様でもある「大山祇の神」を御神体とする神社であります。

ここには、東郷平八郎元帥書の石碑が立つ「國寶館」があります。この中には、社宝が収蔵されて居りますが、我が国の国宝級の鎧兜・刀剣類の実に七割以上がここに治められてゐると言はれて居ります。と申しますのも、大山祇の神様は、戦の神様でもありますので、全国の武将が競ふやうに刀剣類を奉納した為であります。古くは、平安・鎌倉時代の武将から近くは江戸末期の武士たちの刀剣類までが現存して居ります。一見の価値のある品々が多くございます。

ところで、この神社には、鎧兜や刀剣類等の武器のみではなく、何万首にも及ぶ「連歌」が奉納されてをります。こちらは、瀬戸内海を基盤と致してをりました三島水軍の武将達が、詠んで奉納したものでございます。

「連歌」とは釈迦に説法かもしれませんが、我々がこの合宿教室で学んだ短歌を上句と下句に分けまして、二人で一首を詠み、それを続けていくものです。「連歌の会」が催されますと、主催者を囲んで、武将達が一座致します。主催者がその場で出す、賦物かしろもの(歌の題)について、参加者である武将達がこの賦物を心に留めて上句・下句、上句・下句と順に詠み続けて参ります。

短歌をお作りに成ってお分りかと思ひますが、題も無く自由に何を詠んでも良いといはれ



でも、一人で三十一文字の一首を詠むことさへ、私共は苦勞致します。まして、題が直前に与へられ、上句を詠み、或いは前の人に続けて、それに和して題から外れない下句を詠む事は、並大抵のことではありません。十数人或いはそれ以上の武将が居並び、一つの題に付いて、上句・下句、上句・下句と詠んで参ります。一首目と二首目或いは三首目と続く歌が全く関連の無いものでも、又同じものでも成りません。これを「輪廻に落ちる」と言つて、三島水軍の武将達は、最も忌み嫌つたさうです。また二順、三順として参ります。その歌が、何万首と奉納されて居るのであります。

何故このやうな、修練・鍛錬を三島水軍の武将達は、行つたのでせうか。

瀬戸内海は、太平洋や日本海と違って、湖のやう

に波静かな海です。しかし、瀬戸或いは水道と呼ばれる、島と島の、或いは島と陸地との間には流れが誠に急な所がございます。鳴門のやうに渦巻く所さへ有ります。湖と違って当然潮の干満があります。朝日を背にうけて敵に対するか、太陽に向つて攻めるか、敵の動き・作戦だけでなく、潮の干満・流れ、太陽、風、波等、時々刻々と変化する自然環境を常に頭に叩き込んでおき、臨機応変に対応していかなくてはなりません。

眼前の今の、敵・味方の情況だけに拘泥して居ると、あつといふまに不測の事態に陥り、自分だけの命ではなく、味方全体の滅亡にも繋がります。

連歌の上手うまくない侍は、将校には成れなれなかつたのであります。武にも秀ひいで、かつ連歌の上手い者が、船や船団の指揮を取つたのでありませう。

自分の乗る船だけに拘泥してゐては、大局はどんどん移つて参ります。大は今回の戦いくさで平家・源氏のどちらに付くかから、小は目の前の敵にどう対するかまで、武力だけでなく、心・精神の鍛錬を日頃から「連歌」を通して行つて居たのであります。

良き師に巡り合ふ

ところで、大学生活は、良き師に巡り合ふことが肝要かと思はれます。それは、大学の教師であれば勿論宜しいのですが、「読書尚友（古人を友とする）は君子の事なり」（吉田松陰・士規七則）と申します。歴史上の人物であつても宜しいですし、また立派な友人であつても宜しい訳です。

大学生活において、良き師に巡り合ふことができませんでしたら、非常に幸であります。

私事で恐縮ですが、倉前義男先生といふ方に大学時代お目に掛かることが出来ました。

初めてのご講義で先生は、「今回の戦争は我が国が侵略したと巷間言はれてゐるが、地図を開いてご覧なさい。千里万里のは波頭を越えてやってきたのは、我が国ではなくアメリカであることは一目瞭然です」とおっしゃり、中学・高校と日教組の先生方から教育を受けた一人として、頭を金槌で殴られる様な思ひが致しました。

又「エネルギーである石油を止められれば、必ず戦争になる。この事は現在でも変わらない」とも言はれました。先の大戦前、我国は石油の八割を又屑鉄の大半を米国から輸入してをり

ましたが、それを止められ、戦争に成りました。

エジプトがイスラエルの玄関口であるアカバ湾を封鎖する事で、勃発した第二次中東戦争（昭和三十一年）が然り、また湾岸戦争（平成二年）が然りであります。

地理政治学（地政学）といふ学問があることも初めて教はりました。

アメリカ海軍軍人であるマハン大佐が、世界はシーパワーとランドパワーの戦ひである。

如何なる国も、大海軍国と大陸軍国を兼ねることはできない。アメリカはイギリスに次いで大海軍を建設して海軍国となり、キューバ・ハワイ・フィリピンを占領して太平洋に覇をと
なへよと『海上権力史論』で訴へます。

アメリカはマハンにいふ通りに動きます。明治三十一年（一八九八年）凋落著しいスペインに米国は無理矢理に戦争を仕掛け、スペインからキューバ、フィリピン、 Guam を二束三文で強奪致します。明治三十三年（一九〇〇年）にはハワイを併合致します。

一方、明治維新を経て、近代国家となった我が国もマハンの優等生でありました。日清戦争で、台湾を、日露戦争で満州と朝鮮半島を、第一次世界大戦でマリアナ諸島を手に入れます。万里の波濤を越えてやってきたアメリカはここで始めて抵抗らしい抵抗にあひます。我が国とアメリカはぶつかるべくして、ぶつかったのであります。

国際情勢は、新聞で九割の情報が出てゐる。毎日丹念に読んで居ればわかる。但し国際面の小さな記事を大切に読み、一面の大きな見出しの記事は当てにはならないと先生はおっしゃいました。

誠に残念な事ではありますが、国際情勢はジャングルの掟がいまだに支配して居ります。つまり、力の強いものが勝ち、力が正義であるとおっしゃいました。

勉学の大切さ—インド大使のお話から

最近は、「ゆとり」とか、「個性」とか「生きる力」とかといふ事が、教育界でもキーワードとなつてをります。初等教育でもゆとり教育が盛んに言はれ、今年四月から新学習指導要領に基づく新教育課程による授業が開始されました。

皆様の中には、体育会クラブに属し、試合を目標に厳しいトレーニングに取組んでをられる方もおいででせう。試合に勝つ為には、「ゆとり練習」では対戦相手には敵ひません。厳しい自己管理の下、一日も休まず練習をこなしていかなければ成りません。

厳しい国際競争に勝ち抜く為には、初等教育で確り勉強させなければ成りません。のんび

り、ゆとりのカルチャースクールでは何も身に付きません。

精神の鍛錬・修養といふことは、初等教育である小学校のうちから身に付けなくては成りません。御存知のとほり、読み書き算盤が昔から大切にされてきました。江戸時代には四書五経の素読も行はれて居りました。

先日、私が勤務致します亜細亜大学で駐日インド大使から講演を賜りました。

そのお話の中で、インドは初等教育で、二十×二十までの九九を覚えさせてゐる。またヒンズー教の聖典である三万節からなる「リグ・ヴェーダ」を暗記させて居るとの事です。三万節の確認は致しませんでした。仮に三万字と致しましても、四百字詰原稿用紙七十五枚です。これがシリコンバレーで働く技術者の40%がインド人であり、NASAで多くのインド人が働いてゐる理由であると話されて居りました。

そのインド大使が『象は痩せても象である』といふ本を書かれて居られます。拝読するまでは、象とはインドのことだらうと思つて居りました。しかしさうではなく、象とは我国の事でありました。バブル経済崩壊後、十年を経て未だに呻吟してゐる我国へのエールであります。日本は大国である。象はインドでは大変尊敬されてゐる動物で、大きくて立派である。多少痩せてもその偉大さには変りはないといふ意味の諺ださうです。我国の「腐つても

鯛」に多少似て居るかと思はれます。大国日本は、また復活して、世界をより良い方向へリードして欲しい。インドも日本の良きパートナーとして、充分その役割を共に果たせるといふ内容であります。

さう言へば、先の極東軍事裁判で、唯一全被告無罪を主張されたインドのパル判事は、その後来日された折、「未だに日本の青年が自虐史観に囚はれて居る事に、私は耐へられない。一日も早く、自信を取り戻して頂きたい」とおっしゃられました。

フィンランドには、東郷元帥のラベルを付した東郷ビルがございます。トルコにも、東郷元帥の名前を冠した通りや公園があると聞きます。トルコは又、先の湾岸戦争の折には、大勢の邦人を危機一髪のところまでイラクからトルコ機でもって救出してくれました。

斯様に、世界は我国に大いなる期待を致して居ります。皆さん、我々は正しい事実、史実を把握して、世界の期待を裏切る事なく前進しようではありませんか。

皆様への期待

最後に、皆様の成長には御両親様の期待が有るといふ事をお忘れに成らないで頂きたいと

いふお話です。

私が、学生時代にこの合宿教室に参加させて頂きました折にも「短歌創作導入講義」がございました。前田秀一郎先生（現在、山梨医科大学教授）が御担当なされました。そのご講義で、松尾まつ枝刀自のお歌が紹介されました。ここ江田島の海軍兵学校で学び、やがて特殊潜航艇に乗って、シドニー湾に散華された御子息の松尾敬宇中佐をしのばれたお歌であります。

中佐は、敵オーストラリアの海軍葬で厚く弔はれ、御遺品が戦時中でありましたが、刀自の元に届けられます。その御遺品の中に「日曜も遊べざりけりあやかれと神まうでする母を思ひて」といふ中佐御自身の歌がございました。

この歌をご覧に成った刀自は、「菊池なる神のみいつにあやかれと祈りし母を偲びし子は」とお詠みになりました。

親元を離れて居られるお方の御両親は、皆様のご健康を祈って、陰膳を具へて居られるかも知れません。

皆様は、全世界から、身近な御両親様から、国民から、そして英霊から期待されて居るのであります。より一層の御努力に期待申し上げます。雑駁な話を終はらせて頂きます。

御静聴、誠に有難うございました。

体験発表

社会生活における
「学問と人生」

日章工業(株)代表取締役社長

藤 新 成 信



只今、ご紹介いただきましたやうに、現在、地元福岡県で九州工業大学の学生と一緒に、毎週、吉田松陰先生の『講孟余話』の輪読会に参加させて戴き、共に学んでをります。仕事の合間の僅かの時間ではありますが、私にとりましては自分の志のありかを確めると申しますか、本当に有難い貴重な機会を戴いてゐると感じてをります。

さてこれから、この合宿教室のテーマの一つであります「学問と人生」といふことについて、社会生活の中で私が体験しました事を通してお話してみたいと思ひます。

私の会社は、三年半前に亡くなった父が創業を致しまして、来年で四十年になる製造業です。ことし新設した新工場を加へて従業員約八十名の企業です。父は長年に亘る闘病生活があつたとは言へ亡くなるその日まで、社長として会社経営の第一線に立つてをりました。その父を失つた事は私共にとりましては大変な事態でございました。私は大学を卒業して、直ぐに父の会社に入り、約十五年間父の下で仕事をしてまゐりました。今では永く父と共にをられたことを心より感謝してをります。しかし、私がそのことを本当に有難いと感じるやうになりましたのは、極く最近のことです。振り返りますと、常日頃すぐ側に居り乍ら、父に対し感謝どころか、何かと菌向うやうな親不孝な心持ちを、何と永い間持つてゐたのかと反省をせざるを得ません。

黒上正一郎先生の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」といふ御本はかつてはこの合宿教室の必携の書でもあり、私の学生時代においても日頃の学生社会人の輪読会のテキストでありました。現在に至る迄、何度もくり返し拝読してまゐつた本です。学生時代から現在に至るまで、聖徳太子の御思想について、私はずっと心に留めてまゐつたのは、「和」といふことについてです。太子がお創りなつた「憲法十七条」の第一条は次の通りです。

一、に曰く、和を以て貴しと爲し、忤さかふこと無きを宗と爲す。人皆たひら黨あり、亦さ達れる者少し。是を以て或は君父に順まろはず、乍たちまち隣里に違たがふ。

然れども上和やはらぎ、下睦むつびて事を論あげつちふに諧かなひぬるときは、則ち事理おのづか自ら通ふ。何事か成らざらむ。

私にとりまして「君父に順はず」といふ一節は本胸に突き刺さる思ひがいたします。私が大学を卒業した十八年程前は、まだ好景気ではありませんでしたが、まもなくバブル期入らうとする時であり、多少上つついた時代であつたと思ひます。その後のバブル期にあつては、誰もが楽をして儲けることに疑ひや反省を抱かず、自分のあるいは人間の真の力を見誤



まり大いに過信した時代であったと思ひます。私は父の下で、しっかりと護られてゐたにも拘らず、目の前の成功・成果は自分の力によるものであると考へ、本当に思ひ上った気持で仕事をし続けてゐたやうに思はれてなりません。成功は自分の力、失敗は他人の所為にするといった具合に、全く自分の真の力、真の姿が見えてゐなかつたと思ひます。父が亡くなつて三年の間、それらの事は、当然痛切に自分の身に跳ね返つてまゐりました。

社内で起る事故や争ひごとと言つた互ひの足を引つ張るマイナスの出来事がなぜ起るのか、突詰めて考へますと、先程申し上げたやうな私自身の思ひ上つた心が原因であつたと今は強く思つてをります。毎朝、会社でお祭りしてゐる神棚を清め整へて手を合はせることは、父から受け継いだ日課なのですが、

現在では手を合はせる時、心の中で祈念致しますことは「安全、無事故、無病息災」といった会社の無事を祈りますが、加へて、「自分自身、会社の人を初め他の人の言葉をしっかりと聞くこと」、そして「他人の心も大切にすること」を祈念して、さはやかに一日のスタートを切るやうにしてゐます。元氣である時の父の言葉は勿論、会社の従業員の方の言葉も、しっかりと聞くことが出来ずにゐる自分の戒めとして始めたことです。私はこの江田島合宿に参加するために週末を含め四日間、会社を離れてをります。これは偏へに留守を守る社員とその家族のお蔭様であると心より感謝してをります。少しづつではありますが、社員の皆さんとの信頼関係が萌してまゐつたやうに感じられ嬉しく思つてをります。

私が自分の心を見つめ直す機会は学生との輪読会のほかにもう一つあります。それは、会社の机の上に掲げたある小さな新聞の切り抜きです。それを眺め乍ら我が身を振り返るのです。それは「徳川家康三方ヶ原戦役画像」と呼ばれるものですが、武田信玄との戦ひの直後の肖像画といはれてをり、通称「顰しかみ像」と呼ばれるこの絵は、名の通り憔悴した家康の大変醜い「顰しかめつ面め”をそのままに隠さずに描いたものです。三方ヶ原で散散に敗れ、命辛辛いのちからから浜松城に帰つた折の姿を表してをります。この新聞記事に小説家の池宮彰一郎氏が次のやうな言葉を添へてをられます。「麾下きかの全軍潰乱する中で、家康は必死に遁走を図り、幾度か絶

体絶命の危機に陥ったが、辛うじて主城浜松城に生還するを得た。その間、元来が小心の家康は、鞍上で大小便を垂れ流す程の恐怖を味わった。翌朝、信玄はあえて城攻めを避け、北辺の山路を西進し去った。折柄城内で軍議を催していた家康は、九死に一生を得た事を知る。

父亡き後、私が社長として采配してまゐった事には失敗や誤りが多く、「全軍潰乱」とはいかぬ迄も、企業経営者として大変苦しい経験をいたしてをります。それは人においても金においても技術においてもです。身から出た錆と申しませうか、十五年間もの間、父の下で仕事をしながらも学ぶべき大切なものを学んでをらず、又、人の声に充分に耳を傾けることの出来なかつたことの結果であると思ひ知らされた時、この家康の「顰み像」は、悟らぬ自分の姿に対して、自らの不徳と心得違ひを戒めるものとして、折に触れ見つめて、反省を致してをります。

近年はそのやうに毎日を過してまゐりましたが、次第に自分の心も落ちついて来たやうに思はれます。それはどういふ事かご説明するために、もう一つの体験をお話します。それは私が父から受け継いだものに、会社と共に家といふものがあつたといふことです。言ひ換へれば先祖から受け継いだ果たすべき役割と責任と言ふべきでせうか、父の生前には思つてもみなかつた大きな仕事があることに気づいた訳です。私の父は山口県の宇部といふ町に三

兄弟の三男として生まれ、それ故に学校を卒業して自ら実業の道に進みました。自分の意志で故郷を離れて事業を起し思ふやうに生きて来ました。しかし、兄達が自分よりも早く他界したこともあり、親族間の経緯から、故郷の田畑や一族の墓の守りをする事になり、同時に誰も住まなくなった家屋敷の相続を致しました。それらを引き受けて間も無く父は亡くなりましたので、その役割が私に受け継がれたといふ訳です。私は法事の折に墓参りをしたことがある程度で、先祖が生きて来た苦勞を何一つ知らずに、何をどうして良いか分からぬ俥に過ごしてをりましたが、一つ一つの事をこなし、先祖の声に耳を傾けるやうな氣持で、務めを果たしてまゐりました。故郷に生きて来た沢山の先祖の姿が自づと偲ばれて来て、不思議と心が落ちついてまゐつたと言ひますか、どうすれば良いかについて、知らず知らずの内に様々な知恵をいただいて、今日まで歩んでまゐつたやうな氣が致します。

私は父の言葉に対して、父は私の直属の上司でもあつた訳ですが、人の言葉を聞くことの出来ぬ、太子の言ふ「君父に順まっろはぬ」自分であつたことを、会社の経営といふ場において身に染みて感じました。又、同時に、家を継ぐ者としての役割、残された者の務めを果さうと努力する中に、自分の先祖と語らふやうな思ひの中で、自分は何の為に生きてゐるのか、人生の目的とは何かを否応なく考へさせられて来たやうに思ひます。さういつた時に、今まで

自分は何と社内の皆さんの声に耳を傾けて来なかったか、又、社内のあちらこちらで何と多くの人々が争ひ合つてゐるのが見えて来たやうな気が致します。日本の経済が益々厳しくなる中で、我が社は、そして自分は、何をしなければならぬか、一人一人が何をすべきか、何の為に働いてゐるかといふ原点に立ち返つた時、「上和ぎ、下睦びて事を論ふに諸ひぬるときは、則ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ」といふお言葉の通り、お互ひの信頼を取り戻し、知恵を出し合つて精一杯力を發揮していく以外にこの危機打開の道はないと強く感じてゐる次第です。自分の心が落ちついて来た、厳しさが底を打つたやうに感じ始めたといふことは、そのやうな私の心の裡の出来事なのです。

本年四月、私の会社があります同じ福岡県内は鞍手郡宮田町といふ所に新工場を開設し、新たに生産が開始されました。この新工場は十五年前に大手資本によつて開設された優れた工場であり、我が社にとって、ライバルとして互ひに競ひ合つて来た会社でした。近年の経済情勢悪化による経営不振を理由に三月に閉鎖されるに至つたこの工場を、我が社が買収し、旧従業員の大半の方々と共に我が社の新工場としてスタートを致しました。現在、半年を経て、本当にお蔭様で予想以上の良い成果を出してをりまして、亡き父を初め関係者に心より感謝してゐる処です。この事は、もとより私の力で出来たことではなく、人との出会ひのお

蔭であり、信頼を通して戴いた皆様のお蔭でありますし、一番に父のお蔭と想つてをります。同時に太子の言はれた「和」の精神の賜物であると思つてをります。

最近私が実践してゐる事の一つに、社員のお誕生日にお祝ひのケーキをお送りするといふことがあります。普段、感謝の意を尽せぬ処を、ほんの少しでも喜んで頂きたいと願つて始めた細やかなことですが、先日、新工場のある社員の方が涙乍らに喜んで下さったのを見て、私自身本当に嬉しく、新しい事業所が確かに生きづいて来た事を感じ心より有難く思つた次第です。又、私の心懸けとして、社内で気が付けば進んでゴミを拾つたり、掃除をしたり致してをります。この事は、経営者としては極く当り前の事と思ひますが、私にとつては、学生時代に、この合宿教室に参加して以来、学ばせて頂いてゐる長内俊平先生に倣つたといふべきでせうか。先生が私共学生を伴つて明治神宮参拝の折のことでした。参道にあつて自ら率先して喜々としてゴミを拾ひ乍ら歩まれる先生の御姿を拝見しました。それが臉に焼き着いてをりまして、その御心に学ばせて戴いてをるものなのです。

「学問と人生」といふことについて、取り分け私の仕事の世界においてどう拘つて来たかについて、言葉足らずですがお話しさせて戴きました。はなはだ意を尽くしませんが、この辺でお終ひにしたいと思います。午前中の山内健生先生の御講義の締め括りの中に「経済は

大変厳しいけれども、どうってこと無いですよ。日本には長い長い伝統、すばらしいバックボーンがあるので「すから」といふ旨の御言葉がありました。私の拙い話は、一言で申せば、思ひ上りはいけない、謙虚になることの大切さなどに気づいたといふことですが、日本の歴史の中に脈々と流れてゐる思想や文化は、先人達が己を練磨し、身につけて来られたすばらしい知恵の結晶であると思ひます。学問と申すならば大変大袈裟な言ひ方だと思ひますが、私はこの合宿教室に参加させて戴くといふ機縁を得て「生きた学問」を学ばせて戴いてゐると思つてをりまして、感謝に堪へません。

最後に、機縁といふことについて、松吉正資まさしさんの御歌をご紹介して私の話を終はりに致したいと存じます。松吉さんは、東京帝国大学在学中に学徒出陣をされ昭和二十年五月に特攻出撃で戦死された方ですが山口県の大島といふ、この江田島から遠くない瀬戸内海に浮かぶ島のご出身です。実はそこは私の母の故郷でもございます。終戦の年、中国より引き揚げてまゐつた母の一家は、故郷の大島で蜜柑をつくりながら生計を立てまゐりました。美しい島ですが、苦勞をして生きて来たであらう生活ぶりを偲ばずにはをられません。島を思ふたびに母達一家の働く姿が目に見えかねて来る気が致します。松吉さんにつきましては、名越二荒之助先生の御講話の中で紹介がありました。私は、もしかするとお会ひしたこともない、

この松吉正資さんに導かれて、この合宿教室に参加するやうになつたのではないかと思つてをります。ご冥福をお祈り申し上げますとともに感謝の微意も込めまして拝読させて戴きます。

故郷雑詠 瀬戸内海大海

松吉 正資

みんなみに向きて開くる入海の波平らかに風あたたかし
入海の岸辺にならぶ家並みの後ろにつづき山そびえたり
秋晴れのみ空にうかぶ白雲のかげをおとせりその山肌に
海かこむ山のふもとの蜜柑畑蜜柑熟れたり遠目にしるく

ご清聴有難うございました。

短歌入門

短歌創作導入講義

福岡市立香椎小学校教諭

是松秀文



短歌創作の意義——なぜ短歌を作るのか——

作歌上の留意点

- (一) 自分の体験を素直に詠む
 - (二) 体験したことをよく思ひ起し、詠まうとする対象に心を集中する
 - (三) 「一首一文」のひと続きの文にする
 - (四) 日常語の浅薄性を避け「文語」で詠む
 - (五) 「字余り」はまだいいが「字足らず」は好ましくない
 - (六) 「連作短歌」で思ひを歌ひ晴す
- 短歌を日常生活の中で活かす

短歌創作の意義 —なぜ短歌を作るのか—

最初に、短歌を作ることの意義について、お話したいと思ひます。短歌を作る意義は、三つあると思ひます。

一つ目は「自分自身の日常生活に気づくことができる」といふこと。二つ目は「自分の心の動きや体験を記録に残すことができる」といふこと。そして、三つ目は「日本の伝統文化につながる事ができる」といふことです。

では、最初に、一つ目の意義についてお話します。

一昨年の合宿教室の感想文集の中で、荒木さんといふ方は、短歌を作ることの意義について、次のやうに書いてゐます。

短歌をつくることによって、いかに自分が無感動、無気力、無関心な生活を送っているかに気づき、また逆に自分の心の底からわき出る一途な気持ちを短い言葉で正確に、素直に、他人に伝えることの難しさを学んだ。

つまり、短歌を作ることによって、自分の日常生活を見直すことができるといふことです。短歌を作っている時は、自づから、素直になり率直に、自分自身を見つめることになります。この時に、本来の自分自身を知ることができるのだと思ひます。

次に、二つ目の意義についてお話します。

短歌は、心の写真、アルバムであると思ひます。例へば、私は、四年前に次のやうな短歌を作ったことがあります。

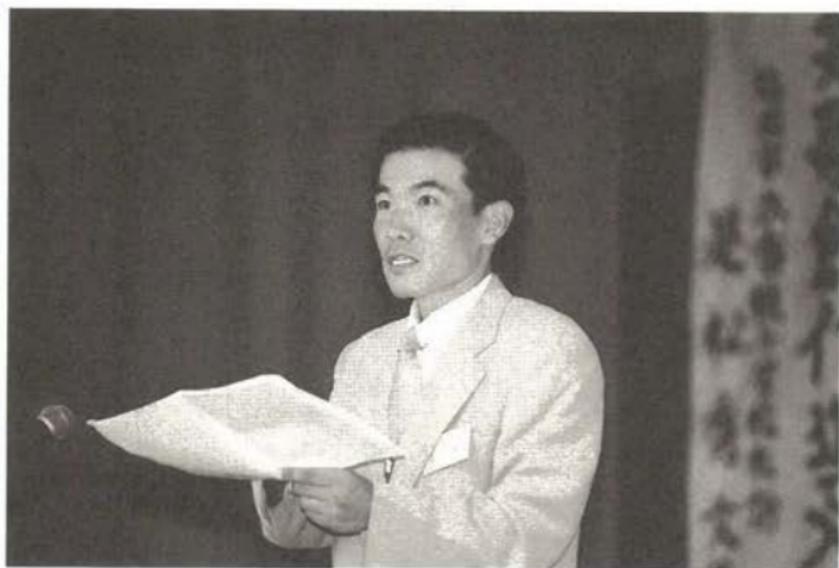
若杉山登山の折に

森深き山頂間近き散策路子らと歩みて話はずむも

声あげて一步二歩三歩と歩数数へゆく子らと登りし山道楽し

この短歌を読んでもゐると、その時、子供達と一緒に登山をした時の楽しかったことが自づと思ひ出されてきます。

『短歌のすすめ』の②「歌をつくる目的」の個所には、次のやうに書いてあります。



非常な感動を受けたときに、それを言葉に表現するということは、その感動というものを、もう一度自分自身で味わうことになるのです。しかもその味わうというのも、ただ感傷に溺れてはいけないので、それをはっきり言葉に表わすのです。すなわちこの経験の意味を、言葉に表現しようとしてとめることによって、その経験そのものを定着させてゆくのです。

つまり、短歌を作ることは、自分の経験を大切にしていって、言ひかへれば、自分自身を大切にすることにもつながっていくと思ひます。

最後に、三つ目の意義についてお話しします。それは、短歌を作ることによって、日本の伝統文化につながる事ができる、といふことです。

合宿教室案内のリーフレットの中に、小堀桂一郎先生の次の文章があります。

例えば、ざっと千五百年の伝統を有し、かつ現在にも生きている短歌、その美しさを知るだけでも、かけがえのない自己を主張できるのです。

短歌の美しさを知るといふことは、今まで自分が気づかなかつた世界に気づくといふことで、そしてそのことに、喜びを感じるといふことでせう。短歌の美しさを知るとは、自分が日本の伝統文化につながってゐるといふことに、気づくことだと思ひます。

例へば、次のやうな有名な短歌があります。

志貴皇子

石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりけるかも

氷も溶けて、春の光を一杯に受けた激流が岩の上をしぶきをあげて流れて行く、そのほとりに、萌え出たばかりのやはらかな蕨わらびの新芽が、そのしぶきを浴びて微かにゆれてゐる。

春を迎へた自然の命が、見事に表現されてゐる素晴らしい短歌です。

このやうな美しい短歌と出会ったり、短歌をつくったり、鑑賞したりすることが、即ち日本の伝統文化につながってゐるといふことに改めて気づいてゆくことになるのです。

作歌上の留意点

(一) 自分の体験を素直に詠む

(二) 体験したことをよく思ひ起し、詠まうとする対象に心を集中する

この二つのことは、短歌をつくる際に、とても大切な点です（ここで「家業の酪農を手伝ってゐる中学生による作歌の体験」を描いたビデオを上映する）。

三人の中学生は、自分の体験を素直な気持ちで、次のやうに詠みました。

寒い朝牛舎に入り牛達の前を通ると息で真っ白

牛達を牛舎に入れたら足りなくて牧場の奥まで探しに行った

場所とられえさを食べられない若牛にあとでこっそりえさやる父さん

日常生活の体験を思ひ起して、素直な気持ちで詠んでゐるので、子供達が一所懸命、手伝ひをしてゐる様子がよく伝はつて来ます。

(三) 「一首一文」のひと続きの文にする

次に、短歌創作上の留意点として、「一首一文」といふことがあります。一首一文とは一首は、ひと続きの文章にといふことです。昨年の合宿教室である学生は次のやうに詠みました。

日本のいまの愚かさ正すみち歴史の深さ見よと語る

この短歌は、第三句で切れてゐます。「日本のいまの愚かさ正すみち」と「歴史の深さ見よと語る」の二文になってゐます。また「語る」は、「語らる」と直す必要があります。この短歌は相互批評の際に、次のやうに直されました。詠んだ人も、すっきりした気分になつたことと思ひます。

日本の歴史の深さ学びつつ道を正せと語り給ひき

(四) 日常語の浅薄性を避け「文語」で詠む

次に、短歌にはどのやうな言葉を用ゐるかつまり「用語」の問題があります。大切なこととして、「自分の気持ちを素直に表す言葉をさがしていくこと」といふことがあります。また、日常語の浅薄性に陥らないやうに気をつける必要もあります。そして、短歌を作る際に、文語の持つてゐる美しさを学んでいくことも大切な点です。文語は単に古めかしい表現といふことで一蹴するのではなく、日本文化伝統の中心を為してゐるものであつて、口語表現にはない美しさと深さがあります。短歌は元来、文語の定型詩なのですから、仮名遣ひも歴史仮名遣ひが原則です。この機会を活かしてしっかり学んで下さい。

(五) 「字余り」はまだいいが「字足らず」は好ましくない

次に、「字余り・字足らず」の問題があります。短歌は原則として、五・七・五・七・七の三十一音（みそひと文字）の定型です。この三十一音の中にあてはめようと努めることが大切です。しかし、詠み込むことがあり余るぐらゐな感動がある場合は、「字余り」になる場合も出てきます。例へば

ものいはぬ四方の獸すらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ

この源実朝の短歌は、五・七・五・八・八となつてゐて、下の句が字余りです。しかし字余りになつてゐるために、かへつて、下の句に感動がこもつてゐて、とてもゆつたりとして莊重さを出してゐます。だから、「字余り」はそんなに神経質にならなくてもいいと思ひますが、「字足らず」は避けるべきです。語調が乱れるだけでなく、どうしても感動が浅くなります。

(六) 「連作短歌」で思ひを歌ひ晴す

最後に、連作短歌についてです。廣瀬誠先生(富山女子短期大学客員教授)は、次のやうに書いてをられます。

「短歌はあまりにも簡潔であるから、一首では言ひ尽くせぬ思ひをさらに一首詠む。する

とまた感興が湧き、さらにまた一首詠む。次にまたあり余る思ひを一首詠む。このやうにして連作短歌は自然に発生した。「いのちの律動に従って歌作すれば、連作になってゆくのが自然である。感あふるるままに興に乗って作る場合ほど連作になってゆく。」

(廣瀬誠先生著『和歌と日本文化』)

つまり、いろんな思ひを一首に詠もうとするのではなく、思ひの沸きくるままに、「いのちの律動に従って」、何首にも分けた方が自然に詠めるものです。

また、連作短歌は、自分の心の動きをありのまま表現していくわけですから、作り終った時に、「歌ひ晴した(詠み尽くした)」といふ心の状態になることが、とても大切なことだと思ひます。連作短歌の例を挙げてみます。

作者の川出麻須美先生は旧制七高教授のち、愛知大教授を務められた方で詩歌集『天地四方』ほかがあります。

故郷のゆふべ

檐^{のき}さきに蚊やりたきつ、母上^{をとめ}ゆ少女のうわさ聞くがたぬしさ

川出麻須美

針まなび郷さとにかへりしをとめらは今はおほむねとつぎしといふ
心なき夫つまにあへりしをとめ子のいたはし身の上きくに忍びず
うら若き妻くるしむるその男に我れ文ふみやらばあやしまれむか
あげしほのみち来る思おもひさまさむといでゆけど我が心なごまず
杖とりて草うちす、むはたけ道雲足たれて鳴り来くゆふさめ
松並木よこ吹く風かぜに道におちこ、ら光れるほたるこあはれ
羽根をれてつちにおつとも生けるまは光れほたるこあめのまにまに
音もなき田道いなみちにともる汝なが光くらき胸戸むなとをてらすがごとし

久しぶりに帰省した作者は母から幼少から知ってゐる近所の少女のことを耳にしたのでせう。すでに嫁いでゐる少女の話を初めは楽しく聞いてゐたのですが、「心なき夫」のもとで苦勞してゐる少女の様子を聞き憤りを覚えます。

以下、広瀬誠先生の御文章を拝借いたします。

そんなけしからん男に手紙でも出して「妻をいぢめるものでない」と戒めてやらうか。

までよ。そんなことをしたら「お前と何か関係があるのか」とかへって怪しまれて、一層悪い結果になりはせんか。……麻須美はやりどころのない憤りに燃え、じっとして居られず家を出て畑の中の道を歩きに歩いた。杖で草を打ち、薙ぎ倒しながら歩いた。その草に音を立てて夕立が降って来たが、麻須美は雨にぬれるのも構はず歩きまはった。

夕立一過。雨のなごりの風が横なぐりに吹きつけてゐる。松並木の下の道には雨風に打たれてたくさんの蛍が落ちて光って居た。その蛍の光は麻須美の暗い胸の内を照らすかのやうであつた。その気持ちを一気に歌つたのが「故郷のゆふべ」九首の連作であつた。

〔「国民同胞」昭和五十六年八月号〕

一昨年、私は父を亡くしました。入院した頃のことを思ひ起しながら、また在りし日の父を思ひ浮べながら「父に捧げる歌」と題して短歌を詠んで来ました。歌をつくつてゐると亡き父と再会してゐるやうな不思議な思ひがいたします。父を失つたことは私にとつてはとても悲しいことでありまして、「癌とわかり一人ベッドで暗き中寝ることの怖さいばかりかも」「あまりにも変り果てたる姿見て涙あふれて言葉出で来ず」等々、いま現在「四十八首」まで詠みましたが、まだ「歌ひ晴す」ことができません。自分の思ひを「詠み尽す」ま

で続けて作っていききたいと思つてゐます。

短歌を日常生活の中で活かす

皆さんが合宿教室で学んでゐることは、日常の生活と全く別世界のことを学んでゐるわけではありません。この合宿教室で学んだことと日常生活での体験をつなげていく努力をしていくことが大切です。短歌も同じで、日常生活の中で活かしていく必要があると思ひます。

私共は現代でも、日常生活の中で歌をしょっちゅう活かさなければならぬ。皆様が友達同士で文通するときも、現代の言葉でも結構ですから、相手のことを何か思ひ出して和歌を歌ひ掛け、それに返してあげるといふやりとりをお努め頂きたいのです。お互ひ同士なら腰折れでも構ひません。

(鎌倉合宿講話「うたごころ」『国民同胞』平成十四年二月号)

これは、鶴岡八幡宮の名譽宮司でいらつしやる白井永二先生が学生に親しく話をされた時

のお言葉ですが、とても大切な心掛けだと思ひます。

万葉集以来、そもそも応答の形が、短歌の本質であつて、相手があつてこそ、初めて短歌は生きてくるものなのです

実際、そのことを日頃、実践されてゐる例をご紹介したいと思ひます。

熊本在住の国民文化研究会会員が中心になつて「短歌通信」を定期的に発行されてゐます。この「短歌通信」は、短歌による心の交流が出来るやうにと、三十年近く前から始められた「青砥通信」を継ぐもので、「澤部通信」となり、さらに「短歌通信」となつたものです。最新号の「短歌通信」から、久保田真さんといふ高校の先生をされてゐる方の短歌をご紹介します。

パネル部門で優勝して（三年三組 短歌集より）

久保田 真

優勝と聞きて歓喜の声上がるこぶし挙げつつ跳び上がりつつ

Tシャツに思ひ思ひの言葉書き絵を描きをりし姿浮かび来

表情をあまり崩さぬ渡辺もさぞや喜びほほえみをらむ

久保田さんと生徒達の心の躍動が伝はってくる素晴らしい短歌だと思ひます。歌を詠むその人の精神生活が活き活きとしてゐるからこのやうないい歌も生まれてくるのだと思ひます。小林秀雄先生の『美を求める心』の中に、次のやうな一節があります。

言葉といふものは、勝手に一人で発明できるものではない。歌人でも、皆が使つて、よく知つてゐる言葉を取り上げるより他はない。ただ、歌人は、さういふ日常の言葉を、綿密に選択して、これを様々に組合せて、はつきりした歌の姿を、詩の型を作り上げるのです。すると、日常の言葉は、この姿、形のなかで、日常、まるで持たなかつた力を得て来るのです。

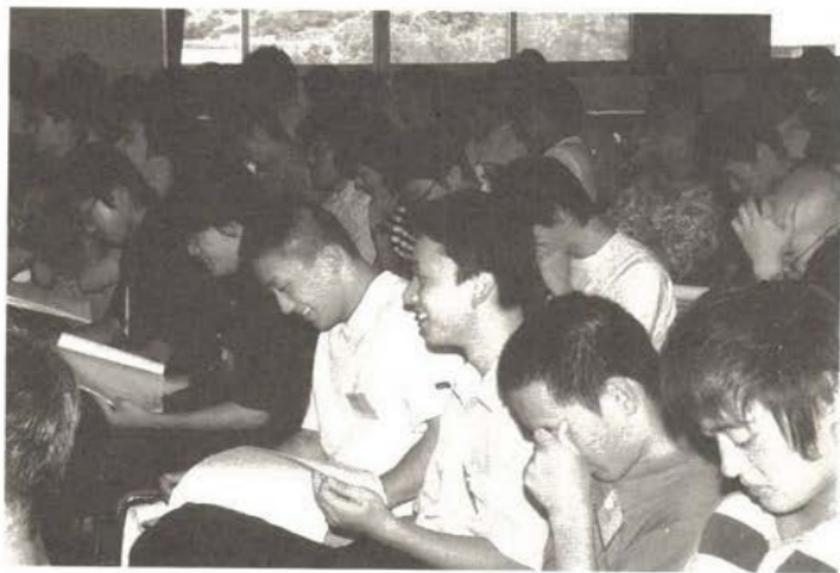
ここでは「歌人」と書いてありますが、皆さんにも共通して言へることだと思ひます。つまり、歌を作るのに、特殊な才能は必要ないのです。難しい言葉を使ふのでなく、素直な気持ちで、自分の思ひを詠むことで生まれた短歌は、必ずや読む人の心を打つに違ひないからです。

短歌入門

創作短歌全体批評

戸田建設㈱開発課長

青山直幸



はじめに

批評と添削

をはりに

はじめに

いよいよこの合宿教室で一番楽しいゴールデンアワーの時間が参りました。(笑)「歌稿」を手にして、ちょっとわくわく、嬉しいやうな恥づかしいやうな思ひをしてゐると思ひます。今朝ほど山内健生先生の御講義の中で歴史学者の坂本太郎先生が、その著『日本歴史の特性』の中で日本の文化伝統の特徴として“連綿性”を掲げられてゐると述べられました。短歌もまさに連綿性を保つてゐる芸術であると言へます。万葉の時代から、身分、職業、男女、年齢の差を乗り越えて国民すべてが思ひを短歌に託して歌ひ交はし、歌ひ継いで来たのです。近代に入ってから、短歌は文学のジャンルの一つとして認識されるやうになりましたが、短歌は個人的な文芸ではなく、共同で歌ひ交はしていくことに特徴がある国民芸術なのです。

皆さんは、これから班に帰って相互批評を行ふことになりましたが、各々の短歌について思ひが適切に表現されてゐるかを互ひに厳しく指摘してゆく中で不思議にも気持が通ひ合ふのを感じることでせう。皆で直した歌をもう一度声を合せて読み、味はってみると、きつと

いい知れぬ喜びが湧いてくる筈です。

批評と添削

それでは、皆さんの歌の中から、目に止った歌を選び、一緒に味はひながら私なりに感想をコメントさせて戴きたいと思ひます。選ばれた方は幸運ですね。(笑) ただここで採り上げる歌は、すべて良い歌とは限りません。問題がある歌、もう少し工夫を要する歌も含まれますので、私なりに作歌上のポイントを指摘していききたいと思ひます。それでは男子班の短歌から始めます。

○

暑き日差し浴びつつ沖へとこぎ出づれば風強く吹きて快よきかな
先をゆく船に追ひつかむとがんばるもこぐ手徒らいたづに疲れゆくなり

情景が、まざまざと浮かんでくるやうな歌です。作者の爽快な気分が伝はってきます。思



ひが一つに集中してゐて、なかなか良い歌だと思ひます。一首目の「こぎ出づれば」は、少々くどく感じられ、字余りなので「こぎ出せば」くらいの表現が自然でせう。「快よき」は、送り仮名が間違つてゐるので「快き」と直して下さい。

○

暑いのにやりたくないと思いつつ終わつてみれば
ちよつと満足

泣かまいと覚悟を決めて読みつつもなかなか読め
ん昔のことば

作者の人格が偲ばれるやうな歌ですね。素直でちよつと茶目っ気がある方のやうです。一首目の「終わつてみればちよつと満足」はかはいらしい表現で、

決して悪くはないのですが、短歌は、やはり「おしやべり言葉」では感動がうすくなります。思ひを適切に表現する為に、「言葉を整へる努力」が大切です。また最後の言葉が、体言止めになつてをり、余韻がなく、気持がプツツと切れてゐる感じがします。「終れば心の満ち足りてきぬ」と直してみたらどうでせう。

二首目の「昔のことば」は、やや抽象的な表現です。対象をより具体的に詠むことが重要です。「先人の文は」とした方が、より具体的になるでせう。「読めん」は読むことができなといふ意味でせうか、方言と思はれので「読めず」とした方が良いでせう。次のやうに直してみました。

暑ければやりたくなしと思へども終れば心の満ち足りてきぬ
泣くまいと覚悟決むれど涙溢れ読めずなりゆく先人の文は

○
炎天下皆の気持ちを一つにし大海原を進むカッター

気持が一つにまとまってをり、気分がスカッとするやうなさはやかな歌です。特に「皆の気持を一つにし」といふ表現は、素直で緊張感のある良い表現だと思ひます。ただ最後の言葉が体言止めになってをり、盛り上った気持がスーッと抜けてしまふやうな感じがします。「進むカッター」を「カッターこぎゆく」と動きのある表現に直してみたらどうでせうか？

○

江田島小用港にて財布を無くせし折

うろたへし我を氣遣ひ声をかけし人の優しさ我が身に沁みる

財布を無くしたことに気づいた時、本人は恐らくパニック状態に陥つてゐたこととせう。

「うろたへし我」にあせてゐる様子が伝はってきます。パニック状態になつてゐる時は、短歌など作つてゐる場合じゃないですよ。もちろん、後になつて詠んだんでせうが。(笑) 作者は、気が動転してゐる自分を氣遣ひ声をかけてくれて、一緒になつて財布を探してくれた人の心の優しさを鋭敏に受け止めてゐます。この感性は素晴らしいと思ひます。人生には、思ひもよらぬハプニングが起ることがありますが、さうした時いかに対処していくか、が大

事なのです。思ひもよらず不幸な事態に遭遇した時でも暗闇の中に煌きらめくやうなまごころに出会ふことがある。それを見逃さずに、しつかと心に受け止めて、真摯に人生に立ち向つていく姿勢が、この歌には感じられます。このやうなことが二度と無いやうに祈つてゐます。(笑)

○

教官の厳しき声にもはつきりと我らを思うやさしさ聞こゆ
かけ声を皆と合わせて漕ぐうちに自ずと手にも力入らむ

カッター漕ぎに懸命に取り組む姿がありありと浮かんでくるやうな力強い歌です。率直に自らの体験を詠んだ良い歌だと思ひます。教官の厳しい声の中に、優しい思ひを感じとつてゐる感受性は素晴らしいと思ひます。美しい景色を見てもポーッと見てゐるだけでは短歌にはなりません。江戸時代の国学者・本居宣長が「感づべきことに当りて感づる心」と言つたやうに、美しきものに鋭敏に反応すること、そして感ずるままを表現しようとする気持がなければ短歌はできません。作者は教官の厳しい声の中に、優しい思ひを感じて非常に嬉しかったのでせう。その嬉しい思ひが率直に表現されてゐます。最後の「聞こゆ」は余り適切な

言葉とは思へないので、素直に「感ず」とした方が良いでしょう。「思う」は「思ふ」です。

二首目も躍動感あふれる良い歌です。「入らむ」は「入りぬ」と直した方が引きしまった短歌になるでせう。「合わせて」「自ずと」は「合はせて」「自づと」です。

○

参考館を見学せし折に

今日の日をいついつまでも忘るまじ御国守りし大和魂

死を前にそれでも家庭を思ひやる若き生命は輝けるかな

皆さんも、参考館を見学され、海軍兵学校に縁のある方々の遺品、遺文を見て、大変感動したことと思ひます。この歌の作者もその中の一人だったのでせう。思ひを率直に歌ってをり、力の籠った歌だと思ひますが、表現上留意すべき点があります。まづ、第一首の下の句、「御国守りし大和魂」といふ所です。「大和魂」は、日本の先人達の精神を偲ぶ中でこそしみじみと実感できる言葉です。かうした言葉を安直に使ふと、歌ひたいと思つたことを概括してしまひ、歌の対象にそれ以上迫っていけなくなる恐れがあります。感動を短歌にしてゆ

くには、先人達の思ひに心を寄せて、できるだけ具体的に表現してゆく努力が必要なのです。「いついつまでも」は、少々歌謡曲っぽい表現なので、全体を次のやうに直してみました。

今日の日はゆめ忘るまじ国守る軍人達いくさびとらのまごころ知りて

二首目の下の句の「若き生命は輝けるかな」といふ表現はわかるやうで、わかりにくい抽象的表現です。心の感じるままをできるだけ具体的な言葉で表現した方が人の心に響く歌になると思ひます。「若き生命いのちは輝けるかな」を「若き兵士の輝きてみゆ」のやうに直してみたら如何でせうか？

次に女子班に入ります。

○

爽やかにシャンプー薫る夕暮れに風呂あがりのほほ優しい風

テレビのCMに出て来さうな、きれいで爽やかなイメージの歌です。一見、良い歌のやうに思われますが、実はこの種の歌は危険をはらんでゐるのです。女性の歌にはよく見られるのですが、きれいで舌ざはりの良い言葉を並べてロマンチックなムードに浸ってしまひ、ひとりよがりの歌に陥ってしまふ傾向が見受けられます。「シャンプー薫る夕暮れ」とは作者の実体験に基づく言葉なのか、単なるイメージ表現なのか、よくわかりません。この歌の主題は、「ほほをなでるやうに吹きぬける風の優しさ」にあるとすれば、「シャンプー薫る夕暮れ」といふのは、特に意味のない、装飾的な言葉といふことになるのでせう。私共は常日頃映像文化の中に慣れきつてゐますので、ついイメージで思考しがちです。短歌は自己の体験や感動を正確に言葉にしていく作業を経て生まれるものです。美しい言葉を書き連ねれば良いといふものではなく、厳しく言葉を選んでいくことが大切なのです。次のやうに直してみました。

湯上がりに涼みてをれば涼風のほほなでること優しく吹きぬ

ボートこぎ瀬戸内海の風受けて故郷の海をなつかしく思ふ

江田島で古き勇士の遺書を見てただ言葉なく涙流れる

自分の体験に基づいて、その感動をそのまま素直に歌ってゐて、大変良い歌だと思ひます。思ひを一つに定めて、一つの歌に表現するといふ「一首一文」の原則にかなつてゐて、作者の感動が読み手に直接伝はつてくる歌です。

二首目の最後の「流れる」は口語体なので「流るる」と直した方が良いでしょう。

次は社会人班です。

○

真剣な友の眼差し伝わりて疲れた体力みなぎる

作者の真摯な姿勢が感じられる、心のこもった良い歌だと思ひます。特に「友の眼差し」といふ言葉が素晴らしい。真剣な友達の眼差しをじっと見つめることは、これは簡単なやう

でさうできることではない。自分に心の迷ひがあるとどうしても目をそらしてしまひがちです。真剣な眼差しで語る友と友の眼差しをじっと見つめる作者との間には、きつと電流のやうに熱き思ひが流れたに違ひありません。「疲れた体」の後に「に」を入れた方が良いでしょう。「眼差し伝わりて」は少々不正確なので「眼差し見つむれば」とした方が良いでしょう。

真剣な友の眼差し見つむれば疲れた体に力みなぎる

○

江田島の空にはばたくつばめたち朝日を浴びて金に輝く

こんな素晴らしい情景があったのですね。つばめ達が、朝日を浴びて飛んでゐる瞬間を見事にとらへた歌です。「金に輝く」といふ言葉は簡潔ですが、実に色彩感覚豊かな表現です。海軍兵学校に学び、祖国の為に命を捧げた若き軍人達の魂がつばめになって帰還し飛んでゐるやうにも思はれる、素晴らしい歌だと思ひます。

それでは最後に国文研会員の歌の中で特に印象深い歌を御紹介しませう。

慰霊祭前後

山口県立下松高校教諭 寶 邊 矢太郎

戦艦大和の号砲とどろくとき戸外は雨となり稲妻光る

江田島に眠るみたまら号砲に哭きて天降り光りまらむ

みまつりのゆにはにそほふる雨あやし仕へまつることかなはざるかと

あなふしぎみまつりのとき近づけば雨やや細りてつひにやみたり

空とほく稲妻光ればなきみたまゆにはに帰ると思はざるべしや

みまつりををへてややあれば近き空稲妻光りて雷音とどろく

寶邊さんは運営委員長として、天候が悪化する中、慰霊祭が無事挙行できるか、どんなに心配されたことでせう。それまで強く降ってゐた雨が、慰霊祭の直前に急に止み、時折雷鳴が轟くものの祭礼はおごそかに行はれたのでした。稲妻の光に亡きみたまの帰還を感じるといふ不思議な体験を寶邊さんは自然に歌に詠んでゐるのです。紙面の都合で触れられませんが、この他、長内俊平先生、小柳左門さん、西山八郎さんの短歌も印象深いものでした。各自「歌稿」をお持ちですから、ぜひとも拝読して下さい。

をはりに

これから皆さん、班に帰って短歌の相互批評に入るわけですが、まづは短歌をじっくりと味はひながら、作者に歌をつくった時の気持をよく聞くこと、そして作者が何を詠みたいのかを確認する。その上でその思ひが適切に正確に表現されてゐるか、を指摘し合ひます。皆一緒になってよりの確な表現になるやう智恵を集めて直してゆくのです。さうするうちに作者自身も自分では気づかなかつた点に気がつくこともあるでせう。相互批評は自己の再発見でもあるのです。と同時に、互ひに助け交はしてより良い短歌へと創り直してゆく“共感の世界”であるとも言へます。

最後に、亜細亜大学名誉教授夜久正雄先生が『短歌のすすめ』の中で、短歌相互批評について次のやうに歌ってをられますのでこの歌をご紹介します終りにしたいと思います。

おたがひにうたのあやまちただしつなごむ心よ何にたとへむ

一年の歩み

——第四十七回合宿教室までの一年——

第四十七回合宿教室運営委員長

山口県立下松高等学校教諭

寶邊 矢太郎



平成十三年夏、霊峯富士の麓の御殿場での「第四十六回全国学生青年合宿教室」（富士合宿）の閉会式の直後、次年度の合宿教室の開催地が江田島（広島県）であることが参加者に知らされた。終了した安堵もつかの間、また次の第一歩が踏み出されたのである。「真正なる日本人、出でよ」とこの営みを継承してこられた諸先生方の多くは物故なされたが、「国民同胞たるの感激」を身を以てお導き戴いた学恩を胆に銘じ、また力強く進まんと、四十七回目の「江田島合宿教室」開催に向けて「運営委員会」が結成された。運営委員には、私のほかに、山根清氏・茅野輝章氏（関東以北）、天本和馬氏（関西）、横畑雄基氏（中国）、鳥生秀雄氏（四国）、小野吉宣氏・黒岩真一氏（九州北部）、折田豊生氏・山下哲也氏（九州南部）が選任された。第一回の運営委員会が平成十三年十月六日、合宿開催予定地、江田島で持たれた。

慰霊祭

富士合宿の終了から半月後の平成十三年八月十九日、福岡市の郊外、油山で長島秀男海軍中佐、寺尾博之海軍中尉の慰霊祭が斎行された。昭和二十年八月二十日、敗戦の責を負ふて御二人が自刃された場所は、油山の中腹東方に何一つさへぎるもののない見晴らしのよい高

台であった。毎年、御心を仰ぐ人たちによって慰霊祭が営まれてゐるが、六年前の五十年祭には、今は亡き川井修治先生、小林国男先生も列席なされ、盛大に執り行はれたことが思ひ出されてならなかつた。

また、同年九月二十四日、東京大神宮に於て、当会に關する師友のみ霊を奉齋する恒例の慰霊祭が厳修された。御遺族・会員・学生ら六十名が列席し厳肅に執行された。年年、御祭神の数が増えてゆくのは悲しくもあるが、この慰霊祭を殊の他大切に齋行して來られた諸先生方の御氣持ちを承け継ぎたいとの思ひを新たにしたのである。寄せられた数多くの献詠歌の中から少し御紹介したい。

亡き父（編注・青砥宏一先生）を偲びて

歌便り何にもまして楽しめと言ひし言葉を今も忘れじ

黒上正一郎先生に捧ぐ

遺されし書友らと声あげて誦する窓に虫も鳴くなり

島根県 青 砥 誠 一

青森市 長 内 俊 平

松吉基順先生

大東亜の戦いくさただしきを涙こらへ語りたまひき若きわれらに

東京都 打越 和子

岡村誠之先生の御霊に

今日もまた防人さきもりら集ひ師の君のしたためましし文かみしむ

町田市 太田 文雄

小田村寅一郎先生を偲びて

朝々に師の写真うっしまを仰ぎ見てけふの一日も励まむと思ふ（国文研事務所にて）

東京都 茅野 輝章

各地での会合

東京では平成十三年四月開塾した「国文研塾」に毎週学生が集ひ、合宿以後も合宿参加者を加へ、例会では『日本への回帰』等の輪読を行ひ、また「能」鑑賞などへのイベント参加を通して、日本の文化伝統と心、日本人の生き方を学んだ。大学間の枠を超えて「学問と人生」を探求する場として「塾」の意義は大きいものがあつた。また学生たちが寝食を共にし

て共同生活に励む「正大寮」を核に様々な勉強会が続けられた。一人発起すればその周りに志を励まし合ふ友が集ふ、さうして道統の火を点し続けて来たのが国文研の運動である。

福岡でも毎月「福岡国民文化懇話会」で、「太平記」の輪読や所感発表等を通じ、世代間を超え、学び合つて来た。特に九州工業大学では勉強会が学内サークルと認知され、吉田松陰の『講孟劄記』の輪読会が毎週継続され、活き活きと同信協力の輪を拡げた。また近隣の会員も輪読会に馳せ参じ、学生も大いに力を得たやうであった。

また、青森、関西、熊本、山口、愛媛でも地道な勉強会が継続された。

講演会・国民文化講座

平成十三年十月二十一日、「神戸海員会館」で、会員の布瀬雅義氏が「子供たちに自分の国を語れますか?」と題して講演を行ひ、十二名の関西地区の会員、少壮社会人、学生らも集ひ、熱心に耳を傾け、今後の活動の展開を期した。

また五期目を迎へた「国民文化講座」の第一回は講師に産経新聞論説委員・皿木喜久氏を迎へて十二月一日、「大手町サンケイプラザ」にて七十名の参加者を得て開催された(演題

「戦後教育で葬り去られた歴史・文化・伝統」。

講演の最中、内親王殿下御誕生といふ一報が会場内に走り、明るく和やかな薫風に包まれたのであった。九月のアメリカでの同時多発テロ、十二月の東シナ海での北朝鮮工作船との銃撃戦と、暗雲漂ふ平成十三年であったが、皇孫御誕生といふ歴史的慶事に沸いて新年を迎へたのである。

そして合宿の勧誘たけなはの頃、平成十四年五月十一日、同じく大手町サンケイプラザに於いて「若き諸君らに語りたくないこと——志高く生きよう——」と題して、アサヒビル名誉顧問・中條高德氏による講演（第五期「国民文化講座」の第二回目）があった。百二十名の聴講者を得、会場は満席の盛況であった。国民の意識の深い処での変動も予感されるほどで、主催者一同、心を熱くしたのであった。

東京地区の合宿

平成十三年十月二十六日から、二十八日までの三日間、鎌倉は「鶴岡八幡宮」に於て、東京大学三年の石村善之亮君らが中心となり、関東地区秋合宿が営まれた。当会副理事長・小

柳陽太郎先生の御講義をお聴きしたり、歴史情緒漂ふ史跡を散策、短歌創作など充実した研修となった。参加者は二十名であったが、小規模ながら学生手づくりの合宿に、学生の心意気が伝はってくるのであった。

またこの合宿には、九州工業大学からも二名が馳せ参じ、まさに「友よと呼べば友は来りぬ」であった。更に鶴岡八幡宮名誉宮司・白井永二先生の御講話「うたごころ」を拝聴出来たのは望外の喜びであった。

明くる平成十四年の春休みも東京の学生諸君の友を求め研鑽したいとの念止み難く、小合宿を決行した。三月五日、六日の両日、「神奈川県立三浦ふれあいの村」で、小田村寅二郎先生の生き方に学びつつ、「人と人との付き合ひ方」をテーマとした合宿で、十三名の参加者を得た。このときも九州工業大学から二名駆けつけたのであった。当会事務局長・山口秀範氏によって「若き日」の小田村寅二郎先生——学生諸君に伝へたい『志の原点』——と題して講義がなされた。小田村先生が昭和五年の夏休みの折に中学生（満十六歳）として参加された「カルホルニア学生見学団」についての山口氏の講義の一齣を以下御紹介したい。

とりわけ、外国で見る日系移民を「同胞」として強く意識し「桃島だ、同胞が働いてる

る。何とも言はれぬ嬉しさに包まれて車を出た」とご自身の「カルホルニア視察」に記してをられます。

この頃既に「排日移民法」は施行され、成功した日系移民にとつても日米関係の先行きに不安が兆してゐました。(中略)

やがて視察を終へて、帰港直前の船上から久々に見た故国の山河は「緑したた滴る」といふ表現そのままに「ああ日本は本当に風光にすぐれ、緑が美しいなあ」と心洗はれる思ひだつたさうです。(中略)

この二ヶ月の経験は言はば「志の原点」として、その後の小田村先生の生き方、考へ方に大きな影響を及ぼしたに違ひありません。

また関東地区の若手会員も江田島合宿への参加、江田島合宿勧誘に向け自分の気持を今一度見詰めるべく一泊二日の合宿が持たれた。平成十四年四月十三日、十四日の両日、開催地は防衛施設庁分室「代々木荘」で十九名が参集した。「聖徳太子の御本」の輪読、経済・国防・教育について実社会で働いてゐる会員の所感発表がなされた。会員の北浜道氏は会員合宿の案内文にかう記してゐる。

自分の日常を振り返りますと、その大半が目先の事への対応で占められてゐる事に気付かされます。そしてその中で頻りに思はれますのは、一寸立止り静かに自分と向き合ひたい、このままでは自分を見失ふのではといふ不安です。

毎年毎年、学生もさることながら、会員自身も初心に立帰るの思ひで合宿参加を決意するのである。参加者数は最後迄、蓋を開けてみなければ確定せず、実際に何名の規模になるのか薄氷を踏む思ひであった。その参加の意志も信を同じうする友と連絡する処から湧いて来るのであった。

ニューメディア

「五百羅漢ネットワークプロジェクト」(通称GNP)をすでに発足させてゐる当会も、インターネットの恩恵を十分に活用し、会員相互の連絡、意見交換を始め、「合宿教室」「国民文化講座」の案内、それぞれの申込みにも成果を上げてゐる。特に会員の布瀬雅義氏が主宰す

る「国際派日本人養成講座」は予てよりネット上に数万名の読者を持ち、健全な世論形成に独自の魅力ある発信源となつて貢献してゐる。

また福岡市内のFM放送を通じて流されるラジオ番組「ラジオ寺小屋」は、当会事務局長・山口秀範氏が企画し、コメンテーターも務め、「この方に学ぶ」「短歌を詠もう」等のコーナーで、時宜に叶つた情報を発信してゐる。放送済みの番組も手軽にインターネットを通じ聴取できることも嬉しく、本会事業に理解を示す層が広がつてきたことは、ニューメディアならではの威力であらう。そして昨年、「合宿教室」への産経新聞社からの後援が決つたことは、当会の活動への理解が広がつたことを意味してをり、少なからず勇気づけられたことであつた。

熊本でも会員の折田豊生氏が五月から「短歌通信」をネット上に発信し始めた。これは今は亡き青砥宏一先生の手書き謄写刷りになる「青砥通信」に端を発してゐて、それを澤部寿孫氏が受け継いで「澤部通信」となり、そして此度の折田氏を中心とする「短歌通信」となつた。全国の会員から寄せられた折々の歌をまとめて全国各地に発信するのだが、短歌のもつ力に励まされ、短歌の功德を沁み沁み思ふのである。

江田島へ

江田島は旧海軍兵学校のあつた由緒ある処で、その敷地内に「教育参考館」といふ建物があつた。その中には、明治以来幾多の艱難を乗り越えてきた先人たちの苦闘の歴史が開示されてゐる。此處を拝観するのも合宿教室の骨子と位置づけられた。

昭和六十年八月までは何も言はれなかつたのに、首相の靖国神社参拝に中韓が干渉し、それを結果とし日本側が受け容れて既に十七年の歳月が経つ。今年の八月十五日は果たして、どうなるのか。中国の要人は「やめなさい」と猶、高圧的である。自分の国は自分で守り、お国のためにしっかり働けと励まし、日本人の流儀で亡き人の霊を祀るのは独立国として当然のことである。このやうな屈辱に鈍麻してしまつた政府や多くのマスメディアの姿勢がまことに悲しいのである。

さて、江田島での第四十七回の合宿教室が近づいてきた。新しき友を得て祖国のかかへてゐる様々な課題の克服に力を合はせたいものである。そのためにも、祖国日本の伝統に根ざしつゝ、国際情勢の大勢にも目を向けた研鑽を重ねたいものである。

合宿教室のあらし



第一日目

(八月八日・木曜日)

第四十七回全国学生青年合宿教室は、広島県江田島町「国立・江田島青年の家」において開催された。江田島は、我が国近代史に燦然と光を放つ幾多の人士を輩出した旧海軍兵学校があつた土地である。瀬戸内を望む小高い山の、木々の緑に囲まれた素晴らしい環境のもとで、四泊五日の合宿教室はスタートした。北は北海道から南は九州に至る全国各地から学生・社会人が参集した。

開会式は予定通り午後三時から講義室で行はれた。早稲田大学法学部二年・高木雅史君の開会宣言で幕を開け、国歌斉唱に続いて、祖国日本のため尊い命を捧げられた全ての祖先の御霊に一分間の黙祷をささげた。ついで主催者を代表して本会の上村和男理事長は「間違つてゐることに対し論戦を避ける風潮は、外交においては国益を守らうといふ気概の欠如にながら、隣国に迎合するといふ憂ふべき事態を招いてゐる。祖先が国の為に歩んだ道を辿りながら、国を愛するということから各々の一步をはじめようではないか」と呼びかけた。続いて、参加者を代表して筑波大学大学院二年・寺澤知之君は「自分の思ひや考へを互ひに

ぶつつけあって、それを真剣に受け止めてくれる仲間がゐるといふ喜びを体験しよう」と挨拶した。

開会式のあと、それぞれの参加者は七、八名で構成された班に分れて、参加の動機を披瀝しつつ合宿に臨む思ひを語り合った。夕食後は「自分の目で世界を見よう 自分の心で歴史を感じよう」と題する導入講義が住友電気工業（株）生産技術部長の布瀬雅義先生によって行はれた。先生はまづ製造現場での製品不良対応の御体験を踏まへて、「先入観でものを見たり理論に安住するのではなく、事実を見て自分の頭で考へることが仕事のみならず全ての基本です」と述べ、「台湾は日本の『植民地』だったのだらうか」「台湾は『中国の一部』だらうか」と問題提起されつつ、自分の目と心で歴史を感じるやうに努めようではないかと訴へられた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義について班別研修を行った。講師の伝へたかったこと、重要なことは何かを話し合った。この研修は講義の終るつど行はれ、次第に班員相互の交流は深められていった。

第二日目

(八月九日・金曜日)

合宿の一日は「朝の集ひ」から始まる。今合宿の「朝の集ひ」は、「江田島青年の家」利用の他団体と一緒にに行はれた。すがすがしい空気の中、国旗掲揚の後、ラヂオ体操を行って、一日の研修を気持ち新たに迎へた。全体での「朝の集ひ」のあと、合宿教室の参加者には毎朝、次の短歌が紹介された。

明治天皇 (二日目)

をりにふれたる

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも (明治四十五年)

源 実朝 (三日目)

ながめつつ思ふもかなし帰る雁行くらむかたの夕ぐれのそら (『金槐和歌集』)

丈部稻麻呂 (四日目)

父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉ぜ忘れかねつる (『万葉集』)

松吉正資 (五日目)

ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人のなさけのあたたかきかな (昭和二十年、戦死)

二日目の午前は、短歌創作を兼たレクリエーションを前に、福岡市立香稚小学校教諭の是松秀文先生から短歌創作導入講義が行はれた。万葉集の歌を引きつつ短歌を作る意義と作歌上の留意点を説明され、歌を詠むことで深い思ひを「歌ひ晴らす」ことの先生の体験を語られた。

短歌創作の手ほどきを受けたあとのレクリエーションは、浜辺散策組とカッター体験組に分かれて行はれた。散策組はカッター研修施設付近の浜辺をそぞろ歩き、合唱をしたり沖のカッター研修を眺めたりしながら時間を過した。格納倉庫前に整列したカッター組は指導教官から裂帛の気合を浴せられた。それまで参加者を包んでゐた弛んだ空気が一変した。海上での安全を思へばこそその叱声であった。教官の指導の下、掛け声を掛け合ひながら漕ぐうちに、皆の気持ちもひとつになり懼も揃ふやうになって、カッターは面白いやうに水面を進んだ。貴重な体験であった。終了後、宿舎に戻った参加者は、早速、指を折りつつ短歌創作に取組んだ。

午後は「世界の中の日本の宿命」と題する京都大学教授の中西輝政先生の御講義を拝聴し

た。戦後の日本は、国として自分自身をきちんと守れる構造になつてゐない。国自体の存立が危ぶまれてゐると、危機的状况を詳しく分析されつつ、滞英中の御体験にも触れながら、「二十一世紀は文明が原点に回帰していく時代になるだらう」とグローバルな視点からわが日本のあり方を説かれた。

夕食休憩のあと、亜細亜大学教授の東中野修道先生の「吉田松陰の『士規七則』」といふ輪読導入講義が行はれた。初めに先生は、鎖国の掟を破つて留学を企てた松陰に対して、後にペリーが「命がけて知識を得ようとするこの青年は、烈しい知識欲と烈しい好奇心とを持つ日本人の特質から現れたのであり、またこれは氷山の一角に過ぎず、その氷山の下には、二人目三人目の吉田松陰が続いてゐる」と評してゐたことも紹介されて、「士規七則」の文章に松陰の熱誠と気迫を辿つて行かれた。

その後各班では班別輪読が行はれた。輪読導入講義を思ひ起しながら、紹介された『士規七則』の文章を、皆で声に出して読み味はつていった。幕末動乱期に生きた松陰の言葉から、その志や思ひを偲び、感じとる貴重な時間であつた。

第三日目

(八月十日・土曜日)

「朝の集ひ」で各参加者は胸一杯、新鮮な空気を吸った。三日目の午前は「明治の精神」と題する元九州造形短期大学教授小柳陽太郎先生の御講義からスタートした。先生は、まづ初めに、幕末期、日米修好通商条約の批准書交換のため渡米した村垣淡路守範正の堂々たる態度や謙虚で細やかな観察ぶりなどにお触れになった。そして、インドのタゴールとも交際のあった岡倉天心の言葉を引きながら、健やかな明治の精神をお示しになった。

昼食後、「教育参考館」の見学を前にして、防衛庁技官の山根清氏から、その紹介がなされた。その中で、五十七年前、当時の青年学生が祖国を信じ、日本の将来のために命を捧げられたといふ事実を、我々は偲ぶ必要があるのではないかと見学の意義についても語られた。夜は元高千穂商科大学教授の名越二荒之助先生から「世界に生きる日本の心」と題する講話を拝聴した。先生はまづ、学徒出陣し沖縄海域で戦死された松吉正資さんの文章や和歌を引用しつつ、戦時下の学生の心情と思想について自らの体験を交へつつ話された。そして、特殊潜航艇でシドニー軍港を奇襲して戦死した松尾敬宇大尉に対して、交戦中にもかかはらずオーストラリア海軍は敬意を表し、海軍葬を執り行った等々の国境を越えた交流譚を紹介



された。

その後、平時戦時を問はず祖国のために全生涯を捧げた数多の先人の御心を偲ぶ慰霊祭が、広場にしつらへられた斎庭で厳修された。慰霊祭に先立って、奥富修一理事が慰霊祭の趣旨と次第を説明した。心配された雨も直前にはびたりとやみ厳肅な雰囲気の中、厳修された。先づ、祓詞に代へて長内俊平理事が和歌朗詠を行ひ、ついで今林賢郁副理事長が祭文を奏上し、折田豊生理事が御製を拝誦した。合宿教室主催者の国文研上村和男理事長、後援の産経新聞佐伯宏明氏、寶邊矢太郎運営委員長の三者によって玉串拝礼がなされた。そして一同揃つての拝礼の後「海ゆかば」を斉唱した。かつて江田島に学んだ英霊達との感応交流が実感されるやうな荘厳な空気の中で慰霊祭は終了した。まもなくして雷鳴が轟き堰

を切ったやうに大雨が降った。

奏上された「祭文」と拝誦された「御製」を左に掲げる。

祭文

われらここ波静かなる瀬戸内に浮かぶ江田島に集ひ 第四十七回全国学生青年合宿教室を営みてはや三日目の夜を迎へぬ

真昼間の射指すが如き夏の陽はかくろひ 今し天つ日は沈みて夜のしじまに包まれし今宵平成十四年八月十日 涼風さやけき集ひの広庭を斎庭と定め きよめまつりてとこしへにみ国守ります遠つみ祖たち またみ国のために尊きいのちを捧げましし いくたのはらからたちのみ霊のみ前に ささやかなれども海の幸・山の幸くさぐさの品々をそなへまつり み霊なごめのみ祭仕へまつらむとす

み国いまだならぬさまにさまよひつづけ み国の内外憂ふべきまがごと数々おこりてみ国のゆくていよよ険しく いまにしてこのさま正さずば悪しきはひさらにしげくなりゆき み国まことに危ふしと胸ふたがれ憂ひいやますばかりなり

顧れば過ぎし大御軍に敗れし後 思想混迷を極めたる時代に わが大君にもろともに

まめやかに仕へまつらむと誓ひ　またみ国のいのちことはならむを祈りていとなみはじめたりし合宿教室は　はや四十あまり七つの回を重ねたり　いまこの江田島にくぬちより集ひ来りし友らは　み国の内外にみてるまがごとのことごとを打ちはらひ正さむと講義の聴講に　班別討論　古典輪読はたまた和歌の創作に　むらぎもの心かたむけ力合はせて学びつとめきたりぬ　ここに集ひしわれらはみ国のゆく末を思ひつつ行かむとする道はよしけはしくも　われらもろともに　おのおのもみ国まもらむ心を定めんとかたみに心を開き語りかはせば　われらの心はやうやく友の心に通ひはじめんとし　われらのいのちは　ただちにみ祖たちのいのちにつらなりてあるを覚ゆ

さはあれど　われらはわれらの努めなほいたらぬを嘆き　われらのまことなほ足らはぬを恥ぢつつ　いまよりは　いよよ心合はせて共に世に立つべき友となり　み祖たちにつらなりて言霊の幸はふこの美しき大和島根を　とことにはに栄ゆかしめむと誓ひまつらむ　天がけります汝みことたちのみ霊よ　われらの足らはぬ心のうちをうつしくみそなはし給ひわれらが願ひを導き給へ守らせ給へと　第四十七回全国学生青年合宿教室参加者一同に代はり　今林賢郁謹み敬ひ恐みも白す

平成十四年八月十日

御製拝誦

明治天皇

友

もろともいたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき

仁

國のためあたなす仇はくたくともいつくしむべきことな忘れそ

誠

言の葉にあまる誠はおのづから人のおもわにあらはれにけり

大正天皇

雷

鳴神のおと近づきぬ山のはに一村雲の立つとみしまに

行路蟲

村雨のすしぎ野道をわけくればくれぬさきより蟲ぞなくなる

夜雨

降る雨の音さびしくも聞ゆなり世のこと思ふ夜はのねざめに

昭和天皇

ともしび

港まつり光りかがやく夜の舟にこたへてわれもともしびをふる

千鳥ヶ淵戦歿者墓苑

國のため命ささげし人々のことを思へば胸せまりくる

聲

日日のこのわがゆく道を正さむとかくれたる人の聲をもとむる

今上天皇

一年を顧みて

豊年を喜びつつも暑き日の水足らざりしいたづき思ふ

阪神・淡路大震災

なるをのがれ戸外に過す人々に雨降るさまを見るは悲しき

戦ひの痛みを越えて親しみの心育てし人々を思ふ

第四日目

(八月十一日・日曜日)

合宿教室も四日目に入った。午前は「日本の国柄」と題する拓殖大学日本文化研究所客員教授の山内健生先生の講義から始まった。先生は、戦後的思ひ込みから離れて自由に伸びやかに、幾重にも張りめぐらされてゐるヴェールを取り去つて考へることの大切さを述べられた。そして、これまでの日本の歴史を事実にして静に振り返るならば万世一系の精神の系譜が事実裏づけられてゐることが浮上してくると、古代から現代まで連綿として続く「日本の国柄」の重みを強調された。

二日目のカッター体験の際、全参加者に課せられた短歌創作は一人の落伍者もなく、全員が詠んで提出された。それらはホツチキス綴りの「歌稿」に収められて各参加者に配られた。この歌稿にもとづいて、創作短歌の全体批評が行はれた。戸田建設(株) 開発課長の青山直

幸先生は万葉の昔から国民が互ひに歌を詠み交してきた歴史をまづ回顧されたあと、各班から一首を選んで丁寧添削されながら、「自分の思ひを見つめ、感動を具体的に正確に表現するやう努めることが大切である」と指摘され、班別批評では作者の気持ちを汲み取り、よりの確に表現するにはどのやうな言葉が良いか、皆で知恵を絞ってほしい述べられた。

班別の短歌相互批評では、歌を詠んだのは初めてといふ参加者も多かったが、皆、一人一人の歌に心を寄せて、作者の思ひに沿った正確な表現を求めて心を砕いた。人の思ひを正確に受け止めること、自分の気持ちを言葉に表現することがい如何に難しいかを体験することになった。それはまたお互ひの心が通ひ合ふ充実したひとときでもあった。

いよいよ最後の夜の日程に入った。若手の会員が日頃、どのやうな心組みで職務に取り組んでゐるかを語る体験発表が行はれた。最初に登壇した亜細亜大学情報システム課長の平瀬明人氏は、自らの学生時代の師との出合ひをふり返りながら、「事実・史実を把握して、自らの精神を鍛錬し、大い学んで欲しい。皆さまは全世界から・ご両親から・国民から・英霊から期待されてをります」と一層の発奮をと訴へた。

次に日章工業（株）社長、藤新成信氏が登壇して、三年前に父を亡くして、その跡を継いで経営者となつてからの胸中の思ひを「学問と人生」といふ合宿のテーマに沿つて語つた。

社員達と心ひとつに手を取り合って会社がやって行くことが何より大事で、それに全力を傾けてみれば怖いものはないと実感するやうになったと述べた。

厳しい日程を消化してきた参加者たちは屋外の篝火を囲んで、合宿教室の最後の夜を惜しんだ。「内省の重圧」を跳ね返すかの如く夜の集ひでは、班毎や大学別に趣向を凝らした出し物を繰広げられ、連日、午前から午後、そして夜まで研鑽を重ねてきただけに各参加者は大いに弾け楽しんだ。

第五日目

(八月十二日・月曜日)

いよいよ最終日、合宿教室の日程は残すところ午前のみとなった。ここでの学びを振り返りつつ合宿参加者に今後の奮起を促す合宿を顧みてでは、最初に登壇した小田村四郎本学会長(拓殖大学総長)は、導入講義からの日程を辿りながら、この合宿には一貫したものがあつたとして、それは、事実を正確に見つめ、自分が縦と横のつながりの中に生かされてゐることを体験的に知るといふことであつたと述べ、今後先人の言葉を直接味はふことに努めて頂きたいと訴へた。

続いて、寶邊矢太郎運営委員長は「昨夜の夜の集ひはどうでしたか。真剣に取り組んだからこそ大いなる楽しみを味はふことができたのです」と述べ、また「参考館でちつと遺書を読んだ沈黙の一時を心に刻んでおいてほしい」と語りかけ、慰霊祭前後の天候の急変を振り返って「あれほど不思議な経験をしたことはありません。皆さんが心がひとつに取り組んでくれたお蔭だと感じます。この島のみ霊も皆様の研修を支へてゐたやうに思ふ。勇気を持って邁進していただきたい」と述べた。

続いて合宿での経験を振り返って各参加者が思ひのたけを発表する全体感想自由発表の時間に移った。

「短歌相互批評で言葉の大切さと人の心にふれることの意味を体験的に知った。涙が流れるほどの言ひ尽せない喜びを感じた」「合宿での様々な講義が一つの大きな流れを形作るのを感じた。伸び伸びと生きるとはどういふことなのかを考へさせられた。しっかりと自分の見方を育てていきたいと思ふ」「自分の国への思ひを他者に伝えることが重要であり、さうした一つ一つの積み重ねが国を動かすと思ふ」「短歌の相互批評で皆が自分の歌を真剣に考へてくれた。ありがたかった」「五日前まで全く知らなかった人とは思へないほど、深い話が多かった」「自分がこの国の縦のつながりを受け伝へていかねばならないと思つた。勇気

を持って行動したい」「周囲の誤った考へと対抗できるだけの勉強を大学生生活の中で積んでいきたい」等々、次々に登壇して率直な力強い所懐が表明された。

いよいよ閉会式を迎へた。国歌斉唱の後、主催者を代表して磯貝保博副理事長は「戦後政策により世代間の生き方や考へ方に断層が出来てしまった。かうした問題を何とか克服したい、さうしなければ日本がだめになってしまう。そのやうな思ひから合宿が開始された」と合宿教室開催の初心を回顧しつつ、「松陰の言葉に読書尚友は君子の事なりとあるが、本を読むこと、友を尊び共に勉強する友を持つといふことは、志を持って生きようとする者にとって大切なことである。今後のお一人お一人の精進を大いに期待したい」と奮起を促した。次に参加学生を代表して九州工業大学四年・安土茂亨君が「この合宿で学んだ事をふだんの生活と関連づける事が大切だ」と語った。最後に國學院大学法学部三年・古川貫祐君の閉会宣言で全日程を終了した。

○

参加者の内訳

(学生班 四十八大学) (洋数字は参加学生数)

北海道大 1 北海道医療大 1 東北大 1 東北女子大 4 東北女子短大 2 宮城学院女子

大2 明星大2 麗澤大1 惠泉女学園大1 筑波大1 中央大2 亜細亜大4 慶應大4
東京大1 國學院大1 東京理科大1 学習院大1 杏林大1 明治大3 電気通信
大1 上智大1 日本体育大1 防衛大2 早稲田大4 人間環境大2 皇學館大3 京
都大2 京都産業大1 関西大1 関西学院大1 鳥取大1 島根大1 愛媛大1 九州
大2 九州工大6 人間総合科学大1 九州ルーテル学院大1 日本不動産学院2 福岡
大1 福岡工大1 福岡女子大2 九州共立大1 佐賀大1 熊本大2 中村学園大1
熊本学園大1 宮崎医科大1 首都師範大(北京)1 高校卒2
計 八十二名(うち女子二十二名)

(高校生班) 五名

(社会人・教員参加者) 五十六名(うち女子十一名)

(招聘講師) 一名

(国民文化研究会) 七十九名

(事務局) 十名 (写真) 一名

(見学参加者) 十名

総計 二百四十四名

8月10日(土) 第3日	8月11日(日) 第4日	8月12日(月) 第5日	
(起床)	(起床)	(起床)	6:30
洗面・清掃	洗面・清掃	洗面・清掃	7:00
朝の集ひ 班別散策 朝食	朝の集ひ 班別散策 朝食	朝の集ひ 班別散策 朝食	8:00
講義 小柳陽太郎 先生	講義 山内健生 先生	清掃 合宿を顧みて 国民文化研究会会長 小田村四郎 氏 合宿運営委員長 宝辺矢太郎 氏	9:00
質疑応答	班別研修	参加者による 全体感想自由発表	10:00
班別研修		感想文執筆及び 第二回短歌創作	11:00
昼食	昼食	閉会式 国民文化研究会副理事長 磯貝保博 氏	12:00
参考館紹介 山根 清 氏	創作短歌全体批評 青山直幸 先生	昼食	1:00
野外研修 教育短歌参考館見学	短歌相互批評 (短歌再提出)	解散	2:00
夕食 入浴 休憩 (短歌提出)	夕食 入浴 休憩		3:00
講話 名越二荒之助 先生	体験発表 平権明人 氏 藤新成信 氏		4:00
(慰霊祭の説明) 奥富修一 氏	夜の集ひ		5:00
慰霊祭			6:00
班別懇談	班別懇談		7:00
就床	就床		8:00
消灯	消灯		9:00
			10:00
			11:00

		8月8日(木) 第1日	8月9日(金) 第2日
		第四十七回(平成十四年)全国学生青年合宿教室「日程表」	
			洗面・清掃
			朝の集ひ 班別散策 朝食
			短歌創作導入講義 是松秀文 先生
			レクリエーション <div style="border: 1px dashed black; padding: 2px; display: inline-block;"> カッター体験 短歌創作 </div>
随時受付			昼食 (短歌提出)
開会式 (挨拶) 国民文化研究会理事長 上村和男 氏 オリエンテーション (合宿趣旨説明) 合宿運営委員長 宝辺矢太郎 氏 (諸注意伝達) 合宿指揮班長 鳥生秀雄 氏			講義 中西輝政 先生
			質疑応答
班別自己紹介 事務連絡打ち合せ			(記念写真撮影) 班別研修
夕食 入浴 休憩			夕食 入浴 休憩
合宿導入講義 布瀬雅義 先生			輪読導入講義 東中野修道 先生
班別研修			班別輪読
就床			就床
消灯			消灯

* 社会人短縮コース……集合 8月9日午後1:30
解散 8月11日午後4:30

合宿詠草抄



学生・社会人

合宿始まる

旅立ちに期待と不安をいだきつついざ江田島へ決意新たに
(社)福岡県中小企業経営者協会 萩原 眞之介

世の中の乱れを憂ひ集まれる友の多さに吾は驚く
(株)デノン 小笠原 俊晴

江田島で不安と期待抱きつつ仲間と共に学び始むる
東北女子短大 生活二年 安藤 恵

講義・講話

中西輝政先生の御講義を聞きて
佐賀大 理工四 片岡 正憲
公は己が身超えて目に見えぬものをかしこむ生き方なりしか

東中野修道先生の御講義を聞きて
東京食品販売(株) 大和 泰之
松陰の士規七則を読むたびに武士の志我受けつが

小柳陽太郎先生の御講義を聞きて

日本体育大 体育四 近藤雅美

師が語る明治に生まれし先人の謙虚な心我も学ばん

京都大 文四 服部源憲

遺米使節・村垣淡路守範正の日記を読みて（小柳陽太郎先生の御講義）

幕臣といへども神州日本の誇り背負ひていで発たるかな

自国への誇り持ちつつ真心を忘るることなき我が先人は

外国の人らを驚嘆せしめたる先人達の偉業を思ふ

名越二荒之助先生の御講話

明星大 文四 久田広光

松吉さん松吉さんと語らるる先生のみ声の心にしみるも

班別討論

亜細亜大 国際関係三 大橋広和

班員と心通はずもどかしく時計の針のみ進みゆきたり

日章工業(株)営業部 山下誠彦

講義終へ友と語ればいたらざる己を知りて心ひらかる

江田島に集ひし友らと語らへば己の思考の未熟さ知りぬ

京都大 総合人間一 中原有輝

輪になりて集へる友との語らひは我が胸内に希望となりぬ

熊本学園大 社会福祉二 折田成子

短歌創作

歌をよみ友と語りて気づかさるる言葉の内の深き重みを

熊本大 工一 坂口 晋

思ふこと三十一文字におさまらず我が未熟さを思ひ知らさる

東京大 文三 石村 善之亮

合宿で拙かれども歌詠めば創る喜びいや増して来ぬ

㈱オキ 香田 克己

心込め一首の短歌作らむと言葉探せど難しきかな

自由業 川口 大介

カッター漕艇体験

九州工業大 情報工三 大津健志

ひさびさに「静かにしろ！」と怒られてはづかしくもありうれしくもあり

防衛大 国際関係三 大野毅彦

短艇の操法難しかい權合はず権と格闘暑さ忘るる

日本不動産学院 建築一 野見山優亮

炎天下四苦八苦しつっこぐカッターしぶきをあげて波切り走る

明治大 文二 吉永博彰

教官の厳しき声にもはつきりと我らを思ふやさしさ聞こゆ

宮崎医科大 医五 宮元周作

かけ声を皆で合はせて漕ぐうちに自づと手にも力入らむ

思はずも身を正しけり指導員のかげ声厳しく響きわたれり

指導員の号令厳しく久かたに身をも心もひきしまりたり

高校卒業 新垣貞治

オールからふと目を上ぐれば大海を我カッターはぐんぐん進む

權たたく波からちぎれし波しぶき顔にかかりて汗と交りゆく

思ふより速く滑りしカッターは皆の力の結晶ならむ

明星大 大学院一 高橋 希久朗

瀬戸の海神がつくり島々の重なる姿に言葉うしなふ

教育参考館見学

福岡工業大 工一 近藤 将勝

海軍兵学校がっこうに一度入るとあちこちにひとたびますぐに伸びる松のありけり

人間環境大 人間環境三 角田 誠治

明日には死ぬ身なれども悔いなしと今をきたる姿雄々しき

回天に乗りて行くらむ大海の何処に光を見出しけるかな

明治大 理工一 小柳 雄平

我々とかはらぬ歳の軍人の御国を思ふ心に驚く

日本の男子のつとめ果たさんと記せし遺書に心打たるる

慶應義塾大 総合政策二 川上 裕 央

我が年と違はで征きし若人の豊けき心根仰ぎゆきたし

京都産業大 外国語四 大河内 ルデア

語らずも遺影の前に立ちし時赤き心の胸に迫りく

年を経て生きる時代は違へども継ぎてゆかなむその真心を

東北女子短大 生活二 中嶋 紘子

戦ひに征でゆく人の思ひをば胸に受けとめ進まん新しい道

福岡大 経卒 柴戸 喜子

日の本をただ守らむと戦ひし先人^{うし}らの心に涙あふるる

早稲田大 教育一 小林 由香利

戦士らの親思ふ心強きかなわれ先人に学ぶものあり

大阪大 文卒 安岡 一成

かくまでも戦ひ抜かれし先人に我らの世代も負けてはならじ

静岡県立沼津商業高校教諭 深澤 直 幸

至誠といふ文字は今なほ語りけり^{いさを}熱し思ひ聞けとばかりに

我が祖父母国を守りしその覚悟現世のわれらにせまりきたるも
杏林大 社会科学二 青木啓昌

慰霊祭

英霊の深きみ心身に沁みぬゆめ忘るまじ江田島の雨
三次市役所 高岡尚正

先人の想ひ伝ふるかのごとくひとつぶの雨背の上に落つ
慶応義塾大 商四 引地海

江田島で御霊に逢ふるうれしさに日本の明日への誓ひ新たに
産経新聞社 柴田眞佐

鳴る神も照覧あるか依代のさかきを濡らす雨は止まりき
ギャラリー源 清田進

警蹕けいひつの声厳かにこだまして夜のしじまあまくだに天降ります
元高校教員 古波蔵啓子

故郷を思ふ

東北女子大 家政二 皆川裕美

ポート漕ぎ瀬戸内海の風受けて故郷の海をなつかしく思ふ

宮城女学院大 生活文化二 桑原史織

江田島の海に我が身を抱かれて心に思ふは故郷の稲穂かな

小浜保育所 古賀若菜

きらきらと光かがやく江田島の海を見つめて故郷思ふ

学びの道

九州ルーテル学院大 人文三 野口寛記

一つ知りまた謎増えて霧の様やういつか晴るるらむあの空のごと

電気通信大 電気通信一 中島誉主也

日の本を仰ぎて見れば誇らしく先達の志を我も継ぎたし

主婦 安河内階子

なぎさより沖へこぎ出す思ひして出会ひの旅のありがきかな

先人の心は今も我が内にあると思へば心のみぬ

上智大 文二 青砥敬子

知らずして過ごし来たれどうれしくも日本の心学ぶをえたり

西部ガス(株) 内野伸一郎

敷島の道につながり我もまた日本人たる自覚あらたに

ツクダ商会 紹田照雄

全国の有志がつどひ江田島で先人の志共に学べり

福岡県立福岡高校 二年 馬場章央

新しき友と語りし言の葉は我が胸内に深く残れり

東北女子大 家政二 對馬周子

海原は大波うねり高かれど泳ぎ続けむ岸に着くまで

九州工業大 情報工二 小川剛史

情けなや我が生き方と比ぶれば先人たちの思ひはふかし

人間総合科学大 人間科学二 上田真一

筑波大 大学院二 寺澤知之
日は昇り歩き出したるこの道をただに信じてひたに歩まむ

決意

福岡女子大 文一 馬場智茶
先人の血潮受けつぐこの身なればその生き様を学びて伝へん

早稲田大 法二 穴井宏明
合宿で学びしことを後輩に伝えていかむと心に誓ふ

防衛大 人間文化三 鶴川優一郎
身を尽し祖国守りし先人の誠の心我も磨かん

九州工業大 大学院二 高橋俊太郎
英霊の国思ふ心偲びつつ我がなすべきを問ひつ歩まむ

麗澤大 経済四 栗原章
国のため日の本のために尽すこと学び続けていざ立ちゆかむ

慶応義塾大 文四 山口蝶子

父母の深き願ひ受けとめて力いつぱい生きたしと思ふ

宮崎宮 田村邦明

先人の守り固めし国をまた護るは我等の務めなりしぞ

慶応義塾大 理工四 堀江良明

同輩の熱い決意を耳にして我のこころもふるひたつかな

亜細亜大 大学院修了 清田直紀

日の本の国よくせんと志す人とのつながり広めてゆきたし

合宿終る

学習院大 法二 黒田康裕

良き友と共に学びし江田島を離るる時ぞ心身燃ゆる

ドコモサービス(株) 阿部良太

過ぎ去りし合宿の日々を振り返れば学びの楽しさ難しさを知る

日立製作所 日高廣人

合宿の始めは不安覚ゆれど気力漲り江田島を去る

九州工業大 情報工 安土茂亨

江田島で友と語りし五日間深き思ひで忘れたくなし

大学教官有志協議会・国民文化研究会

慰霊祭

国民文化研究会会長 拓殖大学総長 小田村 四郎

雷鳴の遠くとどろき稲妻の光る中にてみまつり進む

天がけるみたまに誓ふ祭文にわれらの思ひ奏しまつれり

雨やみてみたままつりのおごそかに行ひ得しを嬉しと思ふ

第二日、朝の集ひ

国民文化研究会顧問 ㈱宝辺商店取締役会長 寶邊正久

平らなる朝風見ゆる丘の上にいまひるがへる日本の旗

年月の思ひも深き江田島に若きと集ふ朝のすがしさ

思ふこと思ふがままに言ひてみむと大みうたとなふ声すみてきこゆ

国民文化研究会理事長 榎千代田コンサルタント相談役 上村和男

沖繩に散りし大田中將を偲ぶ

如何ならむ戦さになるを知りつ、も国民思ひいでたつ大人は
沖繩が最後のとりでとなるらむと思ふ心を偲ぶは悲し
ひたすらに沖繩の民思ひつ、戦ひつきぬを、しさ偲ぶ
最後まで電信うちぬ県民のしあわせ頼むとのちのちまでも
打ち終へて自らの生命絶ち給ふ雄々しき大人を偲びまつるも

カッター訓練

元九州造形短期大学教授 小柳陽太郎

この一瞬もゆるがせにせじと裂帛の気合こもれる号令すがし
力あふる、号令の声久々に心にしみてうれしかりけり
断乎たることばによりて衰へし大和心もよみがへるべし
号令の声にはげまされ若きらの動きもさらに力こもりつ
友らのカッター去りし海辺に真夏日のいそ、ぐ光たゞにまぶしき

江田島海上自衛隊教育参考館にて

熊本市役所 折田豊生

海に空にみ生命捨てしみおやらのみ名を連ねし壁に真向かふ
みくに思ふ強きまごころあまたありて守られきたりしわがみくにはも
ふるさとのみおやらもあればなほさらに胸のふるへて涙わきくる
みいくさにみくにのゆくすゑになふきみ生命ここだも失せにけるかな
みおやらのみあと辿りて我もまた数ならぬ身を尽くしまつらむ

この一年を

山口県立下松高校教諭 寶邊 矢太郎

江田島に友ら来たれといのりつつ準備しきたりこのひととせを
広やかなる道ともにゆくたぬしさの何ぞうれしき友よ来たれと
まがごとのおきるたびわがこころくじけなきかもとひとりなげきぬ
友しらの力めぐまれまがひとつひとつのりこえけふをむかへつ

参考館にて

株みずほコーポレート銀行 小柳 志乃夫

身を捨ててみ国護らせしますらをのかたみのふみをよめばかなしも

靖国の大き桜は我なりとみおやにのこせるみ言葉かなし

教育参考館にて広瀬中佐の展示を見る

戸田建設(株)

青山直幸

威厳ある面おもざしなれどまなこにはそこはかとなくやさしさの見ゆ

極寒のシベリアの地を馬うまざり櫓で横断したまふ気概すさまじ

旅順港を閉ざさむといふ企てに加はり指揮をとられし中佐は

砲弾の飛び交ふ中を我を忘れ部下の名呼びて探したまひぬ

情け深く誠実な心忘れじとロシアゆ文を寄せし乙女はも

外国の人も英雄と讃へたる広瀬中佐の士道美し

班員と共に

元佐賀県立佐賀商業高校教諭

末次祐司

ひとときのふれあひなれど語り合ひ通ふ心ぞ嬉しかりけり

目に見えぬ靈にひかれ相集ふ奇しき縁えにし尊かりけり

開会前の受付にて

関西熱化学(株)

天本和馬

待つほどに友らバスにて集ひ来ぬ合宿教室今始まりぬ

にこやかに並びある人らの中ほどになつかしき顔見えてうれしき

親しげに声をかけ来しその人は卒業以来のなつかしき友

その声を聞けばたちまち遠き日に共に学びし事の浮び来

若き日のおもかけ残すそのおもわに我の知り得ぬことも多かり

札幌西陵高校教諭

本田格

瀬戸内に浮かぶ小島の山道の傍そばに佇む小さき亀見ゆ

日本の国の宝のひとつとの真心学ぶひととき過ぎぬ

いにしへの人の気高く誇らかな心学ばん語り継ぐため

われもまたおろかなる身を忘れゐて若き人らと共に学びぬ

カッター訓練

鳥栖市役所

西山八郎

教官の厳しき声におのづから身のひきしまり話しに聞き入る

海に入りオールにぎりてこぎゆけどなかなかそろはずしぶきとびかふ
お互ひに声かけ合ひて友どちのオールに合はせてわれもこぎゆく
水を切るオールの先のうちそろひ水面みなもに入るときぞうれしき

合宿地に寄せられた歌

合宿に寄せて（八・七）

国柄を只守らむと集ひてしどちの祈りを継ぎ給ひてよ

（江田島兵学校での生活を偲びつつ。どちは達・同志）

舞岡八幡宮司

關

正臣

あとがき

第四十七回「合宿教室」は、去る八月八日～十二日（四泊五日）の間、「広島県安芸郡の「国立江田島青年の家」において大学生・社会人及び関係者、合計二四四名の参加者によって「祖国と慰霊と」を主テーマに真剣な研鑽がなされた。本書は、この合宿研修において繰り広げられた各種講義等を中心にその要旨を収録したものである。どうぞあらためて味読いただき、人生の葉としてまた、日本のあるべき姿をもとめるための指針として活用されんことを願ふ次第である。

さて、来夏で、四十八回目を迎へる「合宿教室」は、平成十五年八月七日（木）から十一日（月）の日程で、静岡県御殿場市の「富士のさと 国立中央青年の家」を会場として開催される。

東京大学名誉教授の小堀桂一郎先生や日本政策研究センター所長の伊藤哲夫先生を初め、諸講師の登壇が予定されてゐる。全国の学生、青年諸氏のご参加を願ひつつあとがきとする。

平成十四年十二月

編集委員 山内 健生

磯貝 保博

——日本への回帰——
(第38集)

平成十五年二月二十八日発行

定価 九〇〇円

送料 二四〇円

編者

大学教官有志協議会
麴国民文化研究会

編集委員代表

上村和男

発行所

麴国民文化研究会

〒一五〇一〇〇一 東京都渋谷区東

一十三一四〇二

TEL (〇三) 五四六八―六二三〇

振替〇〇一七〇―一六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替えます

大学教官有志協議会編
社団法人 国民文化研究会

